

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 654 集

う べ だて きた の こし
宇部館跡・北ノ越遺跡
発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2016

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財)岩手県文化振興事業団

宇部館跡・北ノ越遺跡 発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査



遺跡遠景（写真中央上部が遺跡範囲・東から）



調査区全景（北西から）



1・2号堀（北西から）



1・2号堀（南西から）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発に当たっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成26年度に行われた久慈市宇部館跡と北ノ越遺跡の発掘調査成果報告書です。今回の調査により、縄文時代の狩猟場、平安時代の集落、中世後期の城館とそれに付随する建物と墓塚が見つかりました。特に宇部館跡は、戦国時代末期に奥北地方最後の大規模な合戦となった九戸政実の乱との関係もあり、久慈・野田地域において注目される調査となりました。調査の結果、中世後半に特徴的な堀や土塁の痕跡が確認され、大規模普請の行われたことが判明いたしました。当地域では、久慈城と野田城が中世城館跡として広く知られておりますが、近年、久慈市山根館跡、野田村伏津館跡、同野田新館跡などの発掘調査も行われており、中世後期の城館跡の様相が明らかになりつつあります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県久慈市宇部町第3地割地内に所在する宇部館跡・北ノ越遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、「三陸沿岸道路建設事業」に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の調査成果の概略は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集「平成26年度発掘調査報告書」に公表しているが、本書の内容を優先するものとする。
- 4 本遺跡の岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡コード番号並びに遺跡略号は、以下の通りである。
宇部館跡 番号：J G50-0028 略号：UD-14
北ノ越遺跡 番号：J G50-0027 略号：KK-14
- 5 各遺跡の調査期間・調査面積（調査対象面積）・担当者は、以下のとおりである。

野外調査

宇部館跡

野外調査期間	調査面積	担当者
平成26年5月7日～ 平成26年9月19日	1,950㎡	米田 寛、濱田 宏、宮内勝巳、 佐藤直紀、藤田崇志

北ノ越遺跡

野外調査期間	調査面積	担当者
平成26年5月7日～ 平成26年9月19日	7,550㎡	米田 寛、近藤行仁、佐藤直紀

室内整理

室内整理期間	担当者
平成26年11月1日～平成27年3月31日	米田 寛

- 6 野外調査での遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付職員が担当した。
- 7 本報告書の執筆は、第1章第1節を国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所が、その他を米田が執筆し、編集は米田が担当した。
- 8 出土遺物の鑑定・分析・保存処理業務委託は次の機関に委託した。
地形図作成測量業務……………北栄調査設計株式会社
放射性炭素年代測定……………株式会社 加速器分析研究所
種子・炭化物同定分析……………古代の森研究会
なお、縄張図作成に際し、室野秀文氏（盛岡市教育委員会）より実地作業での指導及びご助言をいただいた。
- 9 本遺跡の調査及び本書作成に際し、以下の方々の協力を得た（敬称略、順不同）。
千葉啓蔵・中野教夫（久慈市教育委員会）、井上雅孝（野田村教育委員会）、
室野秀文（盛岡市教育委員会）

10 本報告書に掲載した地図は以下の通りである。

国土交通省国土地理院 1：25,000地形図「陸中野田」(NK-54-18-4-1・3)

国土交通省国土地理院 1：50,000地形図「陸中野田」(NK-54-18-4)

11 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

(1) 図版構成

遺構図版は、宇部館跡が土塁・切岸・堀の順番で、北の越遺跡が竪穴建物跡、掘立柱建物跡、コマド状遺構、陥し穴状土坑、中世墓壙、土坑、柱穴群の順で種類ごとに掲載した。遺物図版は、種別ごとに掲載した。遺物番号は、各遺跡で図版と写真図版とも同一番号とした。

(2) 図版縮尺

- A) 遺構図版 遺構平面・断面は1/50を基本とし、大型遺構については1/60・1/100など適宜変更し、版面にスケールを付した。
- B) 遺物図版 縄文土器、土師器、輸入磁器、礫石器：1/3、剥片石器：2/3を基本としている。
- C) 写真図版 遺構・遺物とも縮尺不定である。特に土師器は、立体復原資料を優先して全体形状把握可能な任意サイズで掲載した。

(3) 図版凡例

図中に使用した記号とアミ掛け濃度の凡例は以下のとおりである。それ以外については図版ごとに凡例を示している。

<遺構>

	地山
	縄・石、炭化物範囲
	焼土範囲

<遺物>

	土師器黒色処理
---	---------

目 次

I 調査に至る経過	
1 調査経緯	1
2 調査経過	1
II 立地と環境	
1 遺跡の位置	2
2 地理的環境	2
3 歴史的環境	2
4 基本層序	10
III 調査・整理の方法	
1 野外調査	12
2 室内整理	12
IV 宇部館跡	
1 概要	14
2 検出遺構	14
3 出土遺物	
(1) 縄文土器	15
(2) 輸入磁器	15
(3) 石器・石製品	15
(4) 古銭	15
4 現況調査	
(1) 現況	15
(2) 周辺地形の考察	16
V 北ノ越遺跡	
1 概要	26
2 検出遺構	
(1) 竪穴建物跡	26
(2) 掘立柱建物跡	31
(3) カマド状遺構	31
(4) 陥し穴状土坑	32
(5) 中世墓塚	36
(6) 土坑	38
(7) 柱穴群	39

3 出土遺物	
(1) 土師器	39
(2) 輸入磁器	39
(3) 石器	39
(4) 古銭	39
(5) その他	39

VI 自然科学分析

1 北ノ越遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	66
2 北ノ越遺跡から出土した炭化種実	68
3 分析結果所見	70

VII 総括

1 調査成果概要	
(1) 宇部館跡	71
(2) 北ノ越遺跡	71
2 遺構	
(1) 宇部館跡の遺構	71
(2) 竪穴建物跡	71
(3) 掘立柱建物跡	72
(4) 陥し穴状土坑	72
(5) 中世墓塚	72
(6) 土坑	72
(7) 柱穴	73
3 出土遺物	
(1) 縄文時代の遺物	73
(2) 土師器	73
(3) 輸入磁器	73
(4) 石製品	73
(5) その他	73
4 宇部館跡の現況測量成果と発掘調査成果	73
5 周辺の中世城館との比較検討	74
6 宇部氏及び野田氏系図の検討	
(1) 宇部氏系図について	75
(2) 野田氏系図について	77
(3) 課題	78
7 宇部館跡破却に至る経過	79
報告書抄録	113

図版目次

第Ⅱ章	第17図	3・4号竪穴建物跡(1)	42
第1図 遺跡位置図	第18図	3・4号竪穴建物跡(2)	43
第2図 周辺地形分類図(1/50000)	第19図	5・6号竪穴建物跡	44
第3図 周辺遺跡分布図	第20図	7・8号竪穴建物跡(1)	45
第4図 周辺の城館分布図	第21図	7・8号竪穴建物跡(2)	47
第5図 基本土層	第22図	1号掘立柱建物跡	48
	第23図	2号掘立柱建物跡	49
第Ⅳ章	第24図	1号カマド状遺構、 1・2号陥し穴状土坑	50
第6図 周辺地形図	第25図	3・4号陥し穴状土坑	51
第7図 地籍図	第26図	5～8号陥し穴状土坑	52
第8図 縄張り図	第27図	9・10号陥し穴状土坑	53
第9図 遺構配置図	第28図	11～14号陥し穴状土坑	54
第10図 1・2号土塁・1号切岸・1号堀	第29図	15・16号陥し穴状土坑	55
第11図 2号切岸・2号堀	第30図	1～4号中世墓壇	56
第12図 縄文土器、輸入磁器、石器、石製品	第31図	1・2号土坑	57
第13図 古銭	第32図	柱穴群	58
第Ⅴ章	第33図	土師器(1)	60
第14図 遺構配置図	第34図	土師器(2)	61
第15図 1号竪穴建物跡	第35図	輸入磁器、石器	62
第16図 2号竪穴建物跡	第36図	古銭	63

表目次

第Ⅱ章	第10表	2号竪穴建物跡土層観察表(2)	41
第1表 周辺の遺跡一覧	第11表	3号竪穴建物跡土層観察表	43
第2表 宇部館跡周辺の城館一覧表	第12表	5・6号竪穴建物跡土層観察表	44
第Ⅲ章	第13表	7・8号竪穴建物跡土層観察表	46
第3表 遺構名新旧対応表	第14表	7・8号竪穴建物跡内ビット観察表	46
第Ⅳ章	第15表	1号掘立柱建物跡柱穴観察表	48
第4表 1・2号土塁、1・2号切岸、1・2号 堀土層観察表	第16表	2号掘立柱建物跡柱穴観察表	49
第5表 縄文土器、輸入磁器観察表	第17表	1号カマド状遺構土層観察表	50
第6表 石器、石製品観察表	第18表	1～4号陥し穴状土坑土層観察表	51
第7表 古銭観察表	第19表	5号陥し穴状土坑土層観察表	52
第Ⅴ章	第20表	6・8～10号陥し穴状土坑土層観察表	53
第8表 1号竪穴建物跡土層観察表	第21表	11～16号陥し穴状土坑土層観察表	55
第9表 2号竪穴建物跡土層観察表(1)	第22表	1～4号中世墓壇土層観察表	56
	第23表	1・2号土坑土層観察表	57
	第24表	柱穴群構成ビット観察表	59
	第25表	土師器・輸入磁器観察表	64
	第26表	石器観察表	65

写真図版目次

巻頭カラー写真1 遺跡遠景(航空写真)	写真図版12 2号竪穴建物跡(1)	95
巻頭カラー写真2 宇部館跡1・2号堀断面	写真図版13 2号竪穴建物跡(2)	96
宇部館跡	写真図版14 3・4号竪穴建物跡	97
写真図版1 航空写真・1・2号堀 遠景	写真図版15 5・6号竪穴建物跡	98
写真図版2 1号堀	写真図版16 7号竪穴建物跡(1)	99
写真図版3 2号堀	写真図版17 7号竪穴建物跡(2)	100
写真図版4 1・2号堀 断面	写真図版18 7・8号竪穴建物跡	101
写真図版5 1・2号土塁	写真図版19 1・2号掘立柱建物跡	102
写真図版6 1・2号切岸	写真図版20 1～4号陥し穴状土坑	103
写真図版7 八幡神社 主郭 1・2号堀現況 現地説明会風景	写真図版21 5～8号陥し穴状土坑	104
写真図版8 宇部館跡関連資料写真	写真図版22 9～12号陥し穴状土坑	105
写真図版9 縄文土器、輸入磁器、石器、石製 品、古銭	写真図版23 13～16号陥し穴状土坑	106
北ノ越遺跡	写真図版24 1号カマド状遺構 1・2号土坑	107
写真図版10 基本土層	写真図版25 2号土坑・ピット群	108
写真図版11 1号竪穴建物跡	写真図版26 1～4号中世墓壇	109
	写真図版27 土師器(1)	110
	写真図版28 土師器(2)	111
	写真図版29 輸入磁器、石器、古銭	112

I 調査に至る経過

1 調査経緯

宇部館跡と北ノ越遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路建設事業（普代～久慈）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年4月30日付け国東整陸二調第13号により、三陸国道事務所から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年5月20日～5月21日にわたり試掘調査を行い、平成25年5月31日付け教生第328号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

2 調査経過

北ノ越遺跡は、平成25年に三陸沿岸道路建設事業に係わる試掘調査で発見された遺跡である。宇部館跡は、周知の遺跡で主郭部分が畑地として利用された時期もあるが、概ね良好な保存状態である。現況は植林と伐採を数回行った痕跡が残る山林である。

平成26年5月7日より調査を開始した。丘陵地の調査であることから、特に安全面に注意を払い進めることとなった。北ノ越遺跡の調査区は、丘陵尾根部の緩斜面地と両端に谷底部が存在し、遺構は、主に標高の低い範囲に分布している。斜面地では縄文時代の陥し穴状土坑や中世の建物跡が見つかり、尾根部では平安時代の竪穴建物跡を検出した。また、南側谷部には中世墓塚が見つかった。宇部館跡範囲については、現況で土塁・切岸・堀が視認できる状況であった。立木伐採と雑物撤去後に地形測量を行い、遺構堆積土の除去に努めた。宇部館跡の堀には、雨天時に北ノ越遺跡方向から流入する雨水が濁流となって押し寄せるため、調査区外への土砂流出を防止する作業に最も多くの時間を費やしている。

7月29日（火）に北ノ越遺跡7,550㎡の終了確認検査を実施した。9月13日（土）には現地説明会を行い、周辺住民を主体に120名の参加者が来跡された。9月16日（火）に宇部館跡1,950㎡の終了確認検査を実施し、9月19日に野外調査を終えて撤収した。

平成26年11月1日より室内整理作業を開始した。なお、平成27年2月14日に開催した平成26年度遺跡報告会において、調査成果の一部を写真展示によって報告している。平成27年3月31日に室内整理作業を終了した。

(米田)

II 立地と環境

1 遺跡の位置

宇部館跡・北ノ越遺跡は、久慈市宇部町第3地割に所在する。久慈市は岩手県沿岸北部に位置し、東側には三陸海岸を擁し太平洋が広がる。平成27年3月現在、市域面積623.10km²、人口37,032人である。久慈市は九戸郡山形村との合併により、北の九戸郡野洋町・軽米町、九戸村、西の岩手郡葛巻町、南の下閉伊郡岩泉町と九戸郡野田村と境界を接することとなった。

久慈市は古くから太平洋上の海上交通や漁業における寄港地として栄え、現在も幾多の港が存在しており、各種船舶が出入りしている。しかし、三陸海岸に面するため津波の被害にも悩まされてきた過去があり、平成23年3月11日の東日本大震災においても、久慈港石油備蓄施設などに甚大な被害を被っている。

久慈市の産業としては、海産物資源に恵まれ岩手県における水産加工の拠点としても重要な位置を占めている。さらに、観光資源豊富で、海岸沿いには小袖海岸・待浜海岸をはじめとして、多くの景勝地が存在し、県内外から多くの観光客が訪れている。また、海岸から離れると山地が連なり、そのため林業や木材資源を利用した木材加工業、畜産業も盛んである。

遺跡は、三陸鉄道陸中宇部駅から西方約700mの丘陵地に位置する。その位置は 国土地理院発行の地形図1/50,000「陸中野田」NK-54-18-4幅に含まれており、北緯40度7分52秒、東経141度46分37秒付近〔世界測地系〕である。遺跡の西側は野月山あるいは野目山と呼ばれる丘陵地が連なっており、遺跡はその先端部に位置する。本遺跡は、北側を北ノ越川、南側を宇部川に挟まれた合流点に位置する。北ノ越川と宇部川は合流後に南流し野田湾に注ぐ。遺跡範囲は、植林された造成林、畑地、宅地である。本遺跡の東側は「町」の地名が残る街道沿いの町場であり、字「町」を囲むように、宇部小学校、宇部中学校が丘陵地に位置する。眺望環境として、宇部館跡の主郭からは南東方向に野田湾を良好に臨むことができる。また、岩手県沿岸地方北部特有のヤマセによる霧は、この眺望環境の変化により可視的に感じることができる。

2 地理的環境

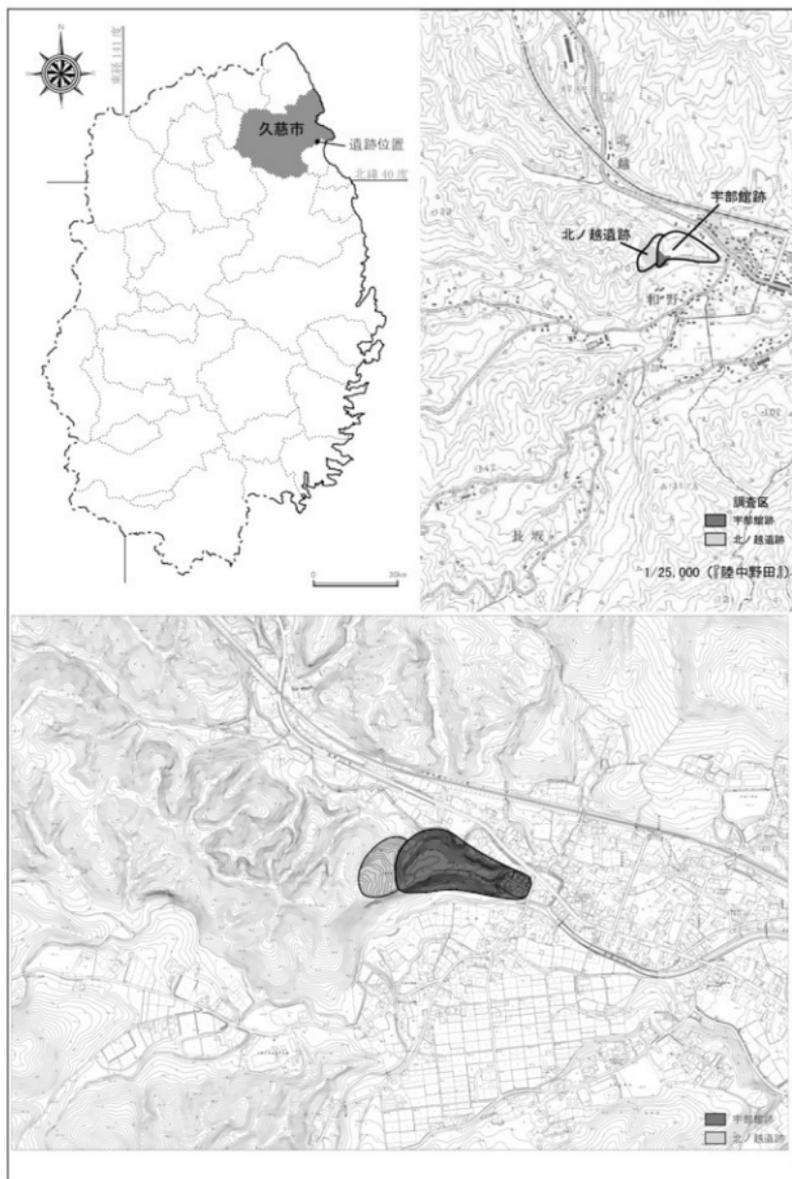
久慈市街地は市街地西部に広がる小起伏山地を南北に分断する久慈川流域を中心に形成されており、さらに久慈川下流域は、海岸段丘が形成されている。しかし、市街地の平野部は狭く、有史以来人々は生活の場を求めて平野部から丘陵地、さらには山地にまで進出している。本遺跡の所在する久慈市宇部町は、野田湾へと注ぐ津軽石川西岸河口付近に発達した沖積平野に位置している。

遺跡周辺は、西側の小起伏山地と山地から流れる小渓流によって形成された小支谷、北ノ越川と宇部川の氾濫平野をその範囲としている。

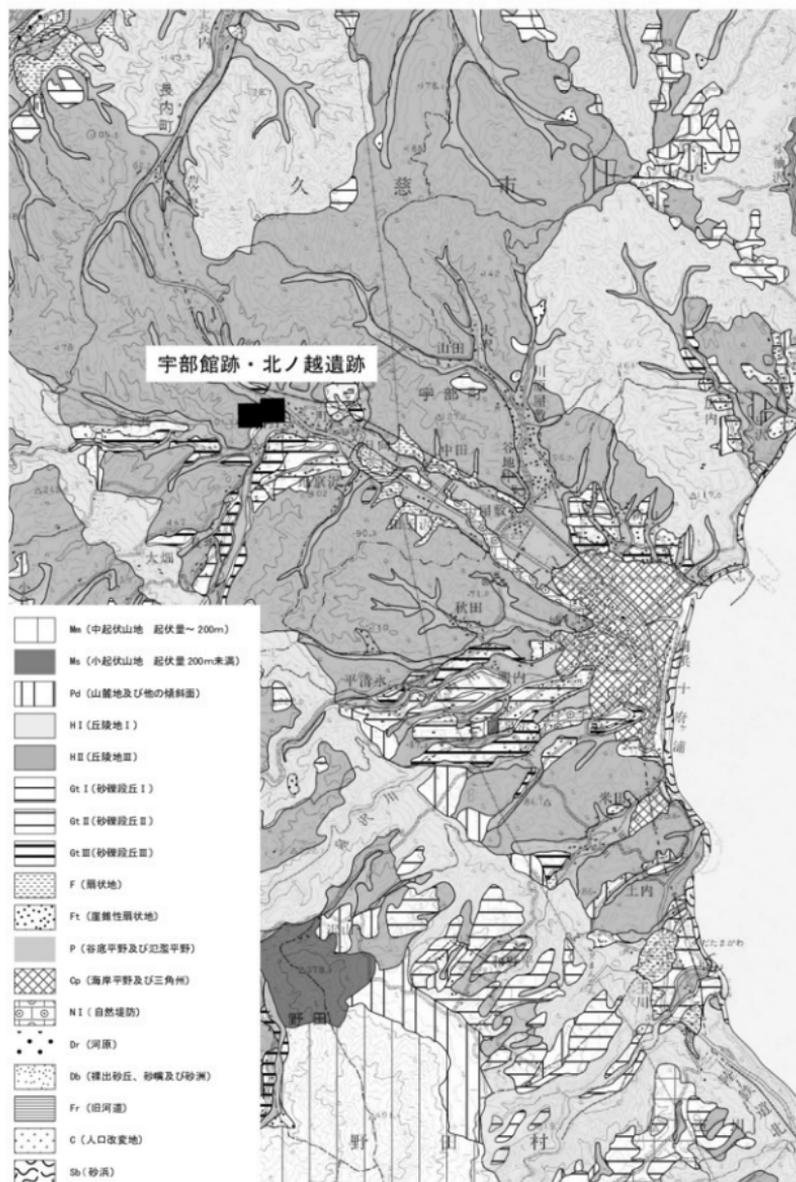
3 歴史的環境

旧石器時代

宇部・野田地区で旧石器時代遺跡は確認されていないが、沿岸北部地域において、久慈市山形町早



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺地形分類図 (1/50000)

坂平遺跡と八戸市田向冷水遺跡で後期旧石器時代後半段階の石器群が確認されている。

縄文・弥生時代

久慈・野田地区では、縄文時代早期の遺跡および散布地がいくつか確認されている。北野地区の外屋敷、北野において、早期中葉の貝殻系土器文化の集落が十和田南部火山灰に覆われて発見され、複数の隅丸方形の堅穴建物が調査されている。前期の集落は、早坂平で大木3式相当の土器群が確認されており、数少ない事例として報告されている。また、芦ヶ沢では前期前半の集落が確認されている。縄文時代前期以降は、遺構・遺物の数が増加し、中期にはさらに増加する。北ノ越・宇部館跡周辺に限り列記するが、中期は、館石V・館石VI・館石VII・館石VIII・館石IX・館石Xなど、小袖地区で濃密な分布が確認されている。後期は小袖地区のほか、上長内I・田子沢・地京沢I・地京沢II・十三塚遺跡、滝ノ沢I・滝ノ沢II・滝ノ沢III・小倉V・馬寄・野田村平清水Iなど数多くの遺跡が分布する。

弥生時代では、大尻、山屋敷、野田村沢山IIなどで土器片が散在する。

古墳・奈良・平安時代

古墳時代の遺跡では、久慈市大川目地区で新町（4～5世紀）・中田（6～7世紀）などの集落が確認されている。野田村内では、蒲沢・中平・上泉沢など、7世紀中葉以降の集落が確認されている。奈良～平安時代に入ると、集落数は増加し、琥珀加工の工房を伴う集落の小山内河口付近の中長内や、巖手刀の出土した平清水III（48）、古館山（55）が発掘調査されている。また、本書所収の北ノ越遺跡においても平安時代前半の堅穴建物1棟と土坑2基の調査を行っている。

中世・近世

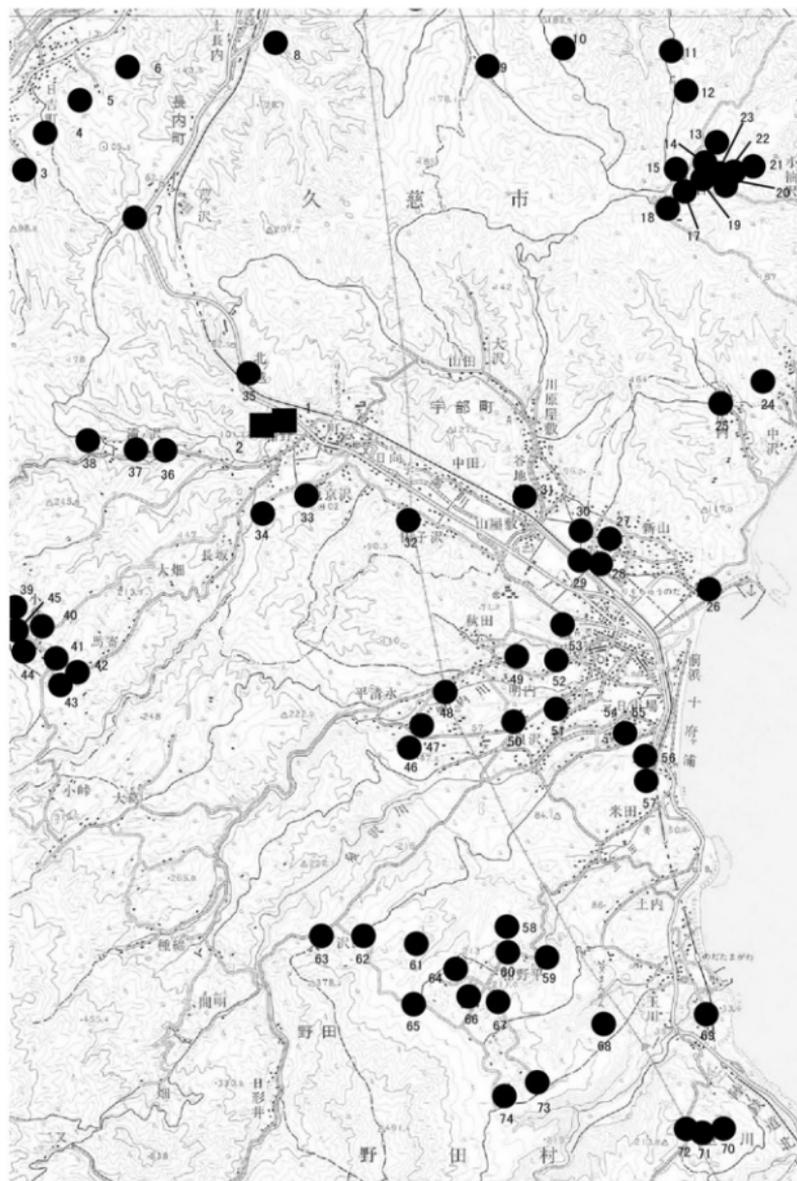
中世では、城館跡が確認・調査されている。これら中世の城館跡は広範囲に点在し、それぞれ防御的施設を有し、おもに久慈氏・宇部氏・野田氏などの氏族に関係するとされている。宇部地区では本書所収の宇部館跡（1）、久慈氏山根地区では山根館跡（15～16世紀）、野田地区では、野田新館跡（17世紀以降）と伏津館跡（14～15世紀前半）で発掘調査が行われている。その他に、久慈城、夏井館、上日陰館跡、細野館跡、左峠館、玉川館などがある。なかでも伏津館跡からは、青磁・白磁・天目碗などの輸入陶磁器や、瀬戸産・常滑窯産・越前窯産などの国産陶器のほかに、琵琶形の硯など珍しい資料が豊富に出土している。

近世では、本書所収の宇部館跡の麓に、野田通代官所跡地がある。このほか、上新山一里塚・新山一里塚西塚・平沢一里塚などが遺跡登録されている。

東日本大震災と津軽石地区浸水域

2011年3月11日の東日本大震災の被害は、久慈・野田地区でも甚大で、地区内の数多くの家屋が倒壊・浸水した。久慈市役所ホームページ・野田村役場ホームページ等で、被害状況の一部は把握可能なので参照されたい。宇部地区への津波の直接的被害は比較的少なかったようであるが、港湾部での被害は特に甚大であった。

三陸沿岸部は幾度となく津波の被害にあっている。2011年以外でも、昭和のチリ沖地震、明治の三陸大津波、近世初頭の2度の大津波、平安時代の貞観の大津波などがあり、その都度、被害を受けたと想定される。本書所収遺跡は、年代から慶長年間の大津波被害が該当するが、山間部に位置するため津波堆積物は未検出である。



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

◎所在市町村名 久慈市：1～21・29～45、野田村：25～28・46～75

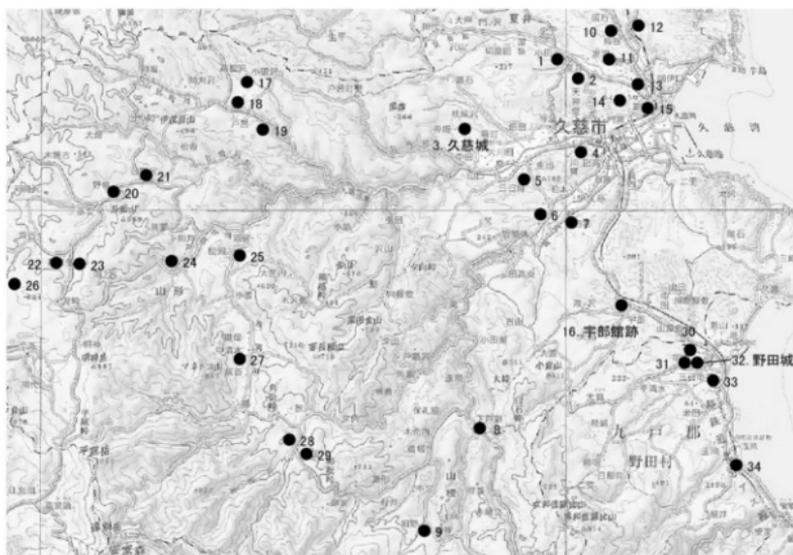
No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	調査経緯・文献等
1	宇部館 (八幡館)	城跡跡	中世	二重堀切、土塁、草葺、腰郭	宇部町3	
2	北ノ越	狩猟地	縄文・古代・中世	獲物跡、陥し穴、墓塚、青銅、古銭、土師器	宇部町第3地割15番	平成25年5月試掘調査により新発見
3	妻田 農場東	集落跡	縄文	縄文土器	小久慈町39	
4	日吉	散布地	縄文	縄文土器	小久慈町56	
5	上日除館 (館の台版)	城跡跡	縄文・中世	竪堀、土塁、複郭、縄文土器	小久慈町50	
6	日除	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	小久慈町50	
7	芦ノ沢	散布地	縄文	縄文土器(前期)	長内町第19地割28番地・小久慈町第45地割21番地	平成25年1月試掘調査により新発見
8	上長内1	集落跡	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器	長内町18	H13範囲拡大
9	平沢 一里塚	一里塚	近世	二基一対の内一基残存	長内町43	
10	二子田	散布地	縄文	縄文土器	長内町43	H13範囲変更
11	大尻貫	散布地	縄文	縄文土器	長内町45	
12	大尻塚	散布地	弥生	弥生土器、磁石、磨石、凹石	長内町第45地割	
13	照石Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、石器	長内町第46地割	
14	照石Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、石器	宇部町第19地割	
15	照石Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(前・後期)	長内町第45・46地割	
17	照石Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第19地割	H13範囲拡大
18	照石Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(前・後期)	宇部町第19地割	
19	照石Ⅶ	散布地	縄文	石鏡	宇部町第19地割	
20	照石Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、石器	宇部町第19地割	
21	照石Ⅹ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	宇部町第19地割	
22	照石Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石器	宇部町第19地割	
23	照石Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石器	宇部町第19地割	
24	久野Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)、土師器	宇部町第20地割	
25	広内	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石鏡	大字野田字広内	日考年・草摺1966 日考年1971
26	御台塚 (遠見番所)	竪石跡		土塁	大字野田136-120(講和小砂地)	59年調査
27	中新山	散布地	縄文・古代	土師器、縄文土器、新石刀	大字野田字中新山	岩牧委2017、岩文調査第128(岩牧委2019)
28	上新山 一里塚	一里塚	JCF		大字野田字野田第33地割9-1	H25新発見
29	新山一里塚 西塚	一里塚	近世	塚	宇部町第15地割	
30	上新山	集落跡	古代	土師器、壺穴住居跡	宇部町15	昭和52年度調査
31	山尾敷	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器、壺穴住居跡	宇部町10	1974年度調査、H13範囲拡大
32	田子沢	散布地	縄文	縄文土器(前・後期)、石器	宇部町第7地割	
33	地京沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第6地割	
34	地京沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第6地割	
35	十三塚	散布地	縄文	縄文土器(後期)、塚	宇部町第3地割	
36	滝ノ沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器	宇部町第2地割	
37	滝ノ沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第2地割	
38	滝ノ沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(前期)、石鏡	宇部町第2地割	
39	小倉Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器	宇部町第2地割	
40	小倉Ⅳ	散布地	縄文?	縄文土器?	宇部町第1地割	
41	小倉Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第1地割	
42	那青	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第1地割	
43	小倉Ⅵ	集落跡	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第1地割	
44	小倉Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器(後期)	宇部町第1地割	

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	調査経歴・文献等
45	小倉Ⅱ	敷布地	縄文	縄文土器（後期）	宇部町第1地割	
46	平清水Ⅰ	敷布地	縄文	縄文土器（後期）、土偶	大字野田第22地割（通称平清水）	岩教委2000、岩文調報第112（岩教委3001）
47	平清水Ⅱ	敷布地 集落跡	縄文・ 古代	縄文土器（前後期）土部器、石器、石製糸織品、竪穴住居跡、住居状遺構、フラスコ状土坑	大字野田第22地割（通称平清水）	岩教委2000、岩文調2001～2002、岩文調報第112（岩教委3001）、岩文調報第449集（岩文調2004）
48	平清水Ⅲ	集落	縄文・ 古代	土部器、煎手刀	大字野田第22地割	H12.6新規、H25調査
49	伏津館	城館跡	中世	郭	大字野田字伏津沢	59年調査
50	野田壱穴（中平）	集落跡	縄文・ 古代	竪穴住居跡、隔七穴、縄文土器、土部器、須恵器、鉄器	大字野田第22地割（通称平清水）	野田村教委・日考協1965～1969、若手史学会・草創 H21.10.13～H21.10.23発掘調査、H24.9.20、H24.12.17～H25.1.11発掘調査、野田村教委1967、野田村教委1970、若手史研No.38（若手史学1972）
51	大宇野		縄文・ 古代	竪穴住居跡、隔七穴、土坑、溝跡、土器	大字野田第13・15地割	H21.127～H21.12.10発掘調査、H24.9.19新規調査、H24.11.15～H24.12.14発掘調査（範囲拡大）
52	野田城	城館跡	中世	郭（?）	大字野田字伏津沢	59年調査
53	新館	城館跡	中世	平場、空堀	大字野田字城内	59年調査
54	古瀬山	集落跡	縄文・ 古代	土部器、縄文（前期）宋銭、柱跡	大字野田	野田村教委1970、岩博1981～1984、野田村文調報1987、岩博調報1987
55	古瀬	城館跡	中世	堀	大字野田	59年調査
56	古瀬 庭台堀	庭台跡		庭台跡	大字野田	59年調査
57	瀬沢	敷布地	縄文・ 古代	竪穴住居跡、隔七穴、土坑、土器、石器、動物遺体	大字野田第10地割	H24.10.16～18新規発見、H24.11.7～H24.12.26発掘
58	和野平Ⅱ	敷布地	縄文	縄文土器（後・晩期）	大字野田8-213 他 川向茂氏宅周辺	
59	和野平	敷布地	縄文	縄文土器（中期）、石刀	大字玉川	
60	和野平Ⅲ	敷布地		石器	大字野田8-219 他 平谷真一宅周辺	
61	伊山Ⅲ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田7-59 他 明内進夫宅周辺	
62	伊山Ⅱ	敷布地	弥生	弥生土器（熟炊?）	大字野田7-93 他 小野好光宅周辺	
63	伊山Ⅰ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田7-416 他 明明宅周辺	
64	和野平Ⅰ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田8-228 他 大沢源一宅周辺	
65	和野平Ⅳ	集落跡	縄文	縄文土器（後期）	大字野田8-263 他 田木田菊治宅周辺	
66	和野平Ⅴ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田8-243 他 中塚志太郎宅周辺	
67	和野平Ⅵ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田8-174 他 野尻菊治宅周辺	
68	根井X	敷布地	縄文	縄文土器	大字玉川5-412 他岩崎幸三所有地	
69	玉川館	集落跡 城館跡	縄文・ 中世	縄文土器、銀切	大字玉川字館山	
70	伊山 園壘Ⅲ	敷布地	縄文	縄文土器	大字玉川1-329 他山門弘祐宅周辺	
71	伊山 園壘Ⅱ	敷布地	縄文	縄文土器	大字玉川1-349 他山門貞夫宅周辺	
72	伊山 園壘Ⅰ	敷布地	縄文	縄文土器	大字玉川1-349 他山門貞夫宅周辺	
73	和野平Ⅶ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田8-265 他 田前川善治宅周辺	
74	和野平Ⅷ	敷布地	縄文	縄文土器	大字野田8-254 他 田沢伝藏宅周辺	

第2表 宇部館跡周辺の城館一覧表

※所在市町村：久慈市：1～29、野田村：30～34

No	遺跡名	城主	中近世関連遺構・遺物	所在地
1	夏井館	夏井勘解由	平場、空堀	夏井町夏井2-43
2	館の平館		土塁、平郭、空堀	夏井町早坂1105-3
3	久慈城	久慈市	土郭、帯郭、馬場跡、空堀他	大田町町5地割
4	高館	高館因幡	空堀、土塁	八日町4地割
5	三日館		空堀、土塁、平郭	大田町町5地割
6	小久慈館(下日当館)	日戸内膳/南部十郎	空堀	小久慈町11
7	上日当館(館の台館)	熊柵ノ守	空堀、土塁、礎郭	小久慈町50
8	山根館(伊藤館)	伊藤氏	空堀、土郭、土塁、帯郭	山根町下戸原第6地割
9	細野館	八原氏	空堀、土郭、土郭	山根町細野第2地割
10	鳥谷館	鳥谷大炊	空堀、郭	夏井町早坂5-67-7
11	大久保館	大久保氏	平場	夏井町伊13-32
12	隈伊口館(田中館)	久慈氏	堀、平郭	夏井町早坂5-85
13	鼻館		陶器、塚、平郭	夏井町早坂5-85
14	新城館(大崎館)	夏井氏または大崎氏	空堀、郭、帯郭	夏井町早坂5-85
15	左村館	久慈傳守信実	三重堀、郭、土塁	湯道13
16	宇部館(八幡館)	野田氏・宇部氏	二重堀、土塁、郭、帯郭	宇部町3
17	尾無館			山形町戸岡町
18	外堀館		平場、腰郭、堀	山形町戸岡町
19	戸岡町中堀館		平場	山形町戸岡町
20	野場館		平場、堀、母戸跡	山形町日野澤
21	日野沢館		平場、堀	山形町日野澤
22	円(丸)館			山形町高軽部12地割
23	高軽部館			山形町高軽部24地割
24	川舟館		平場、空堀	山形町川舟10地割段口表87-2
25	成谷館		平場、土塁、空堀	山形町川舟4地割
26	安堵城			山形町高軽部13地割
27	成谷館		郭、堀	山形町高軽部11地割
28	小園館		郭、堀、平場	山形町小園11地割
29	判官館(高館・小園館)		平場	山形町小園13地割
30	新館	野田氏	平場、空堀	大字野田字城内
31	伏津館	伏津新九郎忠信	郭	大字野田字伏津沢
32	野田城		郭(?)	大字野田字伏津沢
33	古館	十有ヶ森正義(野田康季守正義)	堀	大字野田
34	玉川館	玉川河内秀定	堀切	大字玉川字館山



第4図 周辺の城館分布図

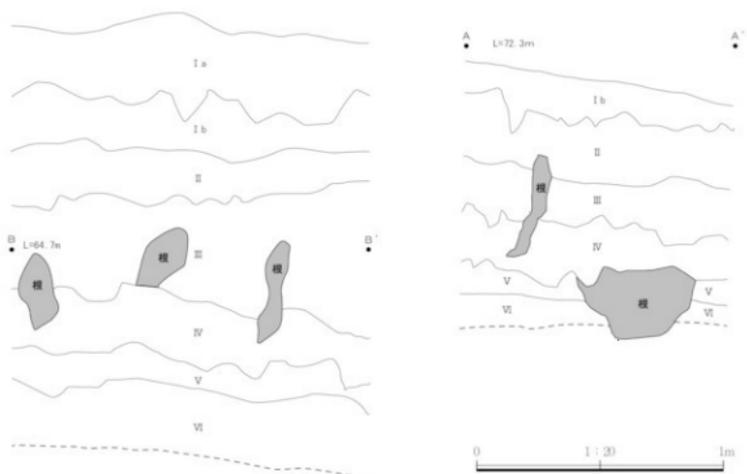
4 基本層序

遺跡内では、凝灰岩基盤層が分布しており、またこの基盤層は地表に向かうに連れ、風化作用を受けている。この風化層はその度合いにより下層の岩塊層と上層の砂礫層に分けられ、土壌の流出が顕著な地区では、森林腐植土（現表土）以下の堆積は見られず、表土直下に風化凝灰岩層あるいは岩塊層が見ることが多い。小起伏山帯では、丘陵尾根部の黒色土の発達が弱く、緩斜面下部から谷部にかけて厚く堆積する傾向にある。

北ノ越遺跡では、谷状地形範囲で黒色～黒褐色土の堆積層がよく残存しており、字部館跡では普請による地形改変によって、地層の削平が進んでおり、土塁の基底部に僅かに旧表土が残存していた。6層に大別し、ローマ数字表記している。基本土層範囲の堆積厚は良好であったが、植林や造成の影響を受けた範囲では表土（I層）が薄い。

基本土層

層No.	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
I a	10YR3/3暗褐色土	なし	粗	根多量	表土（森林土壌）
I b	10YR4/3にぶい黄褐色土	弱	粗	砂5%、根少量	谷部に堆積した雨水等による流入土
II	10YR2/3黒褐色土	弱	粗	砂3%、根少量	中世遺構の堆積土
III	10YR3/2黒褐色土	弱	やや粗	炭化物粒1%	部分的にTo・Cuを微量包含、縄文時代の堆積土
IV	10YR2/3黒褐色土	弱	やや密	To-Nbφ5mm、炭化物粒1%	To-Nb（10YR5/6顕褐色火山灰）を包含する層の土層土師器、縄文土器包含
V	10YR3/3暗褐色土	やや弱	密	To-Nbφ5mm1%	
VI	10YR4/4褐色土	やや強	密		



第5図 基本土層

I層は森林土壌層である。I a層とI b層に細分してある。

II層は遺物包含層である。古代～中世の遺構堆積土である。古代の生活面はこの層内にあると想定される。

III層は土壌化層で微量の To-Cu（十和田中樺火山灰）が混入する。遺物包含層であるが、古代の遺物はなく、縄文土器が出土する。

IV層は黒褐色土層である。微量の To-Nb（十和田南部火山灰）が混入する。遺物は出土していない。

V層は暗褐色土層で、微量の To-Nb（十和田南部火山灰）が混入する。遺物は出土していない。

VI層は褐色土層で、最終遺構検出面である。VI層より下位に基盤の風化凝灰岩礫層があるが、堆積厚等は把握していない。

参考・引用文献

- 岩手県企画部北上山系開発調査室 1972 『北上山系開発地域 土地分類調査 久慈』
- 岩手県企画部北上山系開発調査室 1972 『北上山系開発地域 土地分類調査 陸中間』
- (株)北海道地図 2013 『岩手県道跡・埋蔵文化財情報検索システム ver.1.05』
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『山根館跡発掘調査報告書 主要地方道久慈岩泉線改良工事関連道跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第390集
- 国土地理院 50,000分の1地形図 2004 「久慈」
- 国土地理院 50,000分の1地形図 1988 「野田」

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

緯度と経度はGPS測量による電子基準点から、水準は国道45号沿い水準点を基準として算出した。打設した3級基準点をもとに、世界測地系座標（座標系10）にしたがって測量業務を行った。設置した基準点は以下のとおりである。

3級基準点

基1：X=15019.728m、Y=80526.417m、H=60.249m

基2：X=15006.116m、Y=80423.286m、H=76.329m

区画点

KK14-1：X=15063.047m、Y=80469.252m、H=64.456m

KK14-2：X=15044.206m、Y=80469.489m、H=67.848m

KK14-3：X=15031.376m、Y=80452.577m、H=71.533m

KK14-4：X=14989.709m、Y=80470.309m、H=65.157m

遺構はレベル水準器、光波測量器と電子平板システム（Cubic社製実測支援システム「遺構くん」）を用いて図化した。遺構外出土遺物の取り上げは、遺構外遺物が微量であることから、「尾根部」、「南側谷部」など地形区分で一括処理した。

2 室内整理

遺構図面は電子データを加工して、版下を作成した。遺物は洗浄、接合、復元作業を経て実測、計測、実測図トレースを行い、図版の作成を行った。図化は出土遺物のうち、遺構内出土遺物を優先し、その中でも口径推定可能な資料を優先したが、適宜破片資料も掲載した。

a) 遺構名称の変更

野外調査時は堅穴建物 = SI、掘立柱建物 = SB、カマド状遺構 = SL、陥し穴状土坑 = SKT、土坑 = SK、柱穴 = P、土塁 = SA、堀 = SD の各略号で登録し、室内整理作業に置いて、第3表のごとく名称変更を行った。なお、本書の堅穴建物の概念は、堅穴を構築し、その中で何らかの構築物が存在したと認識可能な建物である。構成要素としては、壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴、鍛冶炉などが該当する。既存の堅穴住居跡、堅穴住居状遺構はこの概念に含まれる。

また、当初の発掘調査計画は、北ノ越遺跡 6,500㎡、宇部館跡 3,000㎡であった。北ノ越遺跡は三陸沿岸道路建設事業に伴う試掘事業によって新たに発見された遺跡であり、調査当初は暫定的な遺跡範囲であったが、調査の進展に伴い、北ノ越と宇部館跡を宇部館跡の外堀で区画することとし、県生涯学習文化課による調整後に、北ノ越 7,550㎡、宇部館跡 1,950㎡として調査を継続した。この調整によって、主に宇部館跡で登録していた遺構のいくつかを北ノ越帰属に再登録した。登録掲載名は第3表のとおりである。

第3表 遺構名新旧対応表

北ノ越

報告書掲載名	野外時	時期	報告書掲載名	野外時	時期
1号壘穴建物跡	SI103	縄文	1号陥し穴状土坑	SK03	縄文
2号壘穴建物跡	SI02	平安	2号陥し穴状土坑	SK04	縄文
3号壘穴建物跡	SI101a	中世	3号陥し穴状土坑	SK05	縄文
4号壘穴建物跡	SI101b	中世	4号陥し穴状土坑	SK06	縄文
5号壘穴建物跡	SI102a	中世	5号陥し穴状土坑	SK07	縄文
6号壘穴建物跡	SI102b	中世	6号陥し穴状土坑	SK08	縄文
7号壘穴建物跡	SI01a	中世	7号陥し穴状土坑	SK16	縄文
8号壘穴建物跡	SI01b	中世	8号陥し穴状土坑	SK104	縄文
1号掘立柱建物跡	SB1	中世	9号陥し穴状土坑	SK09	縄文
2号掘立柱建物跡	SB2	中世	10号陥し穴状土坑	SK10	縄文
1号カマド状遺構	SL01	中世	11号陥し穴状土坑	SK11	縄文
1号中世墓塚	SK02	中世	12号陥し穴状土坑	SK12	縄文
2号中世墓塚	SK15	中世	13号陥し穴状土坑	SK13	縄文
3号中世墓塚	SK101	中世	14号陥し穴状土坑	SK14	縄文
4号中世墓塚	SK103	中世	15号陥し穴状土坑	SK18	縄文
1号土坑	SK01	平安	16号陥し穴状土坑	SK102	縄文
2号土坑	SK17	平安			

宇部館跡

報告書掲載名	野外時	時期
1号土塁	SA1 (上段)	中世
2号土塁	SA2 (下段)	中世
1号切岸	切岸1 (上段)	中世
2号切岸	切岸2 (下段)	中世
1号堀	SD1 (内堀)	中世
2号堀	SD2 (外堀)	中世

b) 注記記載事項

色 調：小山正忠・竹原秀雄編 2006『新版 標準土色帖 2006年度版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に基づいた。

形成要因：判断可能な限り、備考欄に記載した。例えば（カマド袖部）、（人為堆積）等。

粘 性：強 = 5、やや強 = 4、やや弱 = 3、弱 = 2、微 = 1、無 = 0の6段階で区分し、観察表には数値を記載した。例えば砂層では「無」と「微」が、粘土層では「強」と「やや強」の区分が多くなる。

しまり：密 = 4、やや密 = 3、やや粗 = 2、粗 = 1の4段階に区分した。地層の含水量によって少なからず左右されるが、粘土層や細粒の砂では「密」や「やや密」に、粗粒の砂や土では「やや粗」や「粗」の区分が多くなる。

包 含 物：炭化物、焼土、遺物、礫、植物根、火山灰、ベースとなる土壌以外の混入土壌・砂・粘土等の量と形状を記載した。混入量等の記載にあたっては、上記の『新版 標準土色帖 2006年度版』に従った。

c) 遺物番号

図版の各遺物番号と写真図版の各遺物番号は対応しているが、遺跡ごとに番号を付している。

d) 観察表の記載

①縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の器面色調は、外面で広く分布する色調を記載した。外面がスズ等の付着物に覆われている場合は内面の色調を記載した。

②()内の数値は推定値を示す。< >内の数値は残存値を示す。

IV 宇部館跡

1 概 要

調査区は1,950㎡である。検出遺構は、土塁2条、切岸2箇所、堀2条である。宇部館跡の主郭を防御する2重堀の形態となっている。実効法高等の形態的特徴から、16世紀後半～末の普請である。

出土遺物は、縄文土器、剥片石器、礫石器、輸入染付皿、古銭、コハクである。遺物は切岸・堀の堆積土から出土し、土塁の盛土内からは確認できなかった。

また、発掘調査と並行して、宇部館跡範囲の縄張り図作成を行った。

2 検 出 遺 構

1号土塁・1号切岸・1号堀（第9・10図、写真図版1・2・4～6）

<検出状況>主郭御縁に廻る土塁の一部を1号土塁、主郭西側の二重堀の内堀を1号堀、1号堀と1号土塁間の人工的な斜面を1号切岸として報告する。それぞれ現況でも形状を判断可能であった。

<規模・形状>調査区内規模は、1号土塁が長さ15m、高さ15m、1号切岸が長さ12m、高さ6m、法高10～12m、1号堀が長さ15m、深さ1.2mである。1号土塁は自然地形にそのまま盛られており、版築ではない。1号切岸は傾斜角約50°である。1号堀は薬研堀で、南側底面形状がV字で、北側はやや丸みを帯びる。

<堆積土>1号土塁は、黒色土（旧表土）上に直接盛られており、版築構造ではないが、普請時に板で土留めをしながら傾斜角を整えた可能性がある。1号堀は2号土塁方向と1号切岸方向からの土砂流入によって埋没している。調査中の雨天時の流水によっても、急速に底面に堆積土が形成された。堆積状況からは埋め戻されたような人為堆積の痕跡はなく、自然堆積と考えられる。

<遺物分布>1号切岸と1号堀の堆積土から微量出土している。

<遺物>縄文土器、石器、石製埴輪、中世輸入染付磁器皿、寛永通宝が出土している。

<時期>遺構の形状から、16世紀後半～末である。

2号土塁・2号切岸・2号堀（第9・11図、写真図版3～6）

<検出状況>1号堀の西側に普請された土塁を2号土塁、主郭西側の二重堀のうち外堀を2号堀、2号堀と2号土塁間の人工的な斜面を2号切岸として報告する。現況でも形状を判断可能であった。

<規模・形状>調査区内規模は、2号土塁が長さ60m、高さ23m、2号切岸が長さ60m、高さ6.5～8m、法高10～12m、2号堀が長さ67m、深さ1mである。2号土塁範囲は、南側で自然地形を生かして切土造成し、北側では南側の切土範囲と同高度を保つように盛土によって整えられている。2号土塁は1号土塁と同様版築ではない。2号切岸は傾斜角約50～55°である。2号堀は自然の沢地形を利用して普請されており、南側は、丘陵地から続く尾根ラインが堀切となり、通行を遮断している。2号土塁頂部から対岸（北ノ越遺跡範囲）までの幅（広義の堀幅）は、236.4mである。

<堆積土>2号土塁は、黒色土（旧表土）上に直接盛られており、版築構造ではないが、1号土塁と同様に普請時に板で土留めをしながら傾斜角を整えた可能性がある。2号堀の堆積土は、2号土塁及び2号切岸方向と対岸の北ノ越遺跡範囲内からの土砂流入によって形成されているが、もともと沢状

地形を利用しており、雨天時の堆積土の流出も著しいためか、層厚は薄い。積極的に埋め戻されたような人為堆積の痕跡はなく、雨天時に土砂の流入を繰り返した自然堆積と考えられる。2号堀底面からは狭い範囲ながら湧水箇所があった。

<遺物分布> 2号堀からコハク片が出土しているが、2号堀内に張り出した木根に伴って出土しており、中世に利用されたかは不明である。

<遺物> コハクが出土している。

<時期> 遺構の形状から、16世紀後半～末である。

3 出土遺物

(1) 縄文土器 (第12図、写真図版9)

1・2は1号切岸堆積土出土で年代は前期～中期である。

(2) 輸入磁器 (第12図、写真図版9)

3は1号堀堆積土出土で、明朝末頃の染付磁器皿破片である。

(3) 石器・石製品 (第12図、写真図版9)

4・5は1号堀堆積土出土で、4は縄文時代の打製石斧である。5は中世の増場と考えられる形状の石製品で、中央が削り貫かれている。鉄滓等の金属附着物はないため、増場としての用途があったかは不明である。

(4) 古 銭 (第13図、写真図版9)

6～9は1号堀堆積土出土で、6・7は本銭よりも小さい永楽通宝で、模倣銭の典型例である。9は寛永通宝である。

4 現況調査

城館範囲の縄張り図作成作業を行ったので、把握した普請施設について報告する。

(1) 現 況

宇部館跡はこれまでに岩手県中世城館分布調査において単郭式で二重堀を有することが報告されており、主郭には八幡社が鎮座し、久慈市指定文化財の銅製鰐口(久慈市教育委員会所蔵)がかつて設置されていた。第8図縄張り図を提示した。主郭は4段構成で、八幡社のある最上段を曲輪1とし、以下順に曲輪2、曲輪3a・3b、曲輪4と呼称する。西側に今回発掘調査を行った二重堀がある。堀が一旦途切れた場所に搦手口が存在し、搦手口から館内に入ると、通路がZ字状となる噴遣い虎口となる。虎口より北側は帯曲輪となっている(曲輪5と呼称)が、南側の発掘調査範囲と同様の堀が普請されているも不思議ではない。曲輪5の下に2号切岸と同傾斜の地形が存在するかは現況では不明であった。

主郭の縁辺に断続的に土塁が残存する。崩落による地形変化のあった箇所を除けば、北側については連続していた可能もあるが、現況からは判断できない。なお、主郭北側縁辺に土塁が途切れる箇所

がジグザグになっているが、崩落によるものか、館への侵入を困難にする連続堅堀の効果を狙った普請なのかは判断できなかった。主郭南側は宇部川の浸食によって形成された崖が天然の防御ラインとなっているが、崩落箇所が多く、普請の痕跡は判断できなかった。

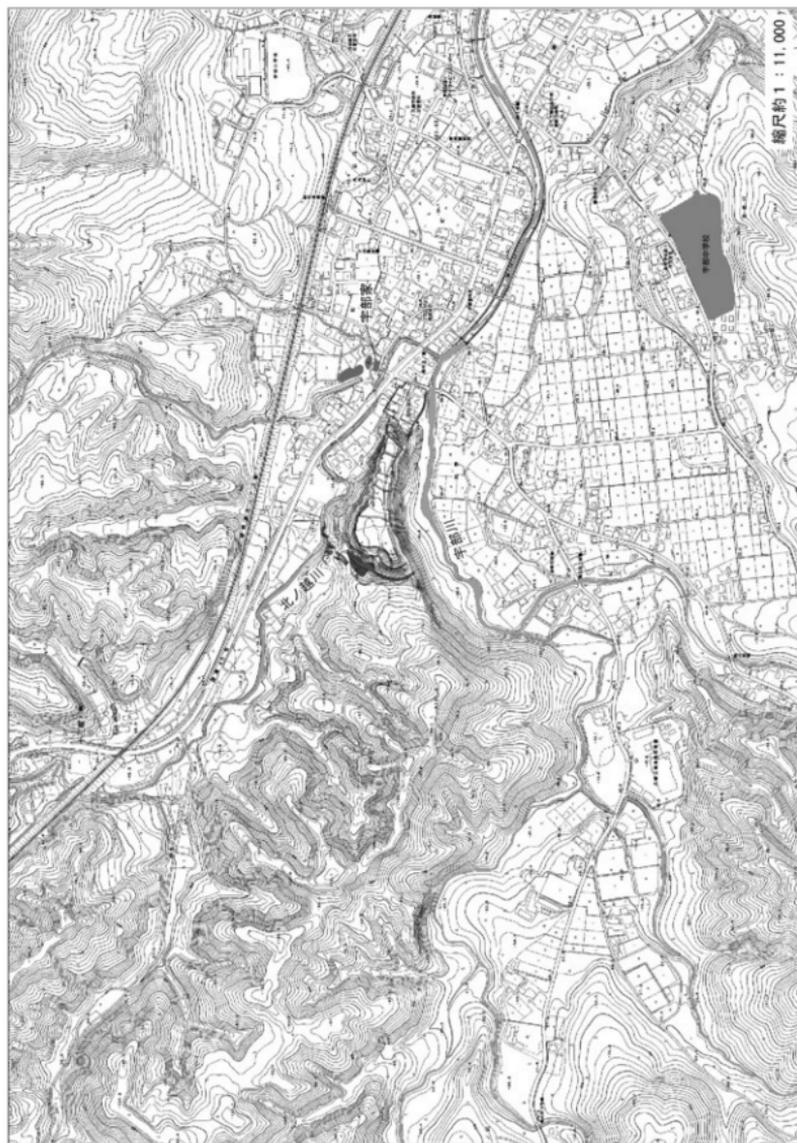
主郭から東側は車両通行用道路によって若干削平されているが、主郭までの古い通路が斜面地東側に残る。通路を降りると、近世南部藩野田通代官所跡碑と宅地が広がる。代官所跡地は中世居館跡地をそのまま利用したと推定される。この居館跡推定範囲は方形区画で、東端に隣接する泉道よりも一段高くなっている。居館跡推定範囲の南側には土塁が1条残存している。

発掘調査で確認された2号堀の延長線上に湧水・雨水の溜まる沼地があるが、池状に整備された地形かは判断できない。さらに先には土塁状の高まりが2条あり、2条の高まりの間を通路として利用し、北ノ越川へと至ると想定したが、木材切出道路敷設以前、沢ラインの両岸が土塁状の高まりになったとするほうが自然である。土塁状の高まりに緩斜面の平場が隣接するが、現況からこの平場を曲輪と認定し難いため、木材切出道路より西側の普請の有無について判断を保留する。

(2) 周辺地形の考察

宇部館跡の立地についてはⅡ章で触れているが、細部について検討する。久慈市宇部地区は宇部川と北ノ越川の合流点に町場が発達している。この合流点付近は、北側から沢が2条流れ込み、宇部家代々の墓碑がある宇部本家付近で北ノ越川に合流する。水流が天然の堀となっており、通行を遮断しており、代官所の設置位置としては最適であったと考えられる。なお、宇部本家から東側を「町」、西側を「北ノ越」となっており、当地域において宇部本家を境に「越」すなわち峠範囲と町範囲に分離されることが認識されていたと考えられる。また、北ノ越は現在の野田峠を指す名称であろうが、北ノ越の「北」は宇部館あるいは野田通代官所方向から見た方角であり、久慈市街地から見た地名ではない。

宇部館跡の北側には三陸鉄道が東西に走る。線路の北側には、館跡のような地形が張出しているが、踏査したところ、背後の丘陵地から尾根線が延びているが、曲輪普請のような平坦面ではなかった。当初、地形図上で峠方向からの敵の侵入に対する防御ラインとして、北ノ越川を挟んで両側に城館を設置しているのではないかと想定したが、踏査の結果、天然の堀である沢以外に明確な普請痕跡を確認できなかった。



第6図 周辺地形図

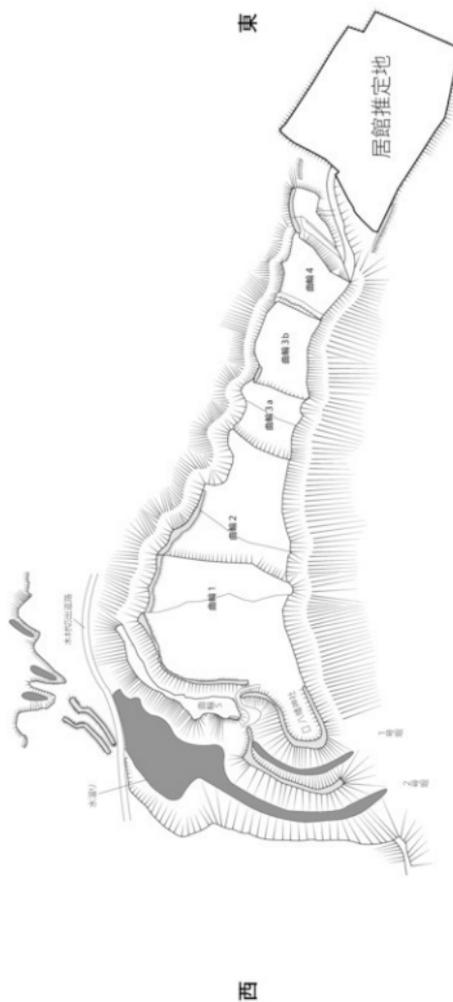
宇部第三村第一種
字拾叁ヶ原地籍圖



宇久慈市役所総務課
保管資料の複製を転掲

第7図 地籍圖

北



西

東

南

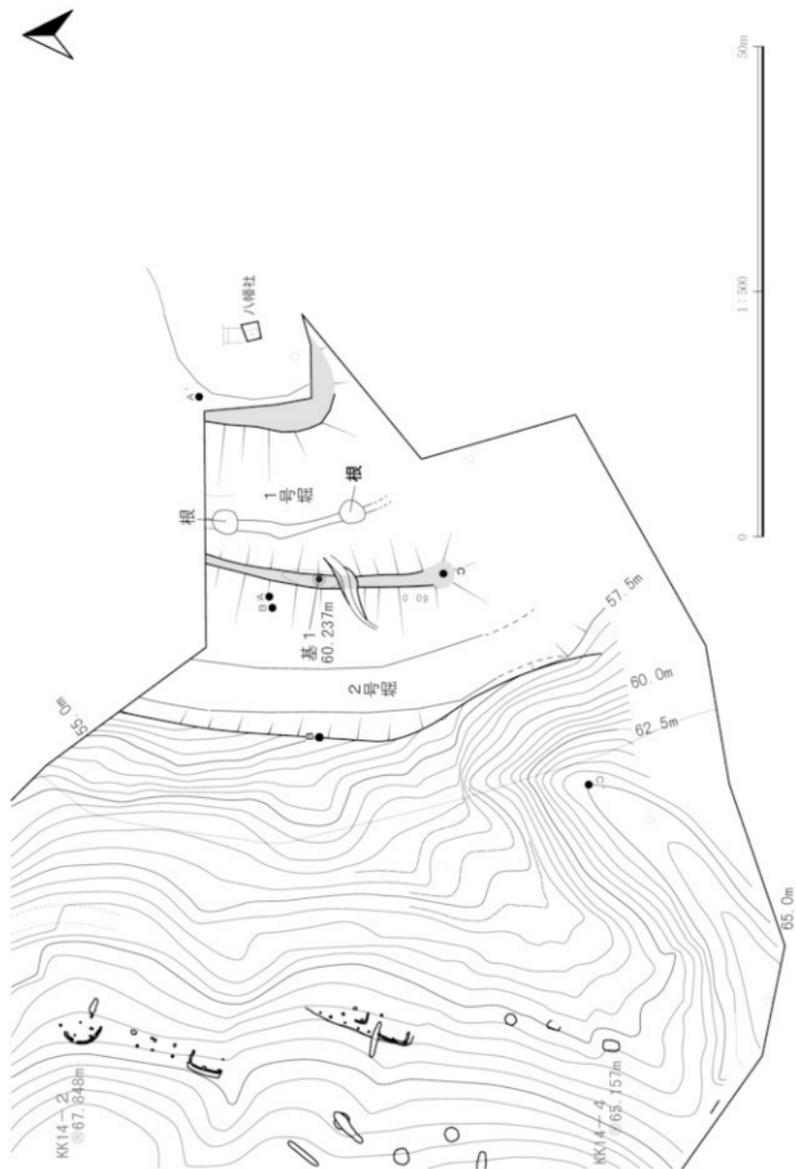
■ 水田水路及び水田範囲
 □ 土塁範囲

0 1:2000 50m

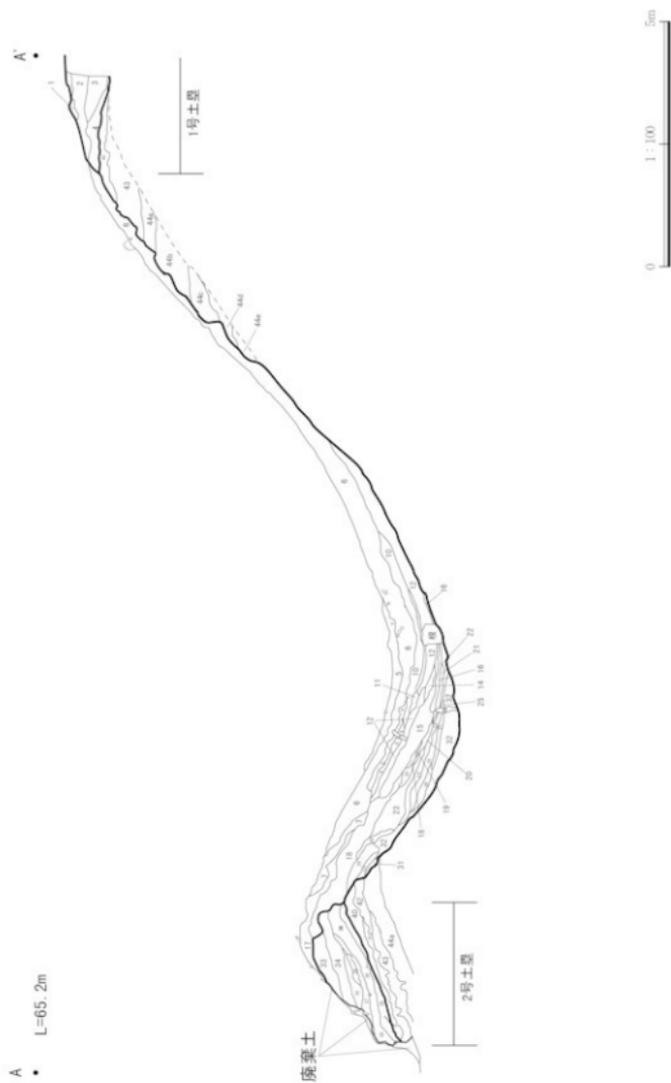
※現況調査時データを図化した。
 ※野秀文氏図面に加筆・修正

IV 宇部館跡

第8図 縄張図



第9図 遺構配置図

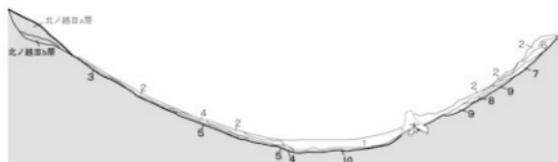


第10图 1・2号土曜・1号切岸・1号堀

2号堀北側

B
● L=60.000m

B'



2号堀南側

C
● L=65.000m

C'

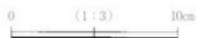
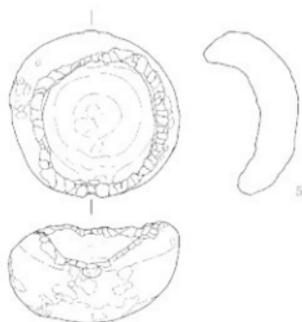
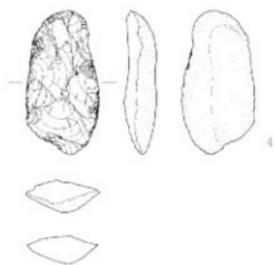
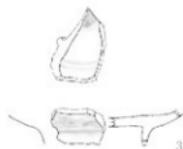
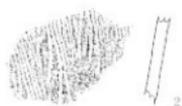


0 1:200 5m

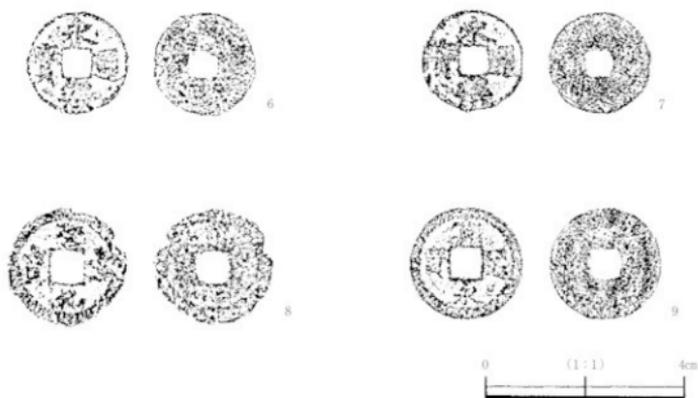
第11図 2号切岸・2号堀

第4表 1・2号土塁、1・2号切岸、1・2号堰土層観察表

位置	層	土色・土性	粘性	しまり	混入物	備考
1号土塁	1	10YR3-3 暗褐色土	2	1	很多量	表土層
	2	10YR5-6 黄褐色土	2	1	根少量	盛土
	3	10YR4-6 褐色土	2	2	根少量	盛土
	4	10YR6-8 明黄褐色土	4	3		盛土
1号切岸・1号堰	5	10YR2-3 黒褐色土	2	1	很多量	表土層
	6	10YR3-3 暗褐色土	2	1	根多量、円礫φ5cm1%	礫は、43層由来か
	7	10YR4-4 褐色土	2	1	円礫φ3cm1%、黄褐色土20%	
	8	10YR5-4 にぶい黄褐色シルト	0	1	円礫φ5cm1%	
	9	10YR4-3 にぶい黄褐色土	2	1	黄褐色土20%	混土層
	10	10YR5-4 にぶい黄褐色シルト	2	1	粘粒5%、円礫φ5cm1%	
	11	10YR4-3 にぶい黄褐色シルト	0	1	細粒砂5%、暗褐色土5%	
	12	10YR4-4 褐色砂	0	1	円礫φ10cm1%、円礫φ5cm3%	
	13	10YR3-3 暗褐色土	3	1	黒色土10%、黄褐色砂5%	混土層
	14	10YR4-6 褐色土	2	1	円礫φ3cm1%、黒褐色土3%	混土層
	15	10YR5-6 黄褐色土	2	1	細砂20%、円礫φ1cm1%	
	16	10YR4-4 褐色砂	0	1		地山の砂岩層に由来
	17	10YR3-4 暗褐色土	2	1	円礫φ3cm1%	9層と同様の混土層
	18	10YR5-4 にぶい黄褐色土	2	1	円礫φ1cm1%、細砂10%	
	19	10YR5-6 黄褐色砂	0	1		
	20	10YR4-4 褐色土	2	1	細砂30%	
	21	10YR5-4 にぶい黄褐色土	2	1	細砂20%	
	22	10YR4-4 褐色土	4	2	細砂10%	
	23	10YR5-4 にぶい黄褐色土	2	1	円礫φ3cm1%、細砂10%	
	24	10YR5-6 黄褐色土	2	1	円礫φ3cm1%、細砂30%	
	25	10YR4-4 褐色土	4	1	細砂5%	
	26	10YR5-4 にぶい黄褐色土	3	1	細砂20%	
	27	2.5Y5-4 黄褐色砂	0	1	オリブ暗砂30%	
	28	10YR4-4 褐色土	2	1	細砂20%	
	29	10YR5-6 黄褐色土	3	1	細砂30%	
	30	10YR5-6 黄褐色土	3	1	細砂10%	29層より近い
	31	10YR4-6 褐色土	2	1	細砂10%	
32	10YR4-4 褐色土	3	1	細砂30%、オリブ灰色砂ブロック状に5%		
33	10YR5-6 黄褐色土	2	2	很多量		
34	10YR5-4 にぶい黄褐色土	3	2	円礫φ3cm1%		
35	10YR4-4 褐色土	3	4	黒色土10%、細砂10%	混土層	
36	10YR5-6 黄褐色土	2	1	細砂5%		
37	10YR4-4 褐色土	2	2	細砂10%、黒褐色土10%	混土層	
38	10YR5-6 黄褐色土	2	2	円礫φ5cm30%	43層を備んだか	
39	10YR4-4 褐色土	2	1	黒褐色土10%		
40	10YR2-3 黒褐色土	2	1	炭化粒1%	Ⅱ層相当	
41	10YR4-4 褐色土	2	2		Ⅲ層相当	
42	10YR5-4 にぶい黄褐色土	2	1	細砂30%	Va層?	
43	10YR5-6 黄褐色土	4	3		Vb層?	
44a	10YR5-8 黄褐色土	4	4	細砂3%		
44b	2.5Y6-4 にぶい黄褐色土	0	4	オリブ灰色砂30%、円礫φ3cm20%・φ10cm5%		
44c	2.5Y6-6 明黄褐色砂	0	1		水成堆積の砂層	
44d	10YR5-6 黄褐色土	2	1	円礫φ10~15cm10%		
2号切岸・2号堰北側	1	泥の層				雨水による堆積
	2	10YR3-3 暗褐色土	3	2		
	3	10YR2-2 黒褐色土	2	1	黄褐色土ブロックφ3cm5%	地山の崩落土
	4	10YR5-6 黄褐色土	1	1	細砂30%	
	5	2.5Y5-3 黄褐色砂	0	1		黒色の崩落層
	6	10YR4-6 褐色土	5	1	細砂5%	
	7	10YR5-6 黄褐色土	1	2	細砂20%	
	8	10YR5-6 黄褐色土	0	1	細砂30%	7層よりやや近い
	9	10YR5-8 黄褐色土	0	2	細砂20%	
	10	10YR4-2 灰黄褐色砂	0	3		グライ化している。
2号切岸・2号堰南側	1	10YR4-4 褐色粘土	5	3	小枝多量、細砂20%	雨水による堆積
	2	10YR3-3 暗褐色土	3	2	很多量	表土(1層)
	3	10YR5-6 黄褐色土	2	2		V層相当?
	4	10YR5-4 にぶい黄褐色土	2	1	細砂10%、根少量	
	5	10YR6-6 明黄褐色土	4	1	細砂20%	地山の崩落土
	6	10YR4-6 褐色土	2	1	細砂10%	
	7	10YR5-4 にぶい黄褐色土	2	1	細砂20%、根少量	4層に似る
	8	10YR4-4 褐色土	2	1	細砂30%	5層に似る



第12図 縄文土器、輸入磁器、石器、石製品



第13図 古銭

第5表 縄文土器・輸入磁器観察表

掲載	出土地点・層位		種別	器種	残存部位	色調	調整・特徴・文様		時期	口径 cm	底径 cm	器高 cm
							外面	内面				
1	1号切岸	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	橙	LRタテ	ナデ	縄文前期 ～中期			
2	主郭	表採	縄文土器	深鉢	胴部	橙	木目状 撚糸文	ナデ	縄文前期 ～中期			
3	1号切岸	南側堆積土	輸入磁器	皿	底部	灰白	染付	染付	15～16c	(6.1)	(2.25)	

第6表 石器、石製品観察表

掲載	器種	出土地点・層位	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	石材	産地	備考
4	打製石斧	1号堀 堆積土	8.80	4.40	2.00	80.30	チャート	北上山地	片面自然面
5	埴塼?	1号堀 堆積土下部	10.20	10.30	6.20	468.20	砂岩	北上山地 中生代前期	

第7表 古銭観察表

掲載	出土地点・層位	銭種	銭銘	初铸年代	特徴	長 cm	幅 cm	内径 cm	重量 g
6	1号堀 堆積土上部	銅銭	永楽通宝	1408年	模铸銭	2.14	2.09	0.45	1.30
7	1号堀 堆積土上部	銅銭	永楽通宝	1408年	模铸銭	2.09	2.08	0.48	0.80
8	1号切岸 堆積土	銅銭	聖宋元寶	1101年	摩耗	2.40	2.40	0.58	2.40
9	1号切岸 堆積土	銅銭	寛永通宝	1636年	古寛永	2.30	2.30	0.54	1.90

V 北ノ越遺跡

1 概 要

調査区は7,550㎡である。検出遺構は、竪穴建物跡8棟、掘立柱建物跡2棟、カマド状遺構1基、陥し穴状土坑16基、墓壇4基、土坑2基、柱穴104個である。このうち、縄文時代は竪穴建物跡1棟と陥し穴状土坑16基、平安時代は竪穴建物跡1棟と土坑2基、中世は竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡2棟、カマド状遺構1基、墓壇4基、柱穴104個が該当する。

出土遺物は、土師器、剥片石器、礫石器、青磁、古銭、コハク、焼人骨片、炭化材、炭化種子である。1号カマド状遺構堆積土は、サンプルを分析委託し、サンプル内から炭化種子を回収している（VI章参照）。また、1号掘立柱建物跡構成柱穴内出土炭化材と3号墓壇出土炭化材の一部をサンプルとしてAMS年代測定を実施し、中世の年代を得ている（VI章参照）。

2 検 出 遺 構

(1) 竪 穴 建 物 跡

8棟の調査を行った。帰属時期は縄文、平安、中世である。なお、ここでは竪穴を有する（と考えられる）建物跡すべてを取り扱っている。居住施設的要素や工房的性格の建物も一括しており、中世の工房跡と認識されることの多い建物に限定した用語としては取り扱わなかった。

1号竪穴建物跡（第15図、写真図版11）

<検出状況> X = 15044, Y = 80478 付近に位置する。丘陵部の斜面地から谷底の平坦地への変換点の緩斜面地で半円形の黒褐色プランを検出した。

<規模・形状> 残存規模は250 × 380 mで平面形は円形と考えられるが、東半を消失している。残存床面積は8㎡である。

<構成要素> ピット6個と壁溝を有する。ピットはいずれも主柱穴と考えられる配置関係にない。

<掘形> 不明である。東半部が消失していることと、貼床痕跡を把握できなかったため、形状判断しがたい。

<堆積土> 黒褐色土主体で3層に分離した。斜面上方からの流れ込みによって形成された自然堆積層で構成される。2層が床面上の堆積土で、3層は西壁際と壁溝内に堆積している。

<遺物分布> 西壁付近の堆積土から削器1点が出土している。

<遺物> 削器1点が出土した。

【石器】25の削器は頁岩製で堆積土出土である。刃部角は60～65度で搔器刃部角度に近いが、器体裏面左側縁の微小剥離痕分布はsawingによる形成と考えられる。

<遺構の性格> 不明である。縄文時代居住施設の可能性はあるが、炉が設置されておらず根拠に欠ける。

<時期> 遺構の特徴と堆積土から縄文時代である。土器が出土していないことから、細別時期は不明である。

2号竪穴建物跡（第15図、写真図版12・13）

<検出状況> X = 15059, Y = 80460 付近に位置する。丘陵地から続く尾根部先端の平坦面で、モザイク状に分布する黒色～黒褐色プランを検出した。このプラン上で内面黒色処理の土師器破片が出土した。プラン範囲及びその周辺は、歩行すると極端に窪む場所が数カ所存在していたことから、植木の根の浸食や倒木痕跡などが影響していると考えられる。

<規模・形状> 竪穴規模は3.84 × 3.10 mで、平面形は方形である。建物南壁の立ち上がりラインが不明瞭で、上述の検出面上で極端に窪む範囲にあたることから、根によるカクランを受けていると考えられる。

<掘形> 明確な掘り込みと貼床土を見いだせなかった。素掘り後に、底面の凸凹を整えて床面としたと考えられる。

<堆積土> 黒～黒褐色土主体である。16層に分離した。西と北方向からの流入による埋没で自然堆積である。雨天時の雨水の流入もこれらの方向からの流入であった。9・16層によって壁溝が先行して埋没しており、11～15層が北壁際に連続的に堆積している。1・2・6層は建物中央部に広く分布し、6層より下部では遺物を多く含む。

<構成要素・付属施設> カマド1基、ピット3基、壁溝がある。カマドは東壁南寄りに敷設されており、崩落によって芯材礫が流出している。煙道は長煙道で燃焼部底面よりも若干高く設置されている。燃焼部は土坑状に掘り込み、それを整地後に構築されている。燃焼部内に灰掻き取痕は残存しておらず、また燃焼部内の明瞭な赤化は判別できなかった。袖部は左側がわずかに残存するが、構築粘土が芯材礫とともに建物中央方向へと流出している。カマド全長1.98 m、煙道部長1.06 mである。ピットはP3が支柱穴の可能性がある。P1・3が浅く、壁溝ライン沿いに構築されている。P2は長方形土坑で土師器破片、炭化物が出土したことから、貯蔵穴もしくは廃棄土坑と考えられる。

<遺物分布> 床面上はカマド両脇に遺物が集中する。床面中央部にはカマド芯材礫が散在している。遺物の大半は堆積土中部～下部の第6層出土である。2号竪穴建物跡と2号土坑で接合関係のある資料が存在する。

<遺物> 土師器が出土している。

【土師器】 本章で図示した1～20の土師器は、2号竪穴建物と2号土坑のいずれかに帰属する。2号竪穴建物と2号土坑で遺構間接合する資料は3・6・7・9・17～19、2号竪穴建物帰属は1・2・4・5・8、2号土坑帰属は10～16・20である。2号竪穴建物と2号土坑は、その配置と堆積土の状況から、居住施設と廃棄穴の関係にあると考えられる。遺構間接合資料と2号竪穴建物帰属資料のうち、1～15は坏、16～19は甕である。坏はすべて内面黒色処理で、8の内面は被熱による黒色処理痕跡がわずかに残存している。2・3・10は高台付坏である。3・5・6・9の底部回転糸切痕からロク右回転と考えられる。甕は回転ナデ調整で、19の胴部中央にハケが見られる。17～19は口縁部が短く外反する。

<遺構の性格> 平安時代の居住施設である。

<時期> 遺構の特徴と、床面出土遺物の年代から、9世紀後半～10世紀初頭である。

<所見> 古代建物としては調査範囲7,550㎡のなかで、本遺構僅か1棟のみ見つかった。山小屋・見張小屋の性格を有する建物の可能性が考えられる。建物内堆積土から鍛冶滓が出土しているが、床面に鍛冶炉は設置されていないので工房的性格を有するかは不明である。

3号竪穴建物跡（第17・18図、写真図版14）

<検出状況> X = 15016、Y = 80479 付近に位置する。丘陵地から続く斜面地で僅かに黒褐色が筋状に残存する長方形プランを検出した。

<規模・形状> 竪穴規模は 11.20 × 2.50 m で、平面形は長方形と考えられるが、床面が斜面上方にあたる西側のみ残存しており、全体形状は不明である。西側壁際に柱穴 8 個が列状配置となる。P 1 ~ 3 は壁溝内に設置されている。

<堆積土> 黒褐色 ~ 暗褐色土である。3 層に分離した。床面残存幅は 1 m 程度であり、堆積層の残存状況は不良である。

<構成要素・付属施設> 柱穴 9 個を検出している。

<重複関係> 4 号竪穴建物と重複するが、新旧関係は不明である。

<遺物> なし。

<遺構の性格> 不明である。類似の遺構として中世の工房跡があるが、本遺構は、残存状況不良のためか、工房的性格を示すような生産痕跡を見い出せていない。

<時期> 遺構の特徴から中世である。

4号竪穴建物跡（第17・18図、写真図版14）

<検出状況> X = 15016、Y = 80479 付近に位置する。丘陵地から続く斜面地で僅かに黒褐色が筋状に残存する長方形プランを検出した。

<規模・形状> 竪穴規模は不明で僅かに 2.65 × 1.2 m の範囲が残存している。平面形は方形の可能性はあるが不明である。

<堆積土> 暗褐色土である。堆積層の残存状況は不良である。

<構成要素・付属施設> 柱穴 3 個（P 10 ~ P 12）と壁溝を検出している。

<重複関係> 3 号竪穴建物と重複するが、新旧関係は不明である。

<遺物> なし。

<遺構の性格> 不明である。類似の遺構として中世の工房跡があるが、本遺構は、残存状況不良のためか、工房的性格を示すような生産痕跡を見い出せていない。

<時期> 遺構の特徴から中世である。

5号竪穴建物跡（第19図、写真図版15）

<検出状況> X = 15031、Y = 80478 付近に位置する。丘陵地から続く斜面地で黒褐色が筋状に残存する方形プランを検出した。

<規模・形状> 竪穴規模は 3.58 × 1.84 m の範囲が残存している。平面形は方形の可能性はある。

<堆積土> 黒褐色土である。堆積層の残存状況は不良である。

<構成要素・付属施設> 柱穴 5 個と壁溝を検出している。

<重複関係> 6 号竪穴建物と重複する可能性があるが、その痕跡を把握できなかった。

<遺物> コハク片が P 2 から出土している。

<遺構の性格> 不明である。類似の遺構として中世の工房跡があるが、本遺構は、残存状況不良のためか、工房的性格を示すような生産痕跡を見い出せていない。

<時期> 遺構の特徴から中世である。

6号堅穴建物跡（第19図、写真図版15）

<検出状況> X = 15037, Y = 80478 付近に位置する。丘陵地から続く斜面地で5号堅穴建物に連続する柱穴列として把握した。検出時、5・6号堅穴建物は一体の遺構であろうと考えられた。

<規模・形状> 堅穴部は斜面地削平によって消失したと考えられ、柱穴のみが残る。配置や他の中世堅穴建物との類似性から、暫定的に堅穴建物跡として報告する。残存する柱穴は4.96 × 1.40 m範囲に収まる。

<堆積土> 不明である。柱穴は黒褐色土主体である。

<構成要素・付属施設> 柱穴7個を検出している。

<重複関係> 5号堅穴建物と重複する可能性があるが、その痕跡を把握できなかった。

<遺物> なし

<遺構の性格> 不明である。類似の遺構として中世の工房跡があるが、本遺構は、残存状況不良のためか、工房的性格を示すような生産痕跡を見い出せていない。

<時期> 遺構の特徴から中世である。

<所見> 5・6号堅穴建物は一体の遺構の可能性があるが、その形状は斜面流出により把握できない。5号堅穴建物のP1～3と、6号堅穴建物のP4～6は同一列であるが、柱間寸法は不定であるため、掘立柱形式の建物とは考えがたく、削平の進んだ堅穴建物と捉えた。

7号堅穴建物跡（第20・21図、写真図版16～18）

<検出状況> X = 15070, Y = 80470 付近に位置する。尾根部の先端に位置する2号堅穴建物から見下ろす斜面地に、堅穴部を有する方形範囲として把握した。

<規模・形状> 堅穴部は斜面地削平によって削平されているが、山側の残存状況は良好であった。平面が長方形基調の8号堅穴建物跡と重複する。柱穴配置と壁溝の重複関係から、建替えが複数回行われたと考えられる。残存範囲は5.30 × 3.85 mに収まるが、谷側の消失範囲を考慮すると平面形は正方形基調と考えられる。柱穴の重複から、A・B・C期に分けて提示する。床面調査時に北部に残存していた高まりと、その高まりと同標高で検出した柱穴から、A・B→Cの順に建替えられたと推定した。

A・B期建物：正方形基調で、壁溝より内側に柱穴があると想定した。張出部は未検出である。

C期建物：A・B期建物を若干拡張した建物で、正方形基調である。壁溝と柱穴9個を構成要素とする。

<堆積土> 黒褐色土主体である。3層に分離した。斜面上方からの流入による埋没と考えられる。

<構成要素・付属施設> 壁溝と柱穴を検出している。

<重複関係> 8号堅穴建物と重複し、これに切られる。

<遺物> なし

<遺構の性格> 不明である。類似の遺構として中世の工房跡があるが、本遺構は、残存状況不良のためか、工房的性格を示すような生産痕跡を見い出せていない。

<時期> 遺構の特徴から中世である。

8号堅穴建物跡（第20・21図、写真図版18）

<検出状況> X = 15070, Y = 80470 付近に位置する。尾根部の先端に位置する2号堅穴建物から見下ろす斜面地で、当初は7号堅穴建物の張出部の可能性のある範囲として把握した。

<規模・形状> 7号堅穴建物の直線的に延びる壁ラインが、緩やかに湾曲する範囲を柱配置から建物

として想定している。7号堅穴建物と建物軸が異なるが、形状は7号堅穴建物と類似の正方形基調と捉えた。なお、8号堅穴建物帰属柱穴が7号堅穴建物Ⅱ期の構成要素の可能性も否定できない。

<堆積土>6層に分離した。6層は貼床の可能性がある。本遺構は斜面上方からの流入によって埋没したと考えられる。

<構成要素・付属施設>柱穴4個を検出している。

<重複関係>7号堅穴建物と重複するが、新旧関係は不明である。

<遺物>なし

<遺構の性格>不明である。類似の遺構として中世の工房跡があるが、本遺構は、残存状況不良のためか、工房的性格を示すような生産痕跡を見い出せていない。

<時期>遺構の特徴から中世である。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第22図、写真図版19)

<検出状況>X = 15065、Y = 80480付近に位置する。

<規模・形状>北側と東側が調査区外に位置すると考えられる。2間×5間以上の庇付建物が想定される。桁行33尺(1000cm)以上で、柱間寸法6.8尺(206cm)を多用する。

<堆積土>黒褐色土主体である。

<構成要素・付属施設>柱穴13個を検出している。

<重複関係>2号掘立柱建物と重複する。

<遺物>なし

<遺構の性格>全体形状が判断できないため不明である。ただし、想定した2×5間以上の庇付建物であれば、中世民家の主屋の可能性が考えられる。

<時期>遺構の特徴から中世である。なおP112出土木片の年代測定値は15世紀であった。

2号掘立柱建物跡 (第23図、写真図版19)

<検出状況>X = 15070、Y = 80470付近に位置する。

<規模・形状>東側が調査区外へ延びる。桁行30尺(909cm)以上で、柱間寸法7.5尺を多用する。

<堆積土>黒褐色土主体である。

<構成要素・付属施設>柱穴7個を検出している。また、同列上に木材切出道路範囲で2個のピットを検出した。

<重複関係>1号掘立柱建物と重複する。

<遺物>なし

<遺構の性格>全体形状が判断できないため不明である。ただし、1号掘立柱建物跡と重複する柱筋の通った5間以上の建物であれば、1号掘立柱建物跡と重複する中世民家の主屋の可能性が考えられる。

<時期>遺構の特徴から中世である。

(3) カマド状遺構

1号カマド状遺構 (第24図、写真図版24)

<検出状況>調査区中央斜面地のX = 15042、Y = 80482付近、標高64~65mに位置する。黒褐色

の長楕円形プランの外側に被熱した赤化範囲と、西側に焼土混入量の多い煙道状プランを検出した。
 <規模・形状>平面形は長楕円形で、底面は概ね平坦で東方向に緩やかに下降する。断面形は椀形である。煙道部は長軸西端壁の上部に設置されており、煙出部は煙道部よりも窪むよう掘り込まれている。

<堆積土>6層に分離した。焼土や炭化物層が複数層存在する。燃焼部東端は炭化物範囲が広がり、中央部は壁面が明赤褐色となり、焼成温度が高かったと推定される。燃焼部中央には粘土状ブロックが混入していることから、ドーム状の天井部崩落土が混入したと考えられる。

<遺物>焼土、炭化物層のサンプルを採取し、種子同定を行った結果、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなどの穀類が検出された。

<遺構の性格>詳細はⅥ・Ⅶ章で触れているが、カマド状遺構は、中世～近世の焼却施設兼、灰造り施設との評価が得られている。本遺構出土種子の組成などからこれまで得られている知見と合致する焼却施設兼灰造り施設と考えられる。

<時期>堆積土と遺構の特徴から、中世である。

(4) 陥し穴状土坑

1号陥し穴状土坑 (第24図、写真図版20)

<検出状況>調査区西側のX = 15016、Y = 80437付近、標高73～74mに位置する。黒褐色土の円形プランを9号陥し穴状土坑に隣接して検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形で、底面は平坦で中央に副穴1個を有する。開口部規模1.80 × 1.93mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>罌氣施設と考えられる。単独で構築されるよりは2～3基1セットとして構築されることが多いため、調査区外に対となる陥し穴状土坑の存在も想定される。同一形態の陥し穴状土坑は標高65～68mに2～6号陥し穴状土坑が分布する。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期～中期に多い。

2号陥し穴状土坑 (第24図、写真図版20)

<検出状況>調査区中央のX = 15044、Y = 80462付近、標高67～68mに位置する。10号陥し穴状土坑と重複する黒褐色土の楕円形プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形で、底面は平坦で中央に副穴1個を有する。開口部規模1.26 × 1.22mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<重複関係>平面形が溝状の10号陥し穴状土坑溝と重複し、これに切られる。

<遺構の性格>罌氣施設と考えられる。同一形態は標高65～68mに3～6号陥し穴状土坑が分布する。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期～中期に多い。

3号陥し穴状土坑 (第25図、写真図版20)

<検出状況>調査区中央のX = 15012、Y = 80462付近、標高68～69mに位置する。黒褐色土の円形プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形で、底面は平坦で中央に副穴1個を有する。開口部規模1.72 × 1.81 mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。同一形態の陥し穴状土坑は標高65~68 mに2・4~6号陥し穴状土坑が分布する。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期~中期に多い。

4号陥し穴状土坑（第25図、写真図版20）

<検出状況>調査区中央のX = 15023、Y = 80464付近、標高67.5 mに位置する。3号竪穴建物跡の西側で楕円形の黒褐色プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形である。底面は平坦で中央からやや西寄りに副穴1個を有する。開口部規模1.46 × 1.42 mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。同一形態の陥し穴状土坑は南側の標高65~68 mに3・5・6号陥し穴状土坑が分布する。本遺構と対となるような配置関係は不明である。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期~中期に多い。

5号陥し穴状土坑（第26図、写真図版21）

<検出状況>調査区中央の標高67 mの獣道状に延びる緩斜面で楕円形の黒褐色プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形である。底面平面形は方形で、副穴が1個ある。開口部規模1.68 × 1.52 mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。主に斜面地上方からの土砂の流れ込みによって埋没したと考えられる。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。同一形態の陥し穴状土坑は南側の標高65~68 mに3・4・6号陥し穴状土坑が分布する。3号陥し穴状土坑は、本遺構と対となるような配置関係の可能性が有る。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期~中期に多い。

6号陥し穴状土坑（第26図、写真図版21）

<検出状況>調査区中央のX = 15007、Y = 80469付近、標高66.5 mの獣道状の緩斜面地において楕円形の黒褐色プランを検出した。5号陥し穴状土坑が隣接する。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形である。底面平面形は楕円形で、副穴が1個ある。開口部規模1.42 × 1.36 mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。主に斜面地上方からの土砂の流れ込みによって埋没したと考えられる。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。同一形態の陥し穴状土坑は南側の標高65~68 mに3・4・5号陥し穴状土坑が分布する。5号陥し穴状土坑は、本遺構と対となるような配置関係の可能性が有る。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期~中期に多い。

7号陥し穴状土坑 (第26図、写真図版21)

<検出状況>調査区中央のX = 15015、Y = 80470付近、標高66mの獣道状の緩斜面地において13号陥し穴状土坑と重複する楕円形の黒褐色プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形である。底面平面形は楕円形で、副穴が1個ある。13号陥し穴状土坑と重複しこれに切られている。開口部規模1.58 × 1.31mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されたと考えられるが、13号陥し穴状土坑と重複しているため、堆積土の残存状態は不良であった。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。同一形態の陥し穴状土坑は南側の標高65~68mに3~6号陥し穴状土坑が分布する。4・5号陥し穴状土坑が隣接しており、本遺構と対となるような配置関係の可能性がある。本遺構は開口部平面形が円形基調で、平面形溝状の13号陥し穴状土坑と重複し、これに切られている。これらと同じ2種の平面形態の重複関係が2・10号陥し穴状土坑で確認されている。本遺跡においては、開口部平面形態円形が古く、溝状が新しい傾向を確認した。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期~中期に多い。

8号陥し穴状土坑 (第26図、写真図版21)

<検出状況>調査南側のX = 15001、Y = 80481付近、標高63mの谷状地形において楕円形の黒褐色プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は楕円形である。底面平面形は不整形で、副穴が1個ある。開口部規模1.10 × 1.18mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されたと考えられる。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。同一形態の陥し穴状土坑は南側の標高65~68mに3~7号陥し穴状土坑が分布する。6号陥し穴状土坑が等高線直行方向に位置し、本遺構と対となるような配置関係の可能性がある。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代前期~中期に多い。

9号陥し穴状土坑 (第27図、写真図版22)

<検出状況>調査区西側のX = 15017、Y = 80437付近、標高72~73mに位置する。黒褐色土の溝状プランを1号陥し穴状土坑に隣接して検出した。

<規模・形状>開口部平面形は溝状で、底面は中央がやや盛り上がり、両端がやや窪む。開口部規模2.94 × 1.01mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>畏気施設と考えられる。単独で構築されるよりは2~3基1セットとして構築されることが多いため、調査区外に対となる陥し穴状土坑の存在も想定される。同一形態の陥し穴状土坑は標高67~68mに10~12・14号陥し穴状土坑が分布するが、本遺構とは距離が30m近く離れており、長軸方向も一致していないため、セット関係を有するかは不明である。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代中期以降に多い。

10号陥し穴状土坑 (第27図、写真図版22)

<検出状況>調査区中央のX = 15042、Y = 80464付近、標高67~68mに位置する。黒褐色土の溝状プランを11号陥し穴状土坑に隣接して検出した。

＜規模・形状＞開口部平面形は溝状で、底面は平坦である。長軸断面形は箱形で、壁面は直線的に立ち上がる。開口部規模 3.00 × 0.23 m である。

＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

＜遺構の性格＞畏気施設と考えられる。重複関係にないが、同形態で長軸方向がほぼ一致する 11 号陥し穴状土坑が隣接している。10・11 号陥し穴状土坑が、同一目的によって獣道状範囲に設置されたと想定される。

＜時期＞縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

11号陥し穴状土坑（第28図、写真図版22）

＜検出状況＞調査区中央の X = 15042、Y = 80464 付近、標高 67～68 m に位置する。黒褐色土の溝状ブランを 10 号陥し穴状土坑に隣接して検出した。

＜規模・形状＞開口部平面形は溝状で、底面は平坦である。長軸断面形は袋状で、底面付近の壁を挟り込む。開口部規模 2.93 × 0.20 m である。

＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

＜遺構の性格＞畏気施設と考えられる。重複関係にないが、同形態で長軸方向がほぼ一致する 10 号陥し穴状土坑が隣接している。10・11 号陥し穴状土坑が、同一目的によって獣道状範囲に設置されたと想定される。

＜時期＞縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

12号陥し穴状土坑（第28図、写真図版22）

＜検出状況＞調査区中央の X = 15022、Y = 80467 付近、標高 67 m に位置する。黒褐色土の溝状ブランを検出した。

＜規模・形状＞開口部平面形は溝状で、底面は平坦である。長軸断面形は袋状で、底面付近の壁を挟り込む。北端は壁面に凹凸が残存しており、調査過程で掘り足りなかった可能性が考えられる。開口部規模 3.81 × 0.45 m である。

＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

＜遺構の性格＞畏気施設と考えられる。同形態で長軸方向が一致する 13 号陥し穴状土坑が隣接している。本遺構とのセット関係が想定される。

＜時期＞縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

13号陥し穴状土坑（第28図、写真図版23）

＜検出状況＞調査区中央の X = 15015、Y = 80470 付近、標高 66～67 m に位置する。7号陥し穴状土坑と重複する黒褐色土の溝状ブランを検出した。

＜規模・形状＞開口部平面形は溝状で、底面は平坦である。長軸断面形は袋状で、底面付近の壁を挟り込む。開口部規模 4.02 × 1.05 m である。

＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。7号陥し穴状土坑の堆積土との境界は明瞭であった。

＜遺構の性格＞畏気施設と考えられる。同形態で長軸方向が一致する 12 号陥し穴状土坑が隣接している。本遺構とのセット関係が想定される。

＜時期＞縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

14号陥し穴状土坑 (第28図、写真図版23)

<検出状況>調査区中央のX = 15004、Y = 80468付近、標高67~68mに位置する。14号陥し穴状土坑と重複する黒褐色土の溝状プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は溝状で、底面は西側方向へ緩やかに下降する。長軸断面形は袋状で、底面付近の壁を僅かに挟り込む。開口部規模2.89 × 0.90mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>異気施設と考えられる。同形態で長軸方向が一致する16号陥し穴状土坑が隣接している。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

15号陥し穴状土坑 (第29図、写真図版23)

<検出状況>調査区北側のX = 15067、Y = 80483付近、標高60~61mに位置する。1・2号掘立柱建物跡範囲の柱穴群調査中に黒褐色土の溝状プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は溝状で、底面は概ね平坦である。長軸断面形は袋状で、底面付近の壁を挟り込む。開口部規模4.43 × 0.98mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>異気施設と考えられる。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

16号陥し穴状土坑 (第29図、写真図版23)

<検出状況>調査区中央のX = 15016、Y = 80479付近、標高64~65mに位置する。3・4号竪穴建物跡範囲で黒褐色土の溝状プランを検出した。

<規模・形状>開口部平面形は溝状で、底面は東側へ緩やかに下降する。長軸断面形は袋状で、壁は直線的に立ち上がる。開口部規模3.77 × 0.66mである。

<堆積土>黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。

<遺構の性格>異気施設と考えられる。隣接する同形態の遺構は、12・13号陥し穴状土坑があるが、長軸方向が異なる。

<時期>縄文時代である。県内調査事例から、同形態は縄文時代後期以降に多い。

(5) 中世墓墳**1号中世墓墳** (第30図、写真図版26)

<検出状況>調査区東側のX = 15059、Y = 80467付近、標高65~66mに位置する。中世帰属の7・8号竪穴建物跡に隣接した斜面地で炭化物が大量に含まれている黒褐色土の長方形プランを検出した。

<規模・形状>平面形は長方形で、底面は一部凹凸があるが概ね平坦である。長軸断面形は皿形である。開口部規模1.20 × 0.82mである。

<堆積土>2層に分層した。炭化物を多量に包含する。

<遺構の性格>遺構内土壌をフレイにかけたが、遺物を確認できなかった。ただし、多量の炭化物と3・4号中世墓墳との形態的類似性から中世火葬墓と考えられる。

<時期>堆積土と遺構の形態的特徴から中世である。

2号中世墓墳 (第30図、写真図版26)

<検出状況>調査区西側斜面地のX = 14998、Y = 80457付近、標高69~70mに位置する。炭化物が多量に含まれている黒色土の楕円形プランを検出した。南端部は木根によるカクランを被っていた。

<規模・形状>平面形は楕円形に近く、底面は概ね平坦である。長軸断面形は皿形である。開口部規模1.30 × 1.08 mである。

<堆積土>5層に分離した。黒褐色土主体で、炭化物を多量に含まれる。また、焼土粒、焼骨と考えられる白色粒子を包含する。

<遺物>堆積土をすべて1mmメッシュのフルイにかけたところ、中世の古銭が3枚出土した。このうち、銭種判別できた永楽通宝(35)を掲載した。35は形態的に本銭ではなく模鑄銭である。

<遺構の性格>中世の火葬墓と考えられる。出土した大量の炭化物は燃料材破片と考えられる。副葬された古銭の枚数が少ないが、木根によるカクランによって流出した可能性も考えられる。

<時期>堆積土と遺構の形態的特徴、出土遺物から中世である。少なくとも永楽通宝の初鑄年代1411年以降である。

3号中世墓墳 (第30図、写真図版26)

<検出状況>調査区南側谷状地形のX = 14990、Y = 80478付近、標高63~64mに位置する。炭化物が多量に含まれている黒色土の長方形プランを検出した。

<規模・形状>平面形は長方形に近く、底面は平坦である。断面形は鉢形である。開口部規模1.65 × 1.13 mである。

<堆積土>4層に分離した。黒色土主体で、炭化物を多量に含まれる。また、焼土粒、焼骨、青磁碗片、中世古銭を包含する。

<遺物>堆積土をすべて1mmメッシュのフルイにかけ、青磁碗片(21)、中世の古銭10枚(26~34、ただし33は2枚が溶着している)、焼骨片を回収した。また、炭化材の年代測定を行い1σで15世紀後半~17世紀初頭の年代を得た。青磁は小破片のため、文様等の特徴に乏しいが、古銭は表面がすべて緑青に覆われており、31は判別不能なほど折れ曲がっている。火葬時の被熱による焙煎が想定される。本遺構では宋銭・明銭の模鑄銭を中心とした組成で、判読可能なのは、26:天聖元宝、27:永楽通宝、30:宣徳通宝である。

<遺構の性格>中世の火葬墓で、出土した大量の炭化物は燃料材破片と考えられる。

<時期>堆積土と遺構の形態的特徴、出土遺物から中世である。少なくとも永楽通宝の初鑄年代1411年以降であるが、模鑄銭で占められる宋銭の組成は16世紀後半以降に多い傾向にある。また、AMS年代測定法で、1σで最も新しい年代が16世紀末~17世紀初頭の結果を得たことから、16世紀代の可能性がある。

4号中世墓墳 (第30図、写真図版26)

<検出状況>調査区南側谷状地形のX = 14997、Y = 80481付近、標高62~63mに位置する。炭化物が包含されている黒色土の長方形プランを検出した。

<規模・形状>平面形は長方形に近く、底面は平坦である。断面形は皿形である。開口部規模1.31 × 0.81 mである。

<堆積土>3層に分離した。黒色土主体で、炭化物を包含する。また、焼土粒、焼骨、中世古銭片を

包含する。

<遺物>堆積土をすべて1mmメッシュのフルイにかけ、中世の古銭片2枚を回収したが、小片のため判読不能であった。

<遺構の性格>3号中世墓塚と同形態で、類似の遺物が出土することから中世の火葬墓で、出土した炭化物は燃料材破片と考えられる。

<時期>堆積土と遺構の形態的特徴、出土遺物から中世である。

(6) 土 坑

1号土坑 (第31図、写真図版24)

<検出状況>調査区北側尾根状地形のX = 15045、Y = 80440付近、標高70~71mに位置する。暗褐色の円形プランを検出した。

<規模・形状>平面形は円形で、底面は平坦である。断面形は箱形である。開口部規模2.25 × 2.18mである。

<堆積土>11層に分離した。堆積土上部に土師器片、底面直上~堆積土下部に炭化材が出土した。壁面には被熱痕跡を検出できなかったが、堆積土には焼土が混入していた。

<遺物>土師器片が出土した。小片のため図示していないが、2号竪穴建物跡出土と時間的には近い可能性が考えられる。

<遺構の性格>不明である。底面の炭化材や堆積土内の焼土から、何らかの焼成が行われたと考えられるが、判断する根拠に乏しい。

<時期>堆積土と出土遺物から平安時代と考えられる。

2号土坑 (第31図、写真図版24)

<検出状況>調査区北側尾根状地形のX = 15057、Y = 80461付近、標高66~67mに位置する。黒褐色の円形プラン内に多量の焼土と土師器片が集中している範囲を2号竪穴建物跡付近で検出した。

<規模・形状>平面形は楕円形で、底面は概ね平坦である。断面形は皿形である。開口部規模1.58 × 0.93mである。

<堆積土>4層に分離した。1・2層に土師器が集中している。3層は廃棄焼土層である。廃棄焼土層は遺構内南側に偏って分布している。

<遺物>土師器が出土している。

【土師器】本章で図示した1~20の土師器は、2号竪穴建物と2号土坑のいずれかに帰属する。2号竪穴建物と2号土坑で遺構間接合する資料は3・6・7・9・17~19、2号竪穴建物帰属は1・2・4・5・8、2号土坑帰属は10~16・20である。2号竪穴建物と2号土坑は、その配置と堆積土の状況から、居住施設と廃棄穴の関係にあると考えられる。遺構間接合資料と2号竪穴建物帰属資料のうち、1~15は坏、16~19は甕である。坏はすべて内面黒色処理で、8の内面は被熱による黒色処理痕跡がわずかに残存している。2・3・10は高台付坏である。3・5・6・9の底部回転糸切痕からロクロ右回転と考えられる。甕は回転ナデ調整で、19の胴部中央にハゲが見られる。17~19は口縁部が短く外反する。

<遺構の性格>平安時代の廃棄土坑(ゴミ穴)と考えられる。検出時は、周辺で鍛冶滓が出土したことから、鍛冶炉跡の可能性を考慮したが、製鉄関連遺構ではないと捉えた。

<時期>遺構の特徴と、2号竪穴建物跡出土資料との遺構間接合関係から、9世紀後半~10世紀初

頭である。

(7) 柱 穴 群 (第32図、写真図版25)

調査区北側の木材切出用道路と隣接する斜面地～平場にかけて104個検出した。この中には、1・2号掘立柱建物跡を構成する柱穴と、7・8号竪穴建物跡を構成する柱穴があることから、柱穴群範囲の年代は概ね中世と考えられる。なお、柱穴群範囲近辺は平場となっているが、木材切出道路による造成と1・2号掘立柱建物跡建築時の造成によって形成されたと考えられる。なお、第32図は1・2号掘立柱建物跡範囲の柱穴を示した。

3 出 土 遺 物

(1) 土 師 器 (第33・34図、写真図版27・28)

1～20を掲載した。2号竪穴建物跡と2号土坑のいずれかに帰属する。2号竪穴建物跡と2号土坑で遺構間接合する資料は3・6・7・9・17～19、2号竪穴建物跡は1・2・4・5・8、2号土坑は10～16・20である。2号竪穴建物と2号土坑は、その配置と堆積土の状況から、居住施設と廃棄穴の関係にあると考えられる。遺構間接合資料と2号竪穴建物跡資料のうち、1～15は坏、16～19は甕である。坏はすべて内面黒色処理で、8の内面は被熱による黒色処理痕跡がわずかに残存している。2・3・10は高台付坏である。3・5・6・9の底部回転糸切痕から口縁部が短く外反する。甕は回転ナデ調整で、19の胴部中央にハケが見られる。17～19は口縁部が短く外反する。

(2) 輸 入 磁 器 (第35図、写真図版29)

21は3号中世墓壙出土の青磁碗口縁部破片で、口縁部が外反する。22は調査区南側谷底部で出土した青磁碗胴部破片である。21・22の年代は15～16世紀と考えられる。

(3) 石 器 (第35図、写真図版29)

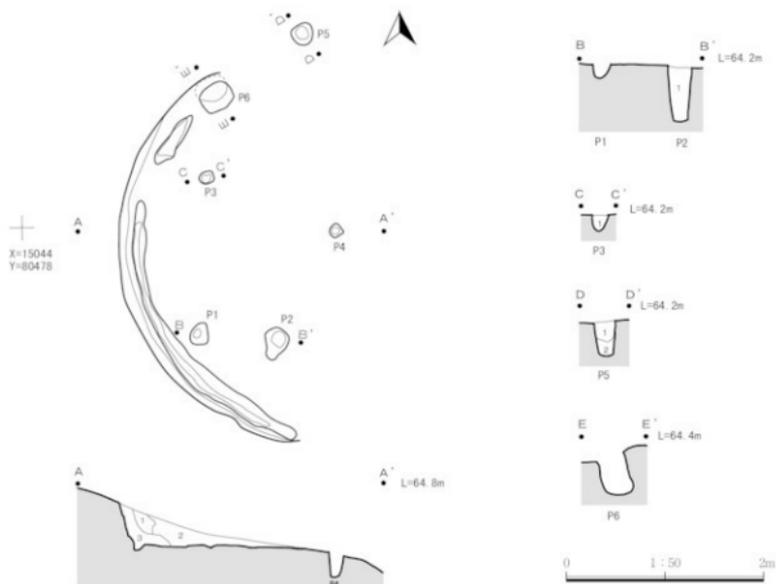
23は平基式の頁岩製石鏃で、24は頁岩製槍先形尖頭器基部である。23・24はⅡ層掘削時に出土した。25は1号竪穴建物跡出土の頁岩製削器で、素材長軸を刃部とする。

(4) 古 銭 (第36図、写真図版29)

26～38を図示した。2号中世墓壙、3号中世墓壙、柱穴群内のP133から出土している。判読可能な古銭は、いずれも本銭より若干サイズの小さな資料で構成されており、模範銭と考えられる。37・38の寛永通宝は調査区南側谷底部出土で新寛永である。

(5) そ の 他

3号中世墓壙堆積土をすべて1mmメッシュフルイにかけて、焼骨片を回収している。遺構の性格から人骨であろうが、小片のため部位不明である。また、5号竪穴建物跡P2からコハク片が出土している。



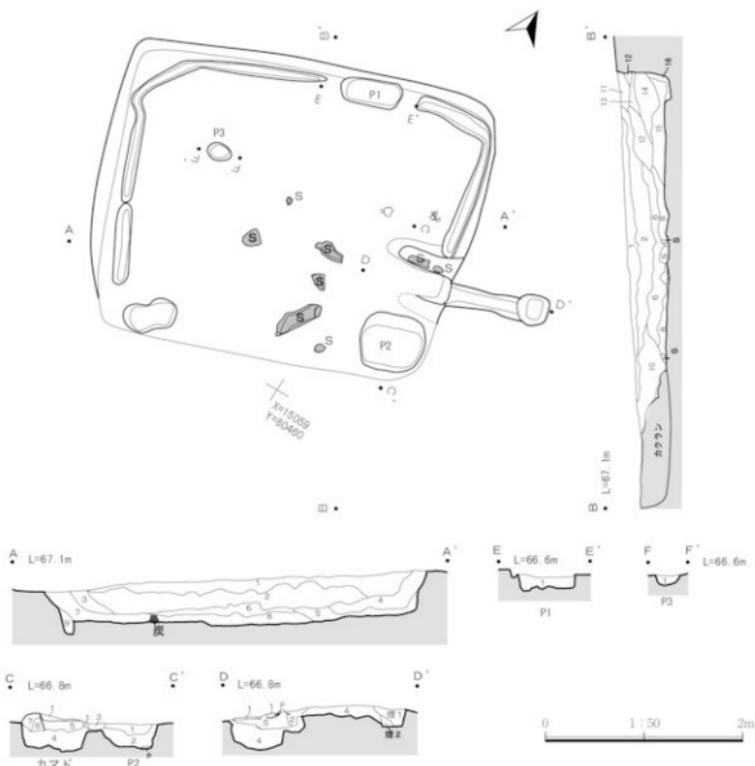
第15圖 1号竖穴建物跡

第8表 1号竖穴建物跡土層觀察表

位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
型穴範圍	1	10YR3/3 暗褐色土	2	1	很多量	
	2	10YR2/2 黑褐色土	2	2	黃褐色土粒3%	
	3	10YR4/4 褐色土	3	2	暗褐色土粒30%	石器出土
P1~6	1	10YR2/2 黑褐色土	2	1	黃褐色土粒10%	
	2	10YR3/2 黑褐色土	2	1		

第9表 2号竖穴建物跡土層觀察表(1)

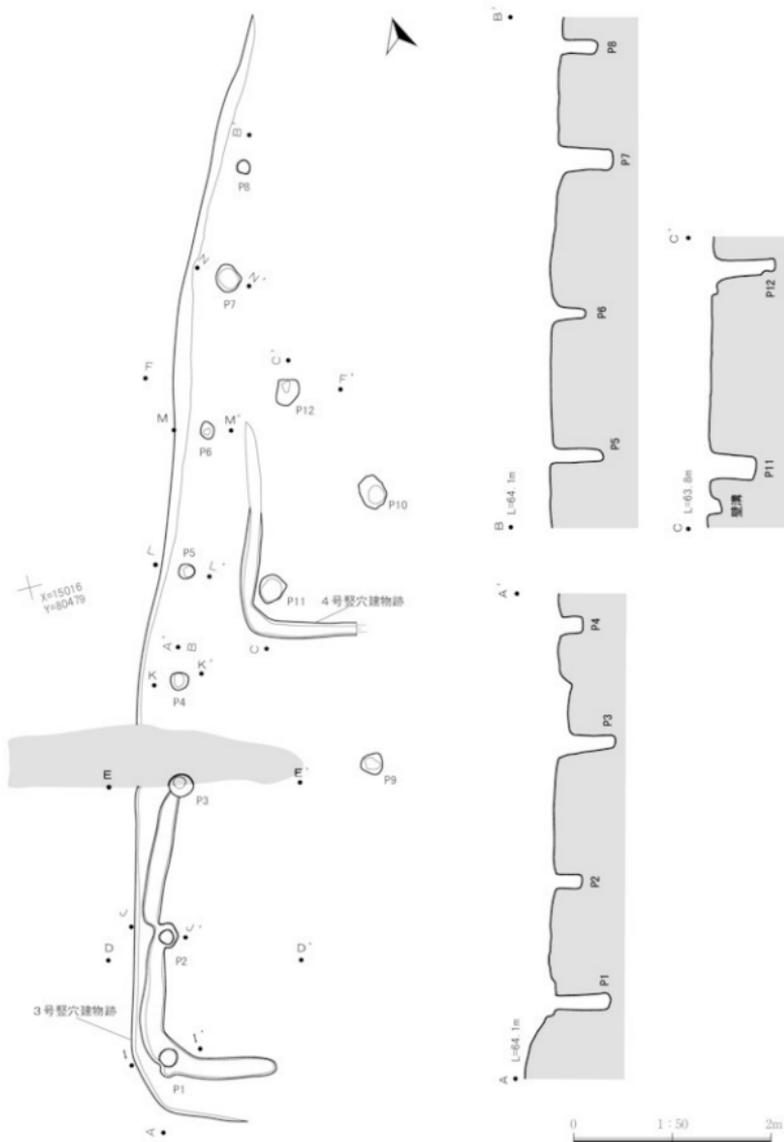
位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
型穴範圍	1	10YR2/2 黑褐色土	2	1	很多量	
	2	10YR3/1 黑褐色土	2	1	很多量、礫φ3cm1%	
	3	10YR3/3 暗褐色土	2	2		
	4	10YR3/3 暗褐色土	3	2		
	5	10YR3/4 暗褐色土	3	1		
	6	10YR2/2 黑褐色土	2	1	黃褐色土粒3%	
	7	10YR4/4 褐色土	3	1	黃褐色土粒30%	
	8	10YR3/3 暗褐色土	4	2	黃褐色土粒10%、炭化物φ3mm1%	
	9	10YR4/4 褐色土	4	3		壁溝
	10	10YR3/3 暗褐色土	2	1	炭化物粒1%	
	11	10YR3/3 暗褐色土	2	1	很多量	
	12	10YR3/4 暗褐色土	2	1	黃褐色土粒1%	
	13	10YR4/4 褐色土	2	1	黃褐色土粒30%	
	14	10YR3/3 暗褐色土	2	1	黃褐色土粒10%、炭化物3mm1%	
	15	10YR4/3 紅褐色土	4	2	黃褐色土粒40%、炭化物1mm1%	
	16	10YR3/3 暗褐色土	3	1	黃褐色土粒10%	壁溝



第16図 2号竪穴建物跡

第10表 2号竪穴建物跡土層観察表(2)

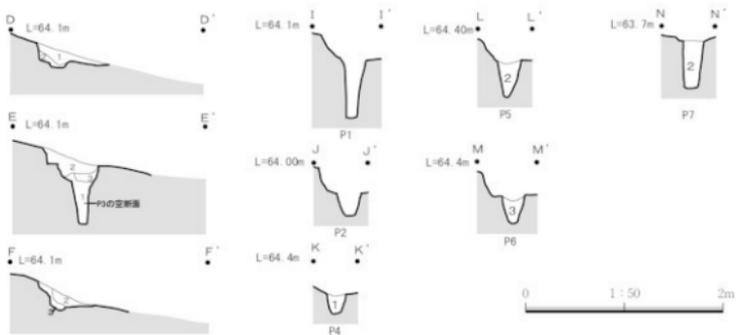
位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
カマド	1	10YR3/3 暗褐色土	1	1		
	2	10YR3/4 暗褐色砂質シルト	2	1	炭化物2%、焼土2%、10YR4/6褐色砂質シルト20%	
	3	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	2	1	焼土25YR4/8-15%、軟性砂岩5%、炭化物1%	
	4	10YR4/6 褐色砂質シルト	2	1		
	5	5YR3/6 暗赤褐色砂質シルト	2	1		焼土
	6	10YR4/4 褐色砂質シルト	2	1	炭化物微量	輪部
	7	10YR3/4 暗褐色砂質シルト	2	1	炭化物、焼土微量	輪部
カマド 煙出部	1	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	2	1	炭化物1%	
	2	10YR4/6 褐色砂質シルト	2	1		
P1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	2	1	炭化物15%、焼土10%	
	1	10YR3/4 暗褐色土	4	3	軟性砂岩8%、焼土3%、炭化物1%	
P2	2	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	2	1	炭化物15%、焼土10%	
	1	10YR5/8 黄褐色砂質シルト	2	1	10YR4/6褐色砂質シルト40%	



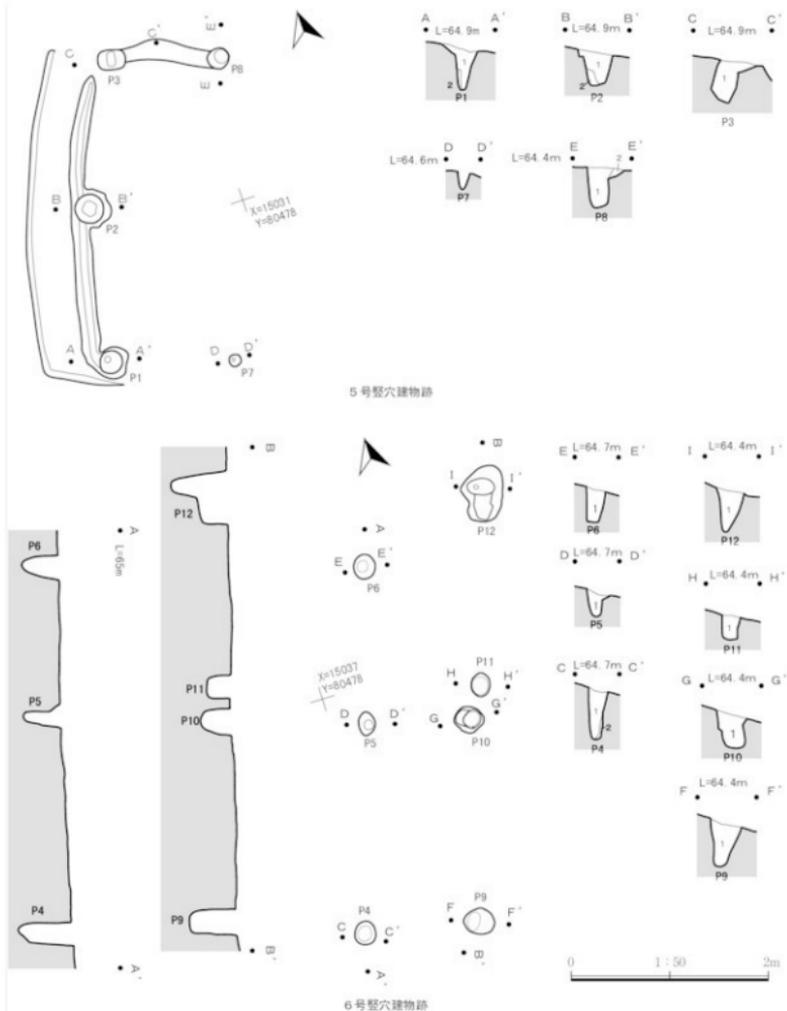
第17图 3・4号竖穴建物跡(1)

第11表 3号竪穴建物跡土層観察表

位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
竪穴部	1	10YR2/2 黒褐色土	2	1	黄褐色土粒1%	
	2	10YR3/3 暗褐色土	2	1	炭化物粒1%	
	3	10YR4/4 褐色土	2	2	黒褐色土3%	
P4~7・9	1	10YR3/3 暗褐色土	2	1	砂10%	
	2	10YR2/2 黒褐色土	2	1	黄褐色土10%	
	3	10YR4/4 褐色土	2	1	黄褐色土5%	



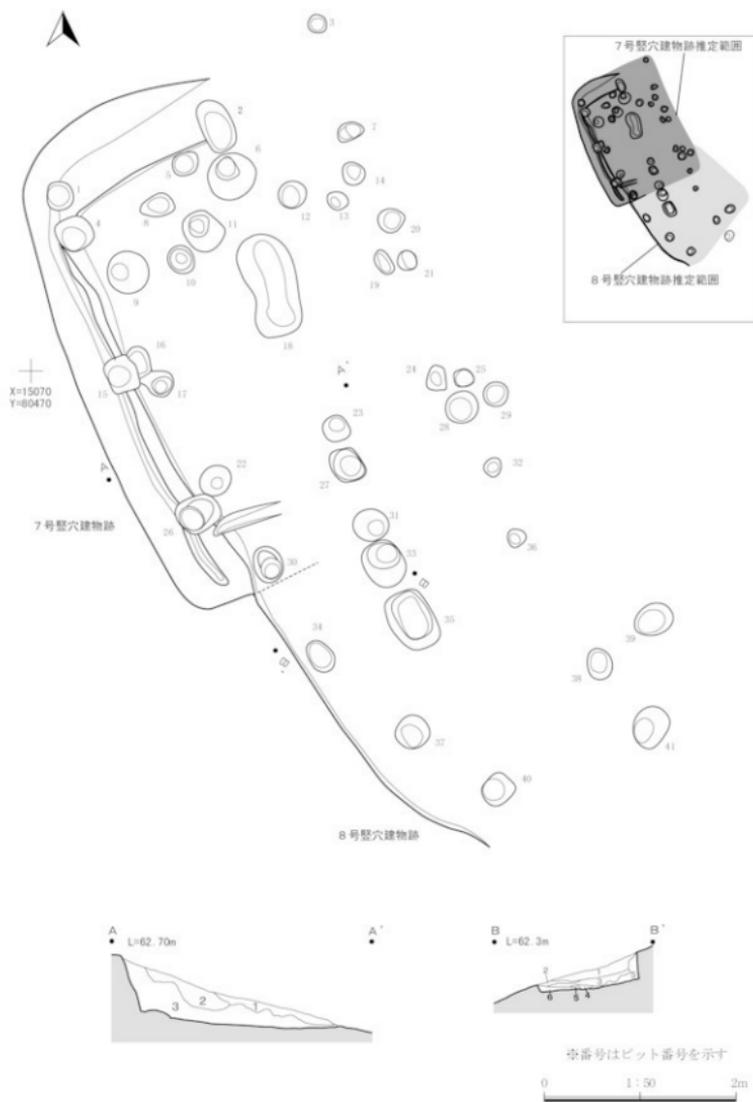
第18図 3・4号竪穴建物跡 (2)



第19図 5・6号竖穴建物跡

第12表 5・6号竖穴建物跡土層観察表

位置	層	土色・土性	粘性	締	此人物	備考
P1~11	1	10YR2/2 黒褐色土	2	1	黄褐色土粒1~10%	
	2	10YR3/3 暗褐色土	2	1		



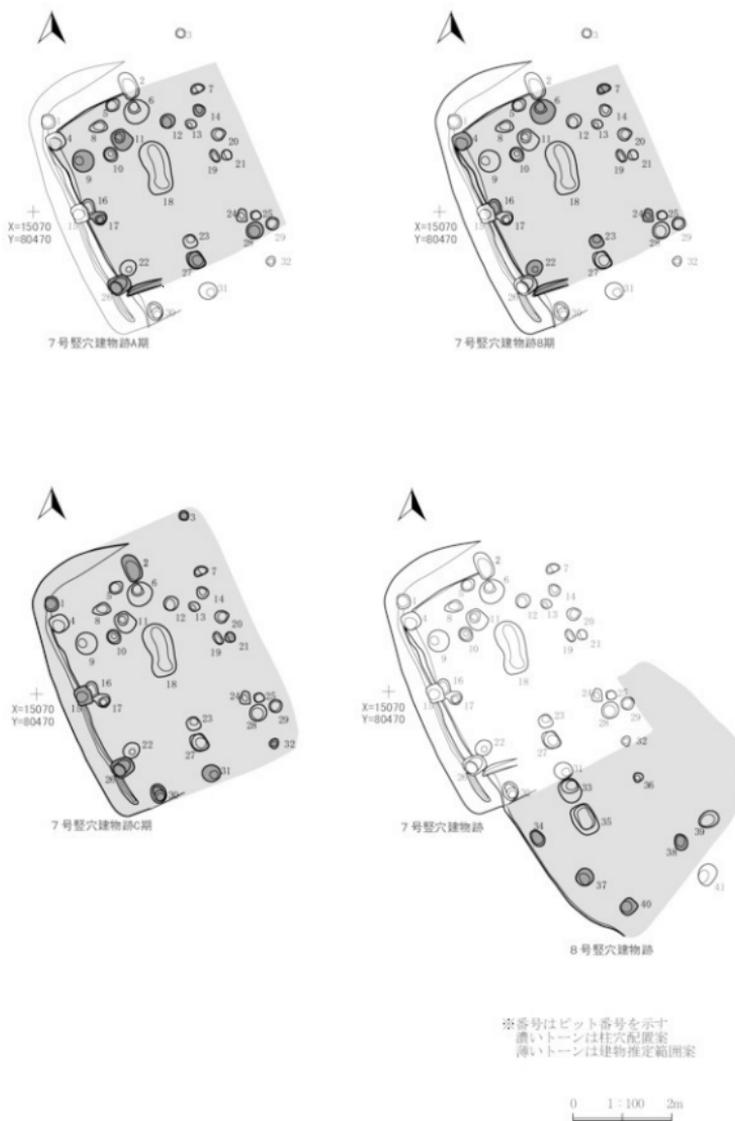
第20図 7・8号竪穴建物跡 (1)

第13表 7・8号竪穴建物跡土層観察表

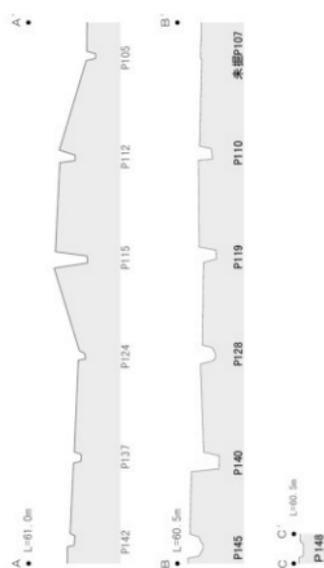
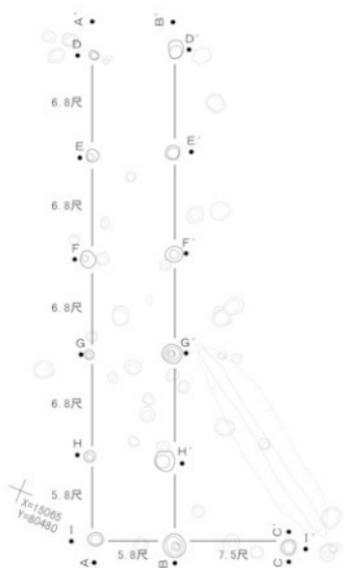
位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
A-A'	1	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	4	3	軟性砂岩2%	
	2	10YR2/2 黒褐色砂質シルト	4	3	炭化物2%、10YR4/6褐色土10%	
	3	10YR2/3 黒褐色砂質シルト	4	3	炭化物φ1mm-1.5mm5%、10YR4/6褐色土20%、非色砂岩2%	
B-B'	1	10YR2/3 黒褐色土	5	4		
	2	10YR2/2 黒褐色土	5	4		
	3	10YR2/3 黒褐色土	5	4		
	4	10YR3/4 暗褐色土	5	3	10YR4/8ブロック・10YR5/8ブロック少量	床面
	5	10YR5/8 黄褐色土	0	1		
	6	10YR3/4 暗褐色土	5	4		

第14表 7・8号竪穴建物跡内ピット観察表

番号	開口部規模 (m)	底面標高 (m)	出土遺物	備考
P1	0.32×0.29	61.39	-	7号竪穴C期
P2	0.36×0.34	61.38	-	7号竪穴C期
P3	0.19×0.20	61.26	-	7号竪穴C期
P4	0.38×0.36	61.29	-	7号竪穴B期
P5	0.29×0.24	61.56	-	
P6	0.52×0.48	61.02	-	7号竪穴B期
P7	0.30×0.19	61.07	-	7号竪穴B期
P8	0.36×0.25	61.56	-	
P9	0.45×0.45	61.39	-	7号竪穴A期
P10	0.32×0.27	61.41	-	
P11	0.47×0.38	61.41	-	7号竪穴A期
P12	0.31×0.29	61.18	-	7号竪穴A期
P13	0.24×0.20	61.22	-	
P14	0.27×0.24	61.06	-	7号竪穴A期
P15	0.39×0.32	61.26	-	7号竪穴C期
P16	0.34×0.20	61.57	-	7号竪穴B期
P17	0.37×0.28	61.44	-	7号竪穴A期
P18	1.10×0.54	61.24	-	
P19	0.29×0.18	61.36	-	
P20	0.28×0.27	61.19	-	
P21	0.23×0.21	61.07	-	
P22	0.36×0.31	61.32	-	7号竪穴B期
P23	0.29×0.28	61.11	-	7号竪穴B期
P24	0.29×0.22	61.01	-	7号竪穴B期
P25	0.21×0.19	60.91	-	
P26	0.46×0.39	61.44	-	7号竪穴A・C期
P27	0.38×0.33	61.04	-	7号竪穴A期
P28	0.37×0.34	61.08	-	7号竪穴A期
P29	0.28×0.28	61.09	-	
P30	0.40×0.31	61.45	-	7号竪穴C期
P31	0.39×0.36	61.25	-	7号竪穴C期
P32	0.21×0.18	61.16	-	7号竪穴C期
P33	0.50×0.47	61.31	-	
P34	0.37×0.26	61.52	-	8号竪穴
P35	0.66×0.48	61.17	-	
P36	0.21×0.20	61.19	-	
P37	0.38×0.36	61.42	-	8号竪穴
P38	0.33×0.27	61.13	-	
P39	0.42×0.33	60.85	-	
P40	0.35×0.29	60.97	-	8号竪穴
P41	0.46×0.37	60.76	-	



第21図 7・8号竪穴建物跡(2)

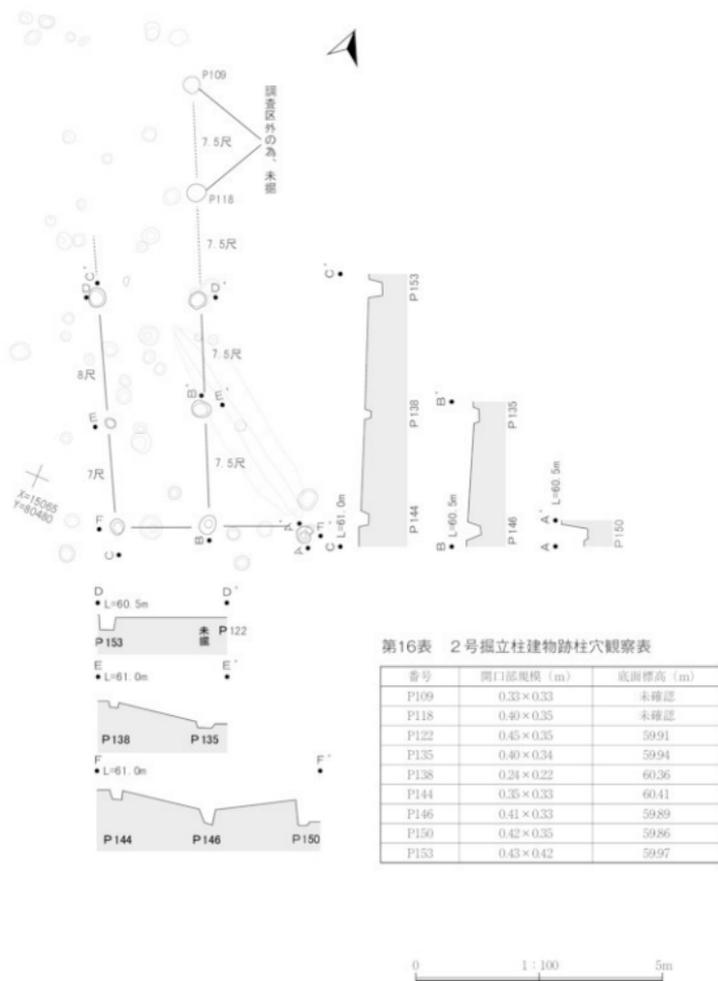


第15表 1号掘立柱建物跡柱穴観察表

番号	開口部規模 (m)	底面標高 (m)
P105	0.20×0.18	59.68
P107	0.40×0.30	未確認
P110	0.30×0.30	59.81
P112	0.25×0.25	60.06
P115	0.35×0.30	59.83
P119	0.35×0.30	59.72
P124	0.20×0.20	59.86
P128	0.41×0.42	59.75
P137	0.25×0.26	59.93
P140	0.45×0.40	59.67
P142	0.32×0.28	60.07
P145	0.51×0.44	60.01
P148	0.35×0.31	60.11



第22図 1号掘立柱建物跡

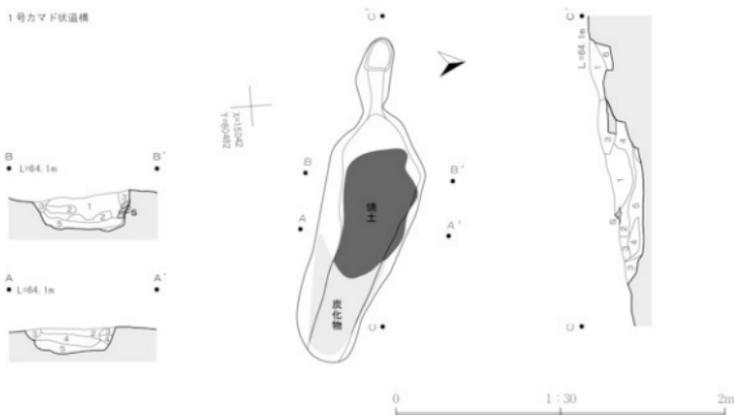


第23図 2号掘立柱建物跡

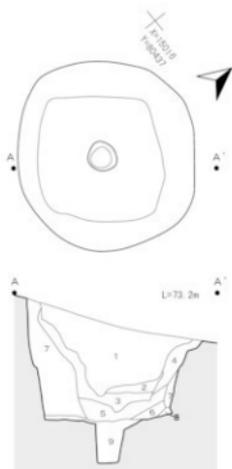
第17表 1号カマド状遺構土層観察表

位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
燃焼部	1	10YR2/2 黒褐色土	2	1	炭化物粒1%	
	2	5YR2/3 極暗赤褐色土	2	1	焼土10%	天井崩落土
	3	5YR4/8 赤褐色土	2	4	炭化物3%	壁面被熱土
	4	5YR3/6 暗赤褐色土	2	1	炭化物1%	天井崩落土
	5	10YR1.7/1 黒色土	2	1	炭化物粒40%	
煙道部	6	10YR4/4 褐色土	2	2	黄褐色土粒10%	

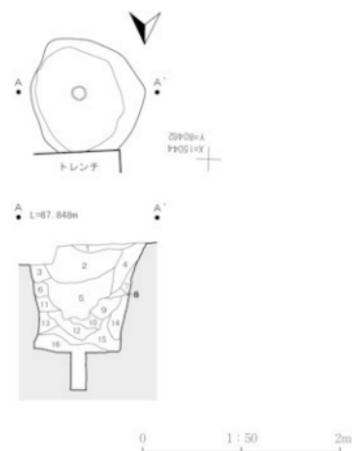
1号カマド状遺構



1号陥し穴状土坑



2号陥し穴状土坑



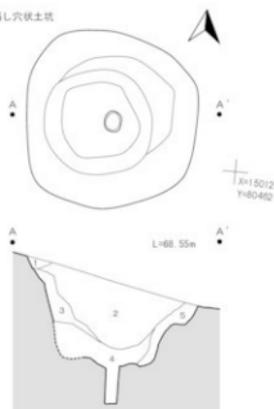
第24図 1号カマド状遺構、1・2号陥し穴状土坑

第18表 1～4号陥し穴状土坑土層観察表

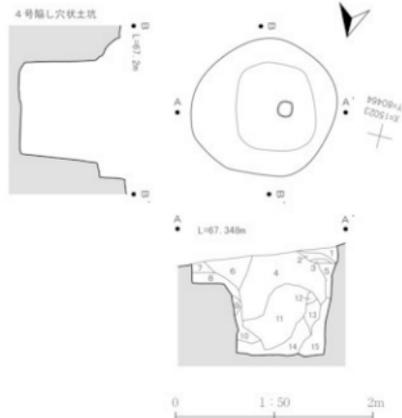
位置	層	土色・土性
1号	1	10YR17/1 黒色土
	2	10YR2/3 黒褐色土
	3	10YR3/4 暗褐色砂質シルト
	4	10YR4/6 褐色土
	5	10YR3/4 暗褐色土
	6	10YR3/4 暗褐色砂質シルト
	7	10YR4/6 褐色砂質シルト
	8	7.5YR5/6 明褐色砂質シルト
	9	10YR3/3 暗褐色砂質シルト
2号	1	10YR17/1 黒色土
	2	10YR17/1 黒色土
	3	10YR2/1 黒色砂質シルト
	4	10YR2/2 黒褐色土
	5	10YR17/1 黒色土
	6	10YR3/4 暗褐色土
	7	10YR4/6 褐色土
	8	10YR2/2 黒褐色土
	9	10YR3/4 暗褐色土
	10	10YR2/3 黒褐色土
	11	10YR3/4 暗褐色土
	12	10YR3/4 暗褐色土
	13	10YR4/6 褐色土
	14	10YR4/6 褐色土
	15	10YR3/4 暗褐色土
	16	10YR2/2 黒褐色土

位置	層	土色・土性
3号	1	10YR2/2 黒褐色土
	2	10YR17/1 黒色土
	3	10YR3/4 暗褐色土
	4	10YR2/3 黒褐色土
	5	10YR2/2 黒褐色土
4号	1	10YR17/1 黒色土
	2	10YR17/1 黒色土
	3	10YR3/4 暗褐色土
	4	10YR17/1 黒色土
	5	10YR2/2 黒褐色土
	6	10YR17/1 黒色土
	7	10YR2/2 黒褐色土
	8	10YR2/1 黒色土
	9	10YR3/3 暗褐色土
	10	10YR3/4 暗褐色土
11	10YR17/1 黒色土	
12	10YR2/1 黒色土	
13	10YR2/2 黒褐色土	
14	10YR2/2 黒褐色土	
15	10YR4/6 オリーブ褐色土	

3号陥し穴状土坑



4号陥し穴状土坑

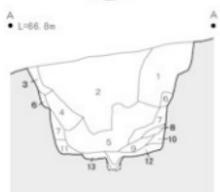
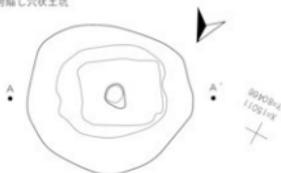


第25図 3・4号陥し穴状土坑

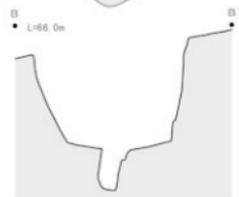
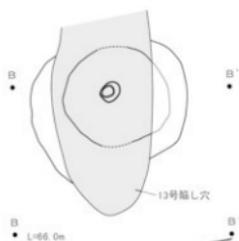
第19表 5号隠し穴状土坑土層観察表

位置	層序	土色
5号	1	10YR17/1 黑色土
	2	10YR17/1 黑色土
	3	10YR2/3 黒褐色土
	4	10YR2/2 黒褐色土
	5	10YR2/2 黒褐色土
	6	10YR3/4 暗褐色土
	7	10YR4/4 褐色土
	8	10YR3/4 暗褐色土
	9	10YR17/1 黑色土
	10	10YR4/6 褐色土
	11	10YR2/2 黒褐色土
	12	10YR2/3 黒褐色土
	13	10YR2/2 黒褐色土

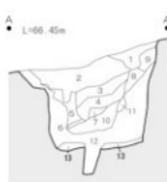
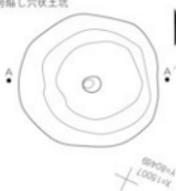
5号隠し穴状土坑



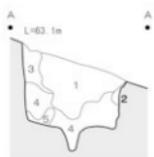
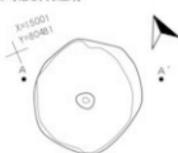
7号隠し穴状土坑



6号隠し穴状土坑



8号隠し穴状土坑

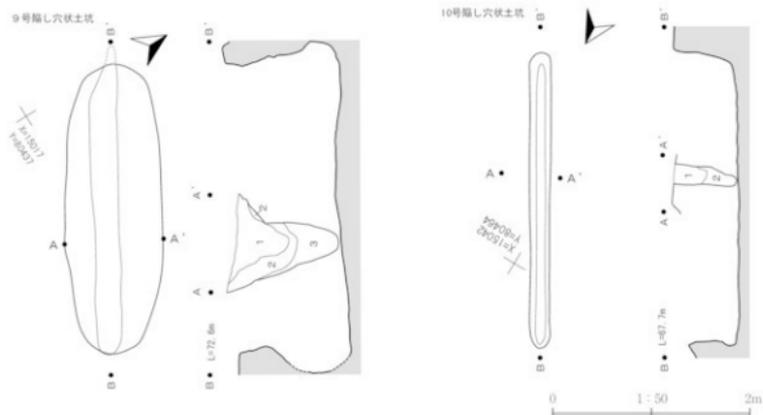


第26図 5～8号隠し穴状土坑

第20表 6・8～10号隔し穴状土坑土層観察表

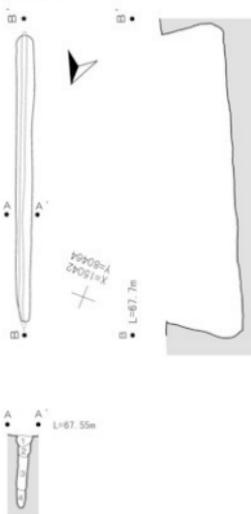
位置	層	土色・土性
6号	1	10YR1.7/1 黒色土
	2	10YR1.7/1 黒色土
	3	10YR1.7/1 黒色土
	4	10YR2/1 黒色土
	5	10YR3/3 暗褐色土
	6	10YR2/3 黒褐色土
	7	10YR2/3 黒褐色土
	8	10YR2/2 黒褐色土
	9	10YR4.6 褐色土
	10	10YR2/2 黒褐色土
	11	10YR3/3 暗褐色土
	12	10YR3/4 暗褐色土
	13	10YR4.6 褐色土

位置	層	土色・土性
8号	1	10YR2.3 黒褐色シルト
	2	10YR4.6 褐色シルト
	3	10YR3/4 暗褐色シルト
	4	10YR4/4 褐色シルト
	5	10YR4/4 褐色シルト
9号	1	10YR2.2 黒褐色土
	2	10YR3/4 暗褐色土
10号	1	10YR1.7/1 黒色土
	2	10YR2/1 黒色土

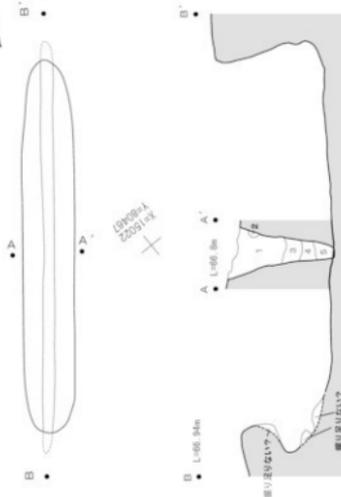


第27図 9・10号隔し穴状土坑

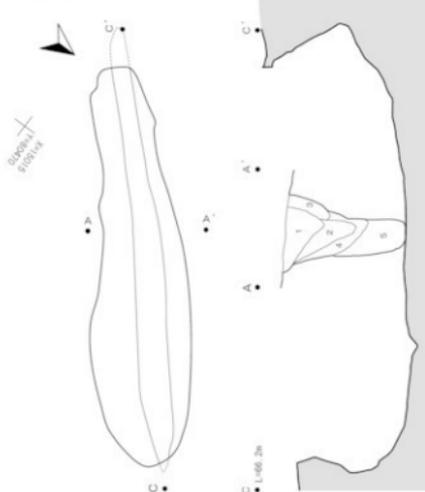
11号隔し穴状土坑



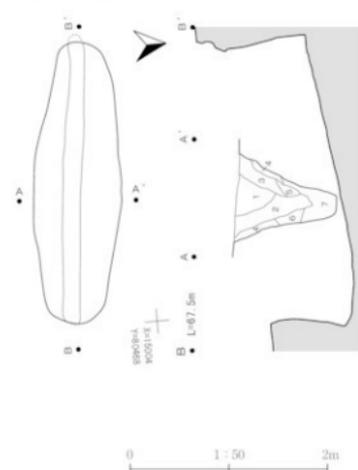
12号隔し穴状土坑



13号隔し穴状土坑



14号隔し穴状土坑



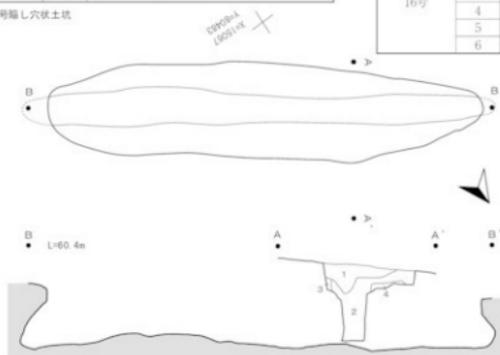
第28図 11～14号隔し穴状土坑

第21表 11～16号陥し穴状土坑土層観察表

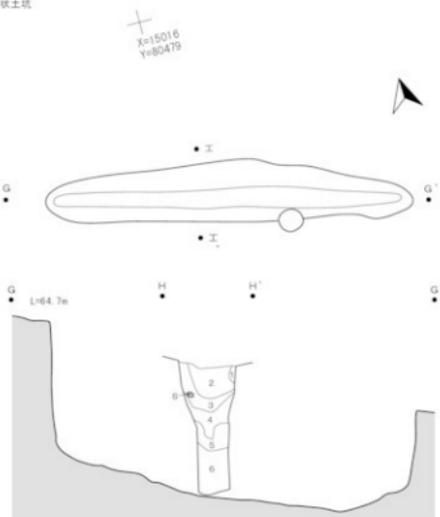
位置	層	土色・土性
11号	1	10YR2/3 黒褐色土
	2	10YR2/2 黒褐色土
	3	10YR1.7/1 黒色土
	4	10YR2/2 黒褐色土
12号	1	10YR1.7/1 黒色土
	2	10YR5/8 黄褐色砂質シルト
	3	10YR5/8 黄褐色土
	4	10YR2/3 黒褐色土
	5	10YR4/4 褐色土
13号	1	10YR1.7/1 黒色土
	2	10YR2/2 黒褐色土
	3	10YR2/2 黒褐色土
	4	10YR3/3 暗褐色土
	5	10YR5/6 黄褐色土

位置	層	土色・土性
14号	1	10YR2.1 黒色土
	2	10YR2.3 黒褐色土
	3	10YR3.4 暗褐色土
	4	10YR4.6 褐色土
	5	10YR4.6 褐色土
	6	10YR4.6 褐色土
	7	10YR5.6 黄褐色砂質シルト
15号	1	10YR1.7/1 黒色土
	2	10YR2.2 黒褐色土
	3	10YR3.4 暗褐色土
	4	10YR5.6 黄褐色土
16号	1	10YR5.6 黄褐色土
	2	10YR3.4 暗褐色土
	3	10YR4.4 褐色シルト
	4	10YR5.6 黄褐色シルト
	5	10YR6.8 明黄褐色砂質シルト
	6	10YR5.6 黄褐色シルト

15号陥し穴状土坑



16号陥し穴状土坑

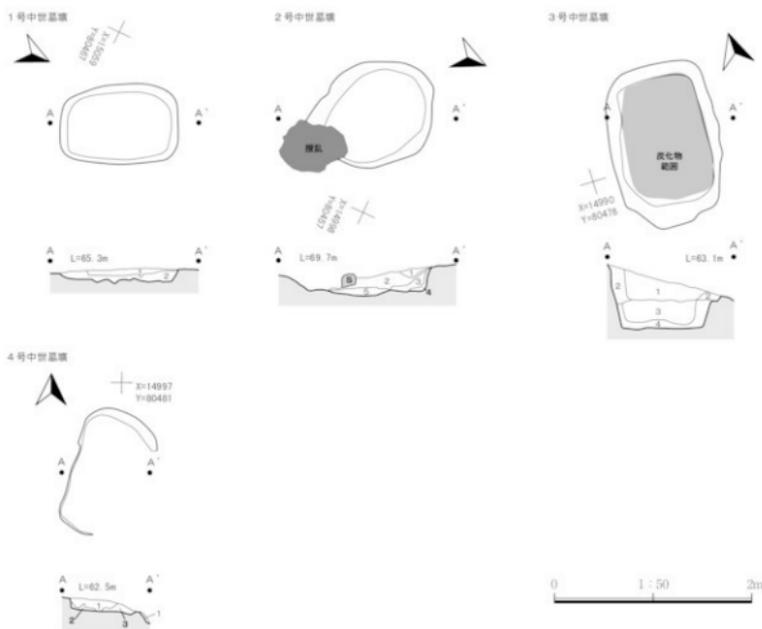


第29図 15・16号陥し穴状土坑

0 1:50 2m

第22表 1～4号中世墓塚土層観察表

位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
1号	1	1N1.5/0 黒色土	0	1	炭化物多量	
	2	10YR3/4 暗褐色土	5	4	炭化物微量	
2号	1	10YR2/2 黒褐色土	5	3	炭化物微量	
	2	10YR1.7/1 黒色土	5	3	炭化物多量	
	3	10YR2/3 黒褐色土	5	3		
	4	10YR4/6 褐色土	5	3		
	5	10YR4/6 褐色土	5	3		
3号	1	10YR3/3 暗褐色土	2	3	炭化物粒3%、青磁出土	
	2	10YR3/2 黒褐色土	2	1	炭化物粒ブロックφ3cm3%	
	3	10YR2/1 黒色土	2	1	炭化物95%、焼骨1%、古銭出土	
	4	10YR2/3 暗褐色土	2	1	炭化物3%	
4号	1	10YR2/3 黒褐色シルト	4	2	炭化物多量	
	2	10YR4/4 褐色シルト	4	2	炭化物10%	
	3	10YR5/8 黄褐色シルト	4	3		

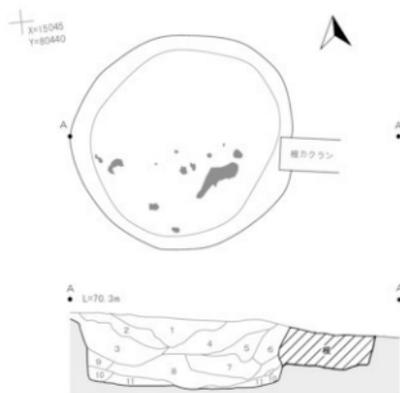


第30図 1～4号中世墓塚

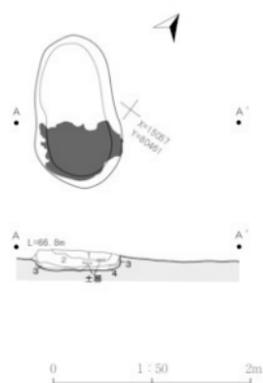
第23表 1・2号土坑土層観察表

位置	層	土色・土性	粘性	締	混入物	備考
1号	1	10YR3/3 暗褐色土			炭化物微量	
	2	10YR3/4 暗褐色土			炭化物微量	
	3	10YR3/4 暗褐色土			炭化物微量	
	4	10YR3/3 暗褐色土			炭化物微量	
	5	10YR2/2 黒褐色土			炭化物微量	
	6	10YR2/2 黒褐色土			炭化物微量	
	7	10YR4/6 褐色土			炭化物微量	
	8	10YR3/4 暗褐色土			炭化物微量	
	9	10YR4/4 褐色土				
	10	10YR4/4 褐色土				
	11	10YR3/3 暗褐色土				
2号	1	10YR2/2 黒褐色土	2	1	炭化物粒1%、遺物破片少量	人為堆積
	2	10YR2/3 黒褐色土	2	2	炭化物粒5%、焼土1%、遺物多量	
	3	5YR5/6 明赤褐色土	2	2	炭化物粒5mm5%	焼土層
	4	10YR2/3 黒褐色土	2	3	炭化物粒3mm1%	

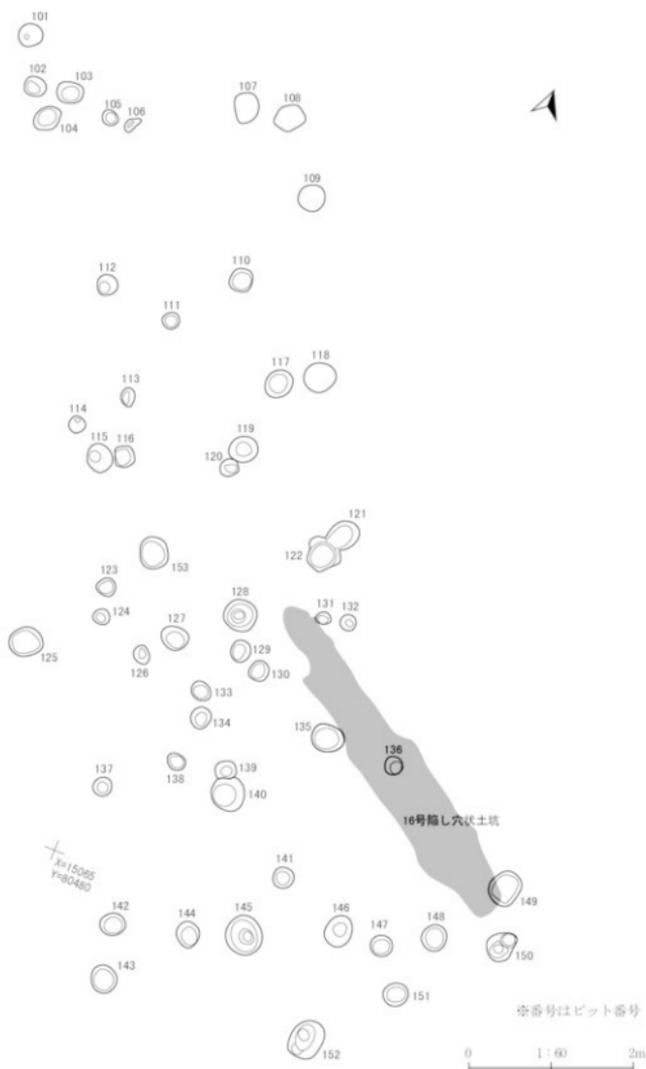
1号土坑



2号土坑



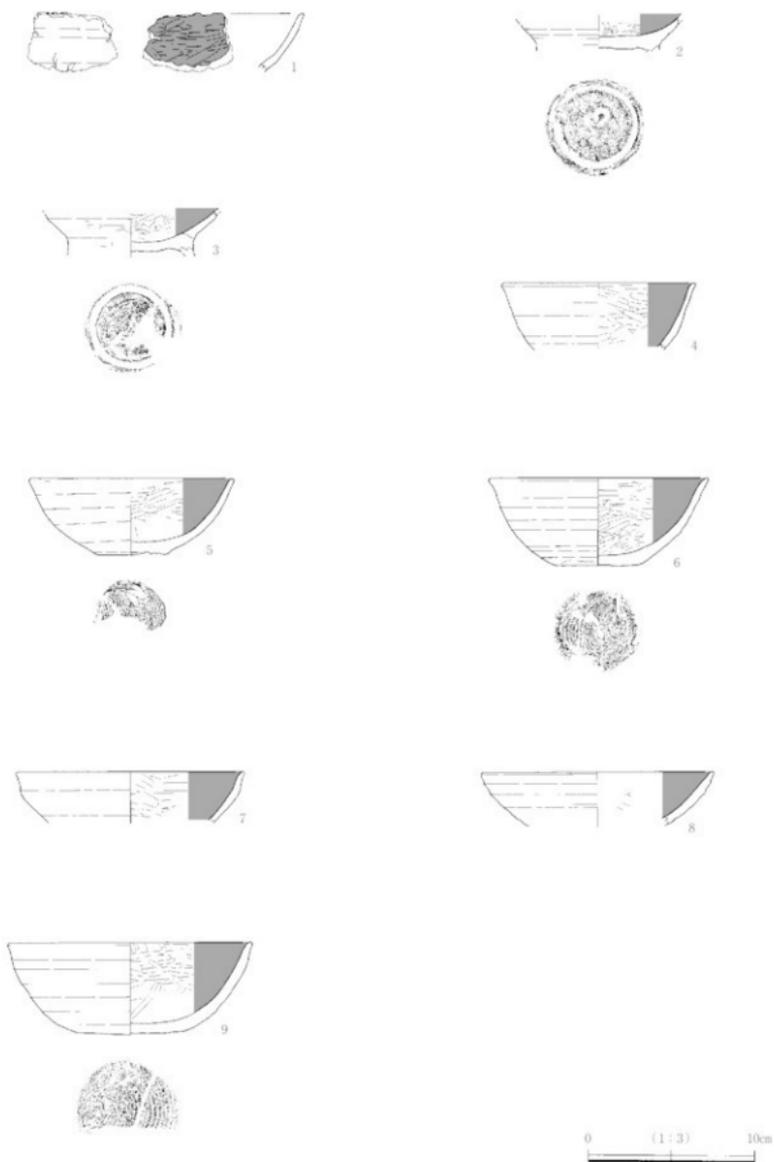
第31図 1・2号土坑



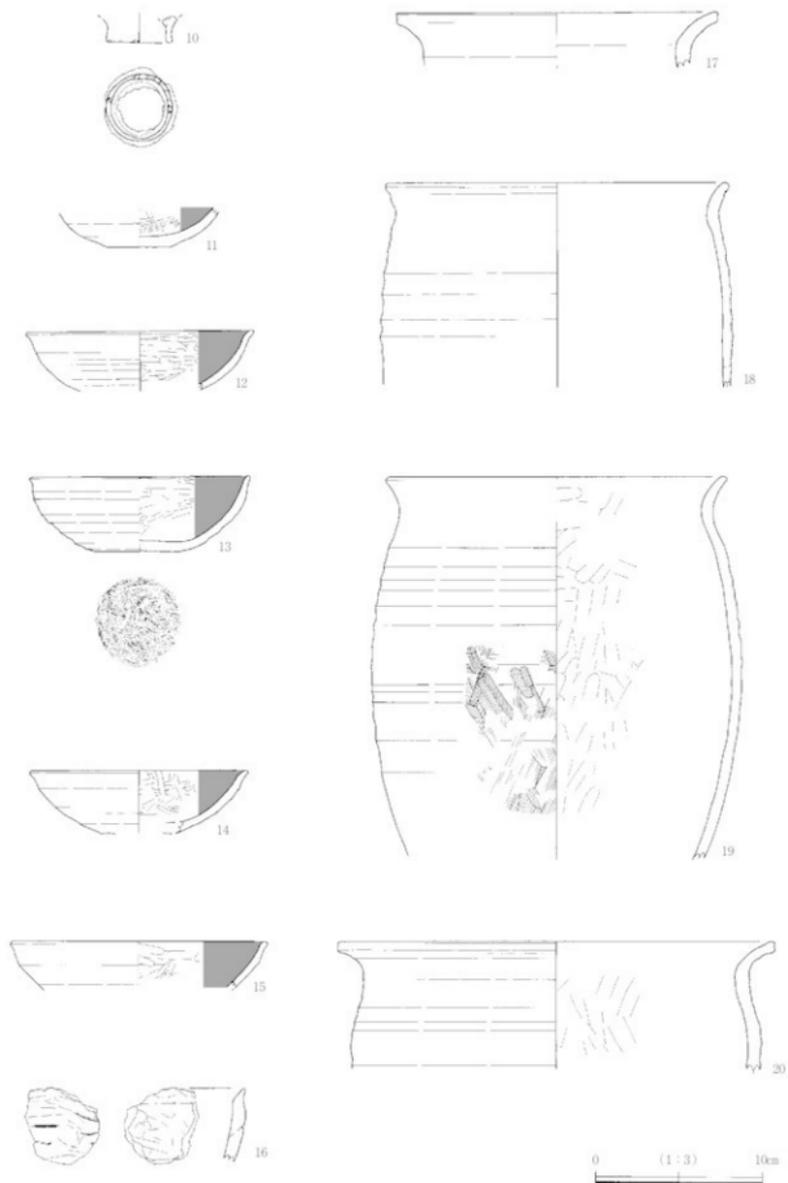
第32図 柱穴群

第24表 柱穴群構成ピット観察表

番号	開口部規模 (m)	底面標高 (m)	出土遺物	備 考
P101	0.30×0.27	60.43		
P102	0.27×0.25	60.31		
P103	0.34×0.25	59.63		
P104	0.40×0.30	59.64		
P105	0.20×0.18	59.68		1号掘立柱建物
P106	0.25×0.15	59.86		
P107	0.40×0.30			確認調査、1号掘立柱建物跡
P108	0.40×0.32			確認調査
P109	0.33×0.33			確認調査、2号掘立柱建物跡
P110	0.30×0.30	59.81		1号掘立柱建物
P111	0.20×0.20	60.05		
P112	0.25×0.25	60.06		1号掘立柱建物
P113	0.25×0.18	59.99		
P114	0.20×0.20	60.03		
P115	0.35×0.30	59.83		1号掘立柱建物
P116	0.27×0.25	60.26		
P117	0.38×0.32	59.92		
P118	0.40×0.35			確認調査、2号掘立柱建物跡
P119	0.35×0.30	59.72		1号掘立柱建物
P120	0.25×0.20	59.86		
P121	0.40×0.35	60.01		
P122	0.45×0.35	59.91		2号掘立柱建物
P123	0.25×0.20	60.35		
P124	0.20×0.20	59.86		1号掘立柱建物
P125	0.41×0.35	60.46		
P126	0.25×0.20	60.28		
P127	0.35×0.30	59.98		
P128	0.41×0.42	59.75		1号掘立柱建物
P129	0.33×0.25	60.07		
P130	0.26×0.24	60.05		
P131	0.20×0.15	60.03		
P132	0.21×0.22	59.88		
P133	0.28×0.23	60.19	政和通寶	第37回～36
P134	0.30×0.25	60.05		
P135	0.40×0.34	59.94		2号掘立柱建物
P136	0.23×0.25	60.02		
P137	0.25×0.26	59.93		1号掘立柱建物
P138	0.24×0.22	60.36		2号掘立柱建物
P139	0.26×0.23	59.91		
P140	0.45×0.40	59.67		1号掘立柱建物
P141	0.26×0.26	60.04		
P142	0.32×0.28	60.07		1号掘立柱建物
P143	0.35×0.31	60.64		
P144	0.35×0.33	60.41		2号掘立柱建物
P145	0.51×0.44	60.01		1号掘立柱建物
P146	0.41×0.33	59.89		2号掘立柱建物
P147	0.28×0.25	60.23		
P148	0.35×0.31	60.11		1号掘立柱建物
P149	0.45×0.37	60.13		
P150	0.42×0.35	59.86		
P151	0.31×0.28	60.05		
P152	0.51×0.44	59.74		
P153	0.43×0.42	59.97		2号掘立柱建物



第33圖 土師器 (1)



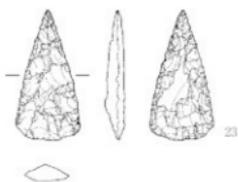
第34図 土師器(2)



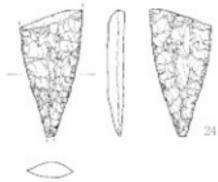
21



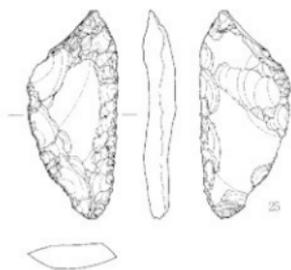
22



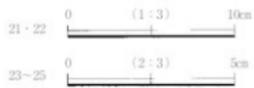
23



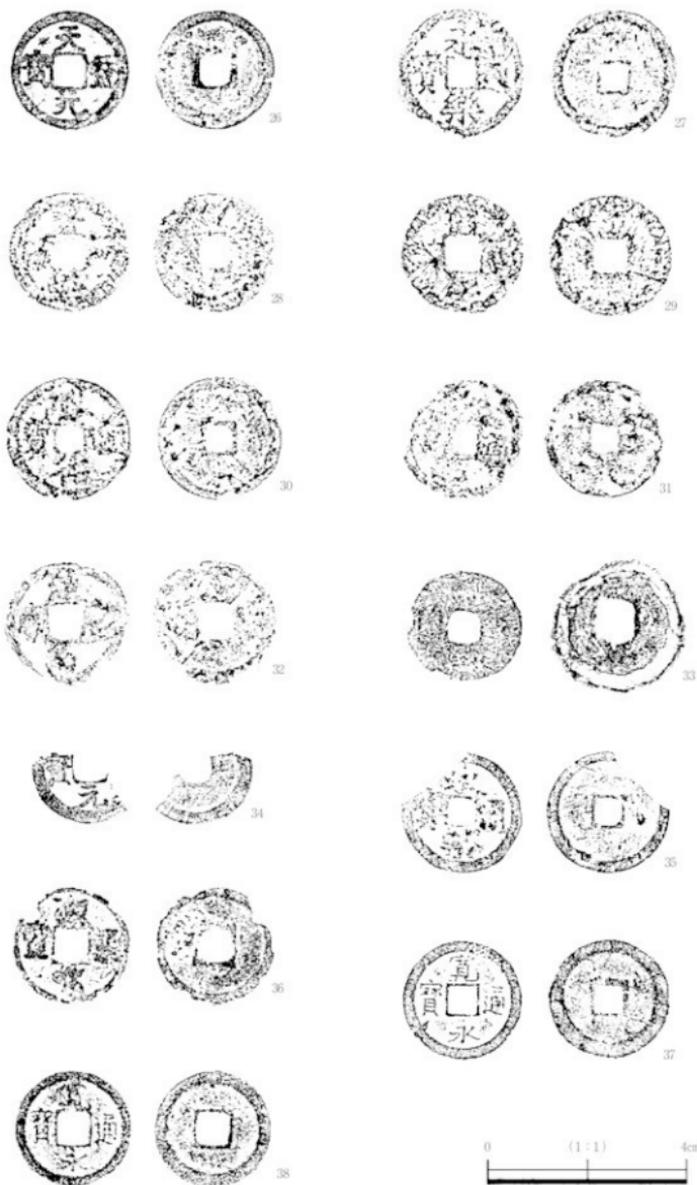
24



25



第35図 輸入磁器、石器



第36図 古銭

第25表 土師器・輸入磁器観察表

番号	出土地点・層位	器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
						外面	内面				
1	2号壺形積土	坏	口縁	5	黒褐色	回転ナデ	ミガキ、黒色処理			[3.6]	
2	2号壺形積土 高台付坏	坏	底部	10	橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理			[2.2]	
3	2号壺形積土、 2号土壇埋積土	高台付坏	底部	10	橙	回転ナデ ミガキ	ミガキ、黒色処理			[2.9]	
4	2号壺カマド内	坏	口縁-胴部	5	にぶい黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(11.8)		[4.1]	
5	2号壺カマド内	坏	口縁-底部	40	にぶい黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(12.4)	(4.2)	4.7	
6	2号壺形積土、 2号土壇埋積土	坏	口縁-底部	80	にぶい黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	13.2	5.0	5.4	
7	2号壺P2埋積土、 2号土壇埋積土	坏	口縁-胴部	5	橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(13.8)		[3.1]	
8	2号壺形積土	坏	口縁-胴部	5	にぶい橙	回転ナデ	ミガキ? (摩耗)	(14.2)		[3.3]	
9	2号壺カマド及びP2埋積 土、2号土壇埋積土	坏	口縁-底部	60	浅黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	14.8	6.4	5.7	
10	2号土壇埋積土	高台付坏	高台部	5	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	4.0		[1.85]	
11	2号土壇埋積土	坏	底部	5	にぶい橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理		3.8	[2.4]	
12	2号土壇埋積土	坏	口縁-胴部	5	にぶい黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(13.8)		[3.6]	
13	2号土壇埋積土	坏	口縁-底部	20	灰白	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(13.4)	5.3	[4.6]	
14	2号土壇埋積土	坏	口縁-胴部	5	にぶい黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(13.4)		[3.9]	
15	2号土壇埋積土	坏	口縁-胴部	5	灰黄	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	(15.4)		[3.0]	
16	2号土壇埋積土	蓋類	口縁-胴部	5	灰黄	ヘラナデ、 ヨコナデ	ヘラナデ				
17	2号壺形積土、 2号土壇埋積土	蓋	口縁	5	浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ	(19.6)		[3.4]	
18	2号壺形積土、カマド内、 2号床面・カマド 2号土壇埋積土	蓋	口縁-胴部	20	橙	回転ナデ	回転ナデ	(20.8)		[12.5]	
19	2号壺床面及びカマド 内、2号土壇埋積土	蓋	口縁-胴部	30	浅黄橙	回転ナデ ハケ	ナデ	(20.6)		[23.4]	口縁部に コゲ付着
20	2号土壇埋積土	蓋	口縁-胴部	5	にぶい橙	回転ナデ	ヘラナデ	(26.4)		[8.1]	
21	3号中世意窯 埋積土	青磁碗	口縁	5							龍泉窯系、 時期15-16C
22	南朝谷部	青磁碗	胴部	5			放射状暗文				龍泉窯系、 時期15-16C

彫穴建物跡=壺、柱穴=P () は推定値、[] は残存値

第26表 石器観察表

掲載	器 種	出 土 地 点・層 位	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 量 g	石 材	産 地	備 考
23	石鏃	調査区北側カクラン	4.00	1.90	0.60	3.60	頁岩	北上山地	無茎平基
24	矢頭器	調査区北側表土	[3.90]	1.90	0.50	3.60	頁岩	北上山地	先端と基部欠損
25	削器	1号壜 堆積土	6.40	2.80	1.05	16.60	頁岩	北上山地	

() は推定値、[] は残存値

第27表 古銭観察表

掲載	出土地点・層位	銭 種	銭 銘	切 鋳 年 代	特 徴	長 cm	幅 cm	内 径 cm	重 量 g
26	3号中世墓竈 埋積土下部	銅銭	天皇元寶	1023年		2.45	2.43	0.58	2.80
27	3号中世墓竈 埋積土	銅銭	永業通宝	1409年	銭跡明瞭	2.64	2.53	0.50	2.30
28	3号中世墓竈 埋積土	銅銭	不明			2.45	2.45	0.6	2.10
29	3号中世墓竈 埋積土	銅銭	不明			2.47	2.47	0.67	2.10
30	3号中世墓竈 埋積土	銅銭	宣徳通寶	1433年		2.53	2.53	0.5	2.90
31	3号中世墓竈 埋積土	銅銭	永業通宝?		縁首付差	2.45	2.30	0.5	2.10
32	3号中世墓竈 埋積土下部	銅銭	不明		溶解により 銭跡不明	2.56	2.52	0.70	1.80
33	3号中世墓竈 検出部	銅銭	不明		2枚溶着	2.30	2.32		4.40
34	南側谷部 表土	銅銭	□□元寶		26に類似小	1.46	2.01	0.58	0.90
35	2号中世墓竈 埋積土	銅銭	永業通宝	1409年	溶解により 銭跡不明瞭	2.51	2.50	0.53	1.90
36	柱穴群内P133 埋積土	銅銭	政和通寶	1111年	摩耗顕著	2.42	2.40	0.66	1.80
37	南側谷部	銅銭	寛永通寶 (新寛永)	1697年		2.45	2.45	0.57	3.00
38	南側斜面部 表土	銅銭	寛永通寶 (新寛永)	1697年		2.37	2.36	0.64	2.00

VI 自然科学分析

1 北ノ越遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

北ノ越遺跡は、岩手県久慈市宇部町第3地割（北緯39°34'57"、東経141°56'00"）に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化物と木片の合計2点である（表1）。

（2）測定の意義

試料が出土した遺構の年代を明らかにし、他の遺構との関係性を検討する。

（3）化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測定方法

加速器をベースとした¹³C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹³Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年

代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1 σ = 68.2%)あるいは2標準偏差(2 σ = 95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の¹⁴C年代は、No.1が $360 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.2が $440 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 σ)は、No.1が1470~1623cal ADの間に3つの範囲、No.2が1434~1453cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-141947	No.1	3号中世墓壙 堆積土	炭化物	AAA	-25.65 ± 0.33	360 ± 20	95.64 ± 0.28
IAAA-141948	No.2	P112 堆積土	木片	AAA	-26.97 ± 0.23	440 ± 20	94.63 ± 0.28

[#6951]

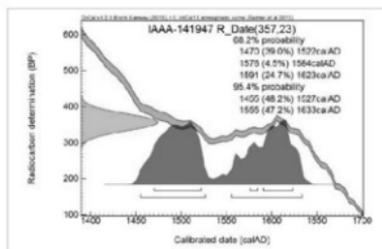
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-141947	370 ± 20	95.52 ± 0.27	357 ± 23	1470calAD - 1522calAD(39.0%) 1576calAD - 1584calAD(4.5%) 1591calAD - 1623calAD(24.7%)	1455calAD - 1527calAD(48.2%) 1555calAD - 1633calAD(47.2%)
IAAA-141948	480 ± 20	94.25 ± 0.27	443 ± 23	1434calAD - 1453calAD(68.2%)	1424calAD - 1470calAD(95.4%)

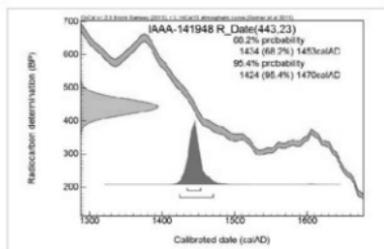
[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363



【図版】暦年較正年代グラフ（参考）



2 北ノ越遺跡から出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

(1) はじめに

北ノ越遺跡は久慈市宇都町に立地する中世の山城隣接遺跡である。本遺跡の平安時代住居カマド燃焼部及び中世のカマド状遺構燃焼部内から採取した堆積物を水洗選別したところ、若干の炭化種実を検出した。そこで当時の植物質食料の利用状況を調査する目的で住居内堆積物の炭化種実分析をおこなった。堆積物は0.25mm目の篩で水洗し、残渣から同定可能な植物部位を選別し実体顕微鏡で同定した。

(2) 同定結果

本遺跡の遺構内堆積物から出土した種実同定結果を表1にまとめた。平安時代の住居カマドからはエノキグサ、不明穀類、菌核を出土した。中世とみられるカマド状遺構からはコムギをやや多く出土し、オオムギ、ムギ類と、ムギ類とみられる穀類の焼け膨れ塊、バラ科またはマメ科の刺状突起を出土した。

以下に出土した炭化種実のうち特筆すべき分類群の形態記載をおこなう。

オオムギ：出土した種子は長さ5.4-4.7mmで現在の栽培オオムギより少し小さめで楕円形であるが基部が細く上下端は尖っていて厚さが幅より薄いことからオオムギと同定した。片面中央には縦に深い溝がある。

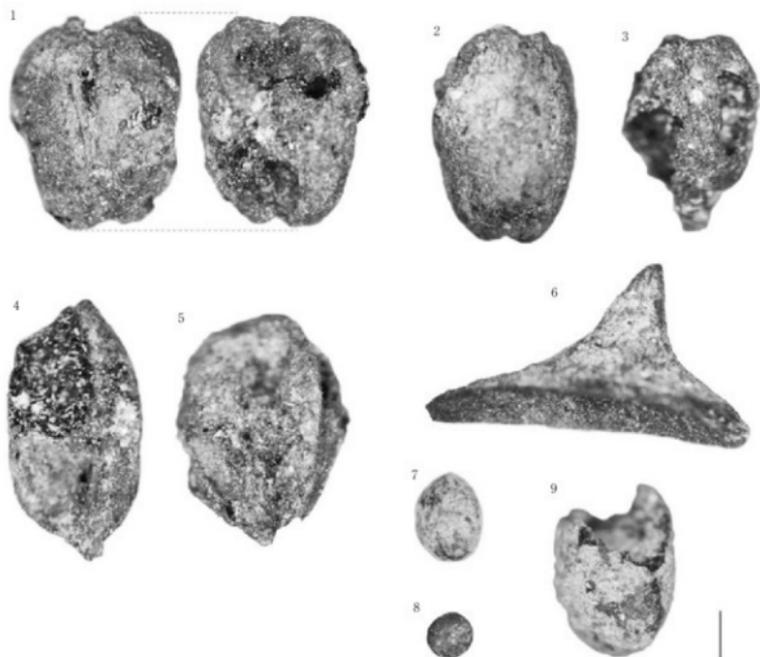
(3) 考察

本遺跡の平安時代の住居カマドからは同定できた炭化種実はいはエノキグサだけであった。ただし穀類とみられる炭化塊を出土している。種実以外ではクリ炭化材の小破片を少量出土している。カマド焼土試料は炭化材破片の含有も少なく、炭化物自体が少数しか確認できなかった。住居使用時はカマドを十分に燃焼させ清掃して用いており、残存物が少ないまま住居廃絶に及んだと考えられる。

中世のカマド状遺構はコムギとオオムギを出土し、イネやほかの雑穀を検出なかった。コムギは皮を剥くと崩れて粉状となりやすいため粒食にむかず、粉食として利用する場合がほとんどである。一方オオムギはイネとともに粒食とされるか家畜の飼料とするのが一般的であるため利用方法が少し異なる穀類が同時に出土している。また、カマド状遺構の堆積物にはクリを主体として散孔材を含む

表1 北ノ越遺跡出土炭化種実

分類群	出土部位/地点	試料番号	1	2
		時期	9世紀後半	中世
		遺構	2号竪穴建物 カマド燃焼部	1号カマド状遺構 燃焼部
コムギ	炭化種子	-	18	
オオムギ	炭化種子	-	6	
ムギ類	炭化種子破片	-	7	
エノキグサ	炭化種子半分	1	-	
バラ科またはマメ科	炭化刺状突起	-	2	
不明穀類	炭化種子破片	2	11	
担子菌	菌核	1	-	



図版1 北ノ越遺跡から出土した炭化種実

1-3.コムギ、炭化種子（2号竪穴カマド燃焼部焼土）4,5.オオムギ、炭化種子（2号竪穴カマド燃焼部焼土）6.バラ科またはマメ科、炭化刺状突起（1号カマド状燃焼部焼土）7.エノキグサ、炭化種子（1号カマド状燃焼部焼土）8.担子菌、菌核（1号カマド状燃焼部焼土）9.不明穀類（1号カマド状燃焼部焼土）スケールは1mm

炭化材が多く含まれており、破片はほとんどが細い枝状であったことから燃料材残渣と考えられ、食料残渣などをこの遺構で燃やしたと考えられる。

3 分析結果所見

各分析について、所見を記す。

(1) 年代測定値について

年代測定の目的は、相対年代のクロスチェックであるが、本遺跡では中世に関する遺構の調査を行うことができた。3号中世墓は、15～16世紀代の青磁碗片、中世末に広く流通する中国銭の模鑄銭、焼骨、炭化材が出土している。火葬墓内の燃料材を測定したところ、15世紀後半～17世紀前半に収まる年代値を得た。宇部館跡普請の16世紀後半～末と整合する。

1号掘立柱建物跡を構成するP112から出土した木片の測定では、15世紀前半の年代値を得た。この試料は柱材と考えられるが、樹木外皮に近い年代が得られたかは不明なので、少なくとも15世紀前半よりは新しいことになる。また古い建物から新しい建物に柱材を再利用した場合、その古材を測定してしまう古木効果を考慮する必要があるため、1号掘立柱建物跡が宇部館跡普請と同時代の16世紀代の建物であった可能性も想定される。

(2) 出土炭化種実について

平安時代の2号竪穴建物跡カマド内サンプルでは、植物残渣がきわめて少なく、使用時の清掃行為について考察いただいた。2号竪穴建物跡は、北ノ越遺跡7,550㎡の調査で1棟のみの平安時代建物であったことから、平安時代集落の一部と見なすよりも山小屋の性格の建物と捉えることも可能である。常時使用していたかも含め、今後の周辺範囲の調査成果に期待したい。

中世の1号カマド状遺構サンプルについては、コムギ、オオムギをはじめ雑多に穀類が検出され、食糧残渣を燃やした可能性を考察いただいた。中世のカマド状遺構が数多く調査された青森県米山遺跡報文において、カマド状遺構の焼却炉の性格を一步進め、「灰を作る施設」と評価している。現代人の生活において灰の使用は減少傾向にあるが、かつては植物のアク抜き、染物、土壌殺菌など、植物灰は暮らしに欠かせない必需品であったことを念頭にした解釈である。1号カマド状遺構における雑多な穀類の焼却は、米山遺跡等でこれまで得られているカマド状遺構に対する知見と整合している。

(米田)

Ⅶ 総 括

1 調査成果概要

(1) 宇部館跡

調査成果は第Ⅳ章記載のとおりである。調査区は1,950㎡である。検出遺構は、土塁2条、切岸2箇所、堀2条である。宇部館跡の主郭を防御する2重堀の形態となっている。実効法高等の形態的特徴から、16世紀後半～末の普請である。

出土遺物は、剥片石器、礫石器、輸入染付皿、古銭、コハクである。

(2) 北ノ越遺跡

調査成果は第Ⅴ章記載のとおりである。調査区は7,550㎡である。検出遺構は、堅穴建物跡8棟、掘立柱建物跡2棟、カマド状遺構1基、墓壙4基、土坑2基、陥し穴状土坑16基、柱穴104個である。縄文時代は堅穴建物跡1棟、陥し穴状土坑、平安時代は、堅穴建物跡1棟、土坑2基、中世は堅穴建物跡6棟、掘立柱建物跡2棟、カマド状遺構1基、墓壙4基、柱穴104個が該当する。

出土遺物は、土師器、剥片石器、礫石器、青磁、古銭、コハク、焼人骨片、炭化材、炭化種子である。1号カマド状遺構堆積土は、サンプルを分析委託し、サンプル内から炭化種子を回収している（Ⅵ章参照）。また、1号掘立柱建物跡構或柱穴内出土炭化材と3号墓壙出土炭化材の一部をサンプルとしてAMS年代測定を実施し、中世の年代を得ている。

2 遺 構

(1) 宇部館跡の遺構

宇部館跡の遺構は、調査範囲内に土塁・切岸・堀が現況で確認できる状況であった。調査範囲は宇部館跡主郭西側に普請された2重堀範囲である。内堀に相当する1号堀は、調査区範囲の北側に位置する摺手口まで伸びている。また、底面をV字に掘り込む薬研堀である。外堀に相当する2号堀は、沢地形を利用しており、南端は背後の尾根地形と主郭を分断するように堀切となっている。主力武器が2間半～3間（4～5m程度）の長柄楯主体となる16世紀中葉以降の城館においては、堀の実効法高が10～12mが防御に有利とされているが、1号土塁頂部～1号堀と、2号土塁頂部～2号堀の実効法高もこれにほぼ収まることから、宇部館跡西側の普請が16世紀中葉以降に行われたと考えられる。また、1号堀堆積土から明代と考えられる輸入染付磁器皿片が出土しており、普請の年代と整合する。1号切岸の傾斜角度については、50～55度であった。1・2号土塁は版築構造ではないが、切岸の傾斜と連続するように側面を板で固定しながら積み上げた可能性が考えられる。

(2) 堅穴建物跡

縄文時代1棟、平安時代1棟、中世6棟の調査を北ノ越遺跡で行った。

縄文時代堅穴建物跡については、建物の構造から縄文時代と推定したが、土器が伴わなかったため、時期の詳細は不明である。なお、宇部館跡の表土や1号切岸及び1号堀堆積土から前期～中期の縄文土器片が出土しており、遺跡周辺に前期～中期の集落の存在が想定される。

平安時代の堅穴建物は7,550㎡の調査面積にも係らず僅か1棟であった。土師器、鍛冶滓が出土したが、建物の用途については不明である。山小屋的な施設や見張小屋の施設の可能性も想定される。建物床面上に鍛冶炉は設置されていない。久慈市域は製鉄業が盛んであるが、北ノ越遺跡では鉄生産関連遺構を確認できなかった。2号堅穴建物は東壁に長煙道のカマドを有する北東北地方の平安期に広く見られる施設配置となっている。

中世は6棟該当する。狭義の堅穴建物として中世に特徴的にみられた正方形ないしは長方形の施設に該当するのは4棟ある。残りの2棟は、堅穴状に掘り込まれたと明確に判断できないが、柱間が3～4尺程度と狭いピッチで柱穴配置となる工房跡あるいは、堅穴状遺構などと呼称されるものに該当する。斜面を削平して平坦面を作り出して屋根を掛けただけの施設の可能性があるが厳密に堅穴と判断できないが、本書では広義の堅穴建物として取り扱っている。床面の残存状況が不良のため、「工房」を示すような炉や作業痕跡を見いだせなかったため、ここでは工房跡とも捉えられなかった。これら堅穴建物跡は、宇部館跡側からの眺望で北ノ越遺跡のほぼ同標高ライン(62～65m)に位置している。建替えを行っている場合もあるが、重複するのは7・8号堅穴建物跡のみであり、同地点での建物の長期継続使用はないと考えられる。

(3) 掘立柱建物跡

北ノ越遺跡において、中世と考えられる建物を2棟検出した。柱配置から庇付建物で桁行軸は北西～南東方向である。宋銭の模倣銭と柱穴出土炭化材の年代から、15世紀前半以降の建物と考えられる。Ⅵ章所見のとおり、炭素年代値は古木効果の可能性もあるため、宇部館跡普請の16世紀代の建物の可能性も考えられる。

(4) 陥し穴状土坑

北ノ越遺跡において、16基検出した。円形と溝状があるが、円形は副穴を伴うことがある。溝状では、縄文前期に広く認められる幅広で副穴を2～4個伴うものと、縄文中期後半～晩期に多い細長く、2ないしは3基1対を成すことがあるものに分けられる。これらは、北ノ越遺跡の中央部の斜面地の傾斜がやや緩まる範囲に密集分布し、南北に延びる分布ラインがそのまま獣道推定ラインとなる。

(5) 中世墓壇

北ノ越遺跡において、平面形が長方形で、多量の炭化材を包含する土坑を4基検出し、2～4号中世墓壇の堆積土すべてを1mmメッシュのフルイにかけたところ、中世古銭と焼骨が検出されたことから、火葬墓と捉え報告した。1号中世墓壇からは古銭が出土していないが、2～4号中世墓壇との形態的類似性と多量の炭化材出土を火葬墓認定の根拠としている。墓壇内出土古銭は複数枚埋葬されている場合は容易に判別できるが、古銭の破片しかない場合は、通常の掘削作業での肉眼判別は難しい。類似の遺構調査においてはフルイを活用すべきであろう。墓壇の形態・規模はほぼ一致する。長軸は1・3・4号中世墓壇が南北方向で、2号中世墓壇が東西方向である。3号中世墓壇出土古銭は中国銭模倣銭が多い。模倣銭の流通は中世末に特に顕著とされており、これらの墓壇が宇部館跡普請時期と同一時期の可能性を考慮する必要がある。

(6) 土坑

北ノ越遺跡において、平安時代の土坑を2基検出した。1号土坑は円形で比較的深く、底面に炭化

材が分布していた。用途不明である。2号土坑は、2号竪穴建物に付属する廃棄穴である。多量の炭化材とは土師器が出土しており、出土土師器は2号竪穴建物出土資料と構構間接合する。

(7) 柱 穴

北ノ越遺跡の北東部で104個である。このうち、竪穴建物と掘立柱建物の構成要素が含まれている。時期は中世で、柱穴群内P133からは北宋銭の模倣銭が出土している。

3 出土遺物

(1) 縄文時代の遺物

宇部館跡の1号堀堆積土から前期～中期の土器片と、北ノ越遺跡1号竪穴建物から頁岩製削器が出土している。宇部館跡で縄文土器が出土していることから、宇部館の主郭範囲に縄文集落の存在が想定されるが、中世の普請によって削平が進んでいる可能性があるだろう。

(2) 土 師 器

2号竪穴建物跡と1・2号土坑から平安時代の土師器が出土している。坏は内面黒色処理の個体で占められ、高台付坏も3点あるものの、器高もまだ深い段階にあることから、年代は9世紀後半～10世紀初頭と捉えられる。甕は回転ナデ甕主体で、口縁部は外反し短い。

(3) 輸 入 磁 器

3点を図示した。すべて中世である。北ノ越では3号中世墓塚から21の青磁片、南側谷部で22の青磁片が出土している。宇部館跡1号堀堆積土からは明代の輸入染付皿が出土している。製作年代は青磁が15～16世紀、染付皿が16世紀である。

(4) 石 製 品

石製埴塼と考えられる石製品が宇部館跡1号堀堆積土から出土している。滓の付着は認識できないため、鋳物の材料を特定できない。

(5) そ の 他

コハク塊が宇部館跡2号堀の根跡から出土した。遺跡内に搬入されたものかは不明である。鉄滓は平安時代の2号竪穴建物検出面から出土している。鍛冶滓である。

4 宇部館跡の現況測量成果と発掘調査成果

成果についてはIV章に記載している。これまで報告されていた普請痕跡に若干の追加を行う結果となった。主郭が4段構成であること、東側の野田通代官所跡地が中世居館推定地であること、居館推定地から城館へと至る通路が大手口、西端の二重堀の途切れた箇所には搦手口があること、搦手口から登る通路の先に喰違い虎口が設けられていること、主郭の北縁に土塁が断続的に残存していることなどである。16世紀後半～末の普請技術が随所に見られる。16世紀に宇部・野田地区を領有していた野田氏は、九戸政実の乱において三戸南部宗家側に加担し、勝利者側として近世を迎え、野田家は代々

南部家の家老職を務めることとなった。豊臣政権による山城破却令にしたがって野田城（宇部館のことか？）もその機能を失う。仮に野田城と認識されていた城館が宇部館のことだとすれば、発掘調査の結果、堀の埋め立てなどの積極的な城館機能の喪失痕跡はなく、自然放置されたと考えられる。

5 周辺の中世城館との比較検討

宇部館跡周辺の中世城館を紹介し、宇部館跡との比較検討を行っておく。

一戸町姉帯城跡

一戸南部氏の支城で、九戸戦では九戸勢が立て籠もるも、わずかな時間で奥州仕置軍に攻め落とされ、城兵が討死している。仕置軍約3000人に対し、守備兵100人程度であった。仕置軍は姉帯城を突破後、九戸城包囲戦へと向かうこととなる。平成8～10年に発掘調査が一戸町教育委員会によって行われており、火葬墓、掘立柱建物跡などが見ついている。曲輪が東西に分かれており、曲輪間を深い堀切で分断している。背後の丘陵地から延びる細い尾根線を堀切で分断しているところは、宇部館跡との共通点である。曲輪の面積は宇部館跡よりも大きい。西曲輪に火葬墓が点在しており、守備兵の亡骸を葬ったと想定されている（一戸町教委1999）。

一戸町野田城跡

野田氏の出自となったと考えられている城館で、一戸町教育委員会により分布調査が行われている（一戸町教委1991）。

久慈市久慈城跡

久慈氏の本城で、久慈市大川目に所在する。市街地が広がる平野部は久慈川と海の浸食によって形成された海岸段丘面上に立地する。大川目地区は扇状地形の扇の要部付近にあり、久慈城は平野部を見下ろす丘陵地に位置する。曲輪は3箇所あり、主郭からは久慈平野を一望できる。久慈氏は南部氏内の名族で、九戸戦では当主直治が九戸側で参戦したが敗北し、栗原郡にて斬首された。久慈氏は九戸勢と深い姻戚関係を築いており、直治は九戸政実の弟である政則を娘婿として迎えていた。隣接勢力の野田氏や宇部氏との姻戚関係は不明であるが、勢力の維持・均衡を図るうえで、何らかの姻戚関係を築いていたと想定される（久慈市教委1992）。

久慈市山根館跡

平成12年度に発掘調査が行われており、15～16世紀の城館と判明した。橋形囲い虎口が普請されており、16世紀後半にも機能していたと判断できる。地勢学的には、峠道を封鎖し、宇部・野田地区への侵入を防ぐ目的が考えられることから、宇部・野田地区の領域に属する可能性があるが、南部氏の有力氏族である久慈氏の支配領域と接しており、久慈氏側の可能性も考えられる（岩文振理2002）。

野田村伏津館跡

平成25・26年度に発掘調査が行われており、茶道具、金箔を押しした刀装具、青磁・白磁等の輸入陶磁器、国産陶器などの優品が出土している（岩手文振理2014・2015）。主郭が2段で構成され、下

段に梁間2間の庇付掘立柱建物が見つかった。出土遺物から15世紀中頃～後半に廃絶された城館と報告されている。主郭上段にはL字状に普請された土塁が残存しており、北側の防御施設が充実している。伝承で、11世紀に活躍した阿部氏の家臣、伏津新九郎の居館とされているが、11世紀代の遺物は今回の発掘調査で確認されていない（岩手文振埋2014・2015、野田村教委2015）。

野田村野田古館跡

擬定地として、野田小学校のある野田古館山が野田村教育委員会によって調査されている。海に面した城館で、野田氏14代直親が居城としていた時期もある（野田村教委1987）。

野田村野田新館跡

擬定地として、城内地区の現在の海蔵院に隣接する丘陵地とされ、本書と同事業の三陸沿岸道路建設事業に伴う発掘調査が県教育委員会によって行われたが、特筆すべき遺構は見つかっていない。野田新館は野田氏14代直親以降の領主の近世居館と考えられている。なお、直親は新館建設中、宇部館に居住したとされている。

6 宇部氏及び野田氏系図の検討

本節は、これまでの先学の研究成果を概観し、今後の宇部館研究の一助とすることを目的とする。宇部・野田地区を語る文献資料は少なく、また、資料批判に耐えうるほどの内容は蓄積されていない。さらに、宇部氏を語る文献も非常に少なく、家系図、宇野人家祿（久慈市指定文化財）、岩手県史、九戸郡誌、宇部小学校100年史、久慈市史、野田村史等に紹介されている内容は、伝承、創作の域を出ないものも含まれており、史実がどれほど含まれているか不明と言わざるを得ない現状である。このような現状においても、文献資料を概観し知見を増加させることで、在地の研究意欲を喚起し、宇部・野田地区において新資料の発見・蓄積につながることを切望する。

家系図の成立は江戸時代以降であり、史実として確定するには未だ資料不足の状況であるが、宇部家と野田家の系図を概観することにより、幾つかの問題点を浮かびあがらせてみたい。なお、野田氏については、菅野文男氏による詳細な考察が野田村誌（野田村1992）に収録されているので参照されたい。菅野氏は系図上の人物を「南部根元記」、「奥南田指録」等の史料により検討し、中世久慈・閉伊地域の国人一揆的結合から有力領主のもとへと諸氏の系列化が進行し、最終的に中世末の三戸南部氏を藩主とする南部藩成立への経過を描き出している。

（1）宇部氏系図について

当主の変遷を第28表に示した。宇部氏は、平家落人伝説をその出自としている。平清盛の嫡男平重盛の御落胤が野田湾に流れつき、兄が（平）上総太郎で宇部氏の祖、弟が（平）讃岐次郎で大沢氏の祖とされている（野田村教育委員会1982）。宇部氏初代は、野田湾に流れ着いた上総太郎助盛で、初代から5代旨盛まで、代々諱に「盛」の字が付けられている。平家の末裔としての意識が見て取れる。

6代重頼は、「盛」を受け継がず、また5代旨盛と同時代に生存していたとするなら比較的長命であるが、断絶していた可能性も想定される。

7代頼盛は、「盛」と6代の「頼」を引き継ぐ。

8～11代の諱は「正」の字が付けられ、前代までの「盛」を踏襲しない。ここに、宇部家の新し

い展開が想定される。宇部家中において、「盛」系統と、「正」系統の2系統の成立を想定してみたい。「正」または「政」の字は同時代では、三戸南部氏や八戸南部氏など、在地でトップクラスの首長層に散見されるが、何れも諱の上字に「正」「政」が付き、通常下級氏族に下賜する下字ではない。諱に下字で「正」が付くのは、野田氏系図で素性の怪しい5代の蛭川新右衛門親正（後に宮道源左衛門を名乗る）が該当する。上方素浪人で、閉伊郡の混乱を平定した人物と記載されている。実在不明の人物であるが、室町幕府政所代の蛭川家の親族を装ったと考えられる（仮に出自が蛭川家だとすると、あえて上方素浪人と記載する必要がないように思われる）。野田氏では、江戸期に源左衛門を名乗る当主が複数いることから、野田氏において蛭川親正（後の宮道源左衛門）の系統であることに意義を見出していると考えられる。

12代有盛は、一族衆を東へて隆盛を誇り、野田姓を名乗る。「盛」系統が「正」系統と交代したと言える。野田姓の採用は、前代までの蛭川系の勢力を抑え、野田地区の領主であることを宣言したと想定される。これにより「蛭川系野田氏」と「宇部系野田氏」が並立した可能性が考えられる。すなわち、系図作者の脳裏に「蛭川系」＝「正」系統、「宇部系」＝「盛」系統が想定されたのではないかと仮定しておく。なお、12代有盛が野田姓を名乗ることから、この頃には当地が「野田」と認識されていた可能性がある。宇部館跡に鎮座する八幡社に奉納された1650年銘の鯛子が久慈市指定文化財となっているが、銘文に「野田庄」がみられる。「庄」は通常荘園であったことを指すが、「野田庄」の由来は判然としない。一戸南部氏の一族である野田氏が経営する荘園を指す可能性もなくはないが、現状では野田氏関与以前から「野田」の地名があった可能性も全くないと言え難い。

13代直盛は1500年、14代治盛は1511年死去とある。12代有盛は死去年不明であるが、前後の代の関係性から、12代有盛は1472年に家督を継いで（あるいは篡奪して）、1500年に家督を譲る（あるいは没する）。12～14代まで続いた諱に「盛」が付く系統は、15代で一旦途絶える。

15代清政は、永正年間に野田氏に服属（宇野人家禄に記載有）し、野田姓を宇部姓に戻す。「清政」は、8代正清との繋がり意識した名の可能性も考えられる。諱に「政」が付くことから出自を「蛭川系」と想定する。

16代正盛は、「正」と「盛」の字が使われている。15代清政以降、野田氏に服属した宇部氏としては協調路線を敷かざるを得ないであろうが、あたかも両系統統一のような名は象徴的である。

17代恒安は一族衆の荒駒氏を打ち取っている。

18代正恒、19代正長は蛭川系であろうか。

19代盛秀・20代盛永は、諱に「盛」を持つ。20代盛永のころに、九戸政実の乱に関わる久慈勢の残党を打ち取ったという十三塚伝承がある。

小結

- ①「盛」系統と「正」系統が存在し、家督が別系統に移った時の当主の死去年が明かにされていない。系図作者の心理として、系統交代時是何らかの混乱・争乱があったと認識されたと推定される。出自不詳の蛭川親正を祖とする「正」を有する系統と、鎌倉期以来の在地豪族の「盛」を有する系統が並立している。「正」は野田氏の家督を継いだとされる蛭川新右衛門親正（後の宮道源左衛門親正）から下賜されたであろう。この時に宇部家中に蛭川系宇部氏が誕生したと考えられる。これは、一戸南部勢力（ここでは蛭川系野田氏を想定）による国人層の系列化の痕跡と考えたい。
- ②「盛」系統の12代有盛が野田姓を名乗ることは、蛭川系野田氏との対抗意識の表れであろう。ただし、詳細な記載や没年不詳の人物である。近世期の系図作者にとって、16世紀以降野田氏に服

属した宇部氏の立場上、12代有盛を英雄のように書き記すことは憚られたのではないだろうか。

- ③ 15世紀前半の様相は、少なくとも在地豪族の海辺氏（宇部氏）、蜷川系宇部氏、蜷川系野田氏、非蜷川系野田氏の勢力が想定され、各勢力は婚姻関係や争乱を通じて離合集散を繰り返したであろう。現在、城内で確認されている代表的な中世城館は、宇部館跡、伏津館跡、野田古館、山根館があるが、各城館付近の勢力は、伝承等を考慮すれば野田古館が一戸系野田氏と蜷川系野田氏、伏津館が蜷川系野田氏、宇部館が海辺氏（宇部氏）、が妥当なところであろうか。16世紀前半に城内を野田氏が掌握し、宇部氏が野田氏に服属するが、宇部館跡はその後、野田氏の居城のひとつとして機能する。
- ④ 15世紀後半～16世紀前半は、在地海辺氏（宇部氏）が野田氏を称して隆盛し、領域内のパワーバランスが崩れたと考えられる。蜷川系野田氏が圧迫されたところに、一戸南部系野田氏が混乱を収め、宇部氏は15代清政の代から一戸南部系野田氏に従い、海辺氏（宇部氏）は宇部館を出る。

（2）野田氏系図について

当主の変遷を第29表に示した。野田氏は一戸町野田郷を出自とし、代々野田城を居館としたとされる。一戸南部氏のなかでも有力勢力である。南部氏は糠部郡入部以来、周辺地域への拡大政策が続けたが、このうち一戸南部氏は主に閉伊郡方面への進出によって勢力を伸ばした。南部宗家としての地位確立を目指す三戸南部氏にとって一戸南部氏は「何事につけても一戸と相談して決める」間柄であり、近世を迎える前に一戸南部本家が途絶えたため後世に伝わっていないが、南部一族内でも重要な位置にいたと考えられている（菅野1992）。

野田氏は一戸南部初代の南部彦太郎行朝を祖とする。代々南部を名乗るが、野田姓は戦国末期の14代掃部助直親（はじめ政親）から使われている。系図上は沿岸部の野田地区との関わりを5代親継が野田古館野田口に居住することで確認できる。

4代実朝は延元2年（1335年）に没しているが、同年に宇部旨盛も没しているのは偶然であろうか。それとも当地域に何らかの緊張関係があった結果であろうか。なお、実朝以後、官職名として伊予守・薩摩守・掃部介が好まれている。

5代親継は、三戸南部信長の妾腹の子とされ、十府の古館（野田古館か？）に居住していた。59歳で没するまで、少なくとも野田地区海岸部の有力者であったと考えられる。なお、野田口の名称が、5代親継の頃から使われていたかは不明である。

もう一人の5代親正は、上方素浪人とされる人物で、蜷川新右衛門親正を名乗り、親継の養子となったとされる。親継没年から親正没年まで50年近く経過しており、親正が長命であったか、あるいは親継と同時代に生存していたかも不明である。実在した人物かどうかも含め検証すべきであるが、資料に乏しい。『野田領誌』によれば、武者修行中の親正を娘婿としてむかえ、閉伊郡内の争乱の平定に当たらせている。親正は後に宮道源左衛門を名乗るが、「源左衛門」は11代義親以降、好まれており、親正の系統であることを意識しての命名と考えられる。南部や野田を名乗らなれたことから、当人が家督を継ぐ意思はなく、6代行則の後見人的立場となって在地に勢力を伸ばしていったのだろうか。なお、親正は中世海蔵院に葬られている。

さて、蜷川家と言えば室町幕府政所代を代々努める家柄で、テレビアニメ一休さんに登場する「新右衛門さん」は蜷川新右衛門親当をモデルとしている。親当は將軍足利義教死後に出家して智蘊を号し連歌でその才能を発揮した。連歌師宗祇によって連歌7賢の一人にも選ばれている。親正像は、この蜷川家の傍流を装った創作にすぎない恐れがあるが、系図作者にとって、後世に影響を及ぼす人物であったため何らかの箔を付ける必要性があったのだろう。

6代行則は5代親継の死後に生まれていることから、親継の実子ではないだろう。6代行則没年の宝徳2年(1450年)は、宇部氏の13代直盛も没している。この一致は偶然であろうか。何らかの争乱の結果であろうか。なお、伏津館跡発掘調査成果によれば、廃城年代が15世紀中頃～後半とされており(岩手県文化振興事業団2014)、6代行則の生存期間中に伏津館が機能していたと考えられる。したがって、伏津館が6代行則の居館もしくは支城であった可能性を指摘しておく。

7～10代の在位が15世紀～16世紀初頭までで、このうち9代則光の没後に家督を継いだ10代行親がわずか4年後に没している。

11代義親は大永年間に宇部館に居住したとされる人物で、源左衛門を名乗っており、「蜷川系野田氏」の可能性が高い。宇部氏と野田氏の系図上で、義親は永世年間に野田氏に服属して宇部館を明け渡し、野田姓から宇部姓へ戻した宇部清政と同時期の人物と考えられる。11代義親のころに、宇部地区の「蜷川系」支配が確立したと考えられる。しかし、義親は『宇野人家禄』に記載があるもの、野田氏所蔵系図上には見当たらないという問題が残っている。

12代義継が天文10年(1541年)に没し、家督を継いだ13代則武(はじめ政義)の頃、宇部館の二重堀や土塁等の普請が進められたと考えられる。則武は騎男直親とともに天正19年(1591年)に起こった九戸政実の乱において、三戸南部氏側で戦って勝利者となるが、慶長5年(1600年)に没している。宇部館をはじめとする宇部・野田地区を守り抜いたのは則武・直親親子の功績として伝わっている。海蔵院に葬られている点は、蜷川親正、6代行則と同じである。

14代直親(はじめ政親で、南部藩主利直の偏諱を受けて直親となる)は、手勢を率いて九戸城包圍戦に参加し、南部藩2代当主となる南部利直に従った。南部利直の信頼厚く、小田原参陣、朝鮮出兵などに常に利直と共にあり、南部藩の家老職を務めた。近世に入って野田新館建設中、宇部館に居住し、新館完成後に宇部館を引き払ったと考えられている。ただし、直親自身は家老職として盛岡市内丸にあったとされる内丸屋敷に詰めることが長かったであろう。

15代以後は、近世以後のためここでは割愛する。

小結

- ①一戸南部氏の宇部・野田地区への関わりが5代親継の頃にはあったとされている。
- ②6代行則の後見人的立場が想定される蜷川親正という人物がおり、野田・宇部地区に与えた影響の大きさが、親正の後裔を自認するかのような名を有する当主が多数輩出していることから窺える。
- ③6代行則の没年と宇部直盛の没年が一致しており、野田地区に争乱が起こっていた可能性が想定される。なお、発掘調査成果として伏津館跡が彼らの没年頃の15世紀中頃～後半に廃城となった可能性が指摘されている。
- ④11代義親以降、野田氏は宇部館を居館としているようである。
- ⑤九戸戦に勝利した13代則武・14代直親親子が近世野田氏の基礎を築いた。

(3) 課題

複数の資料を吟味しながら史実を検証するという資料批判の原則に反しながらも系図を概観してみた。史実でない創作も多数含まれている可能性はあるだろうが、肝心の文献資料が蓄積されておらず、検証できない。しかし、物語的ではあるものの、ある程度史実・伝承が盛り込まれた系図であれば、少なくとも大きなイベントについては記載される傾向にあり、無視すべきではないだろう。今後は、考古学的検討、例えば城館の普請から廃城までの年代論的検討によって、既存文献資料の検証も若干

ではあるが進むものと期待する。

今回の発掘調査成果において、野田氏 13 代の南部則武の頃に、宇部館跡の普請が盛んに行われたと考えられる。また、中世における宇部・野田地区の歴史は、在地豪族の宇部氏（海辺氏）と野田氏の勢力が離合集散する歴史であるとの推論を提示しておく。

多くの問題を含む考察となってしまったことをお詫びするが、現状での資料的限界を表しているものとご理解いただき、今後の研究の踏み台となればと思う次第である。

7 宇部館跡破却に至る経過

豊臣秀吉に所領安堵された南部信直は、いわゆる山城破却令に従って、領地内の城館の破却に着手した。このことが天正 20 年（1592 年）の「諸城破却書上」で確認することができる。書上には、野田城破却の記載があり、一戸掃部介持分（野田 14 代直親と考えられる）とある。この野田城破却について、これまで野田古館のことと考えられてきたが、野田古館に明確な 16 世紀末の普請技術は見当たらない。また、野田氏は系図で概観したとおり、16 世紀以降宇部館跡に当主がおり、野田の当主がいた場所が、「野田城」であったとすれば、書上に記載された「野田城」は現在の宇部館跡のこととするのが自然である。13 代直親は 12 代則武と当初同居しておらず、南の野田古館に居たことから、直親が当初 12 代則武の嫡男でなかった可能性がある。九戸戦前に野田氏の方向が定まり、直親が嫡男として迎えられ、宇部館に居住することがその証左となろう。なお、直親が野田家嫡男でなかった可能性については、野田村フォーラム（野田村 2015）において、菅野文男氏による言及があった。12 代則武の没した慶長 5 年（1600 年）以後は、13 代直親が当主として宇部館に居り、野田新館建造後に、宇部館を引き払っている。これらの推測が成り立つならば、16 世紀代に宇部館は「野田城」であったと結論する。さらに、野田城とは、「野田地区にある城」ではなく、「野田当主の居る城」と認識されるとすれば、

1 期：野田古館期（14 世紀前半以降で野田氏 5 代親繼以降）

2 期：宇部館期（16 世紀代で野田氏 11 代義親以降）

3 期：野田新館期（17 世紀前半以降で野田氏 14 代直親以降）

の変遷を辿って人々の記憶にそれぞれ残ったと想定しておきたい。

第28表 宇部氏当主の寛遷

当主	姓名	特異	年	代
初代	山盛	譲に盛	1200	1220
2代	忠盛	譲に盛	1280	1280
3代	朝盛	譲に盛	1300	1320
4代	安盛	譲に盛	1340	1360
5代	智盛	譲に盛	1380	1400
6代	重頼		1420	1440
7代	朝盛	譲に盛	1480	1500
8代	正清	譲に正	1520	1540
9代	正秀	譲に正	1580	1600
10代	正明	譲に正	1620	1640
11代	正利	譲に正	1660	1680
12代	有盛	譲に盛、 野田を 名乗る	1700	1720
13代	貞盛	譲に盛、 野田氏	1740	1760
14代	治盛	譲に盛、 野田氏	1780	1800
15代	清政	譲に正	1820	1840
16代	正盛	正と盛	1860	1880
17代	朝安		1900	1920
18代	正利	譲に正	1940	1960
19代	正長	譲に正	1980	2000
20代	徳秀	譲に盛	2020	2040
21代	隆水	譲に盛	2080	2100
22代	賢盛	譲に盛	2140	2160
23代	正吉	譲に正	2180	2200
24代	正盛	正と盛	2240	2260

1200 1220 1240 1260 1280 1300 1320 1340 1360 1380 1400 1420 1440 1460 1480 1500 1520 1540 1560 1580 1600 1620 1640 1660 1680 1700 1720 1740 1760 1780 1800 1820 1840 1860 1880 1900 1920 1940 1960 1980 2000 2020 2040 2060 2080 2100 2120 2140 2160 2180 2200 2220 2240 2260

1200年 貞元元年(1222年) 死去
 1280年 承元2年(1293年) 死去
 1300年 承元2年(1293年) 死去
 1340年 崇徳元年(1309) 死去の記載は、並替元年(1296年)か？
 1380年 並替元年(1309) 死去
 1420年 明徳3年(1399年) に何れも頼朝に任じられる？忠永10年(1403年) 死去
 1440年 堀川親政門院正と同時代で、親政死去(1394年)の2年後に官職を得ている記載あり。
 5代とは新頼？重盛が正しい
 1480年 貞永30年(1423年) 死去
 1500年 貞永34年(1427年) 死去
 6代重頼から「頼」を漏らしたか
 1520年 文安3年(1446年) 死去
 1540年 寛政元年(1600年) 死去
 1580年 文明4年(1472年) 死去
 1700年 頼の代より藤定 堀川清野田氏と対応？
 1720年 明徳9年(1500年) 死去
 1740年 永正8年(1511年)
 1760年 永正年間(野田氏に譲り、宇部郡へ戻す)
 1780年 享禄2年(1530年)
 1800年 天文20年(1551年)
 1820年 前代との関係から1551年以降死去
 1840年 不明
 1860年 不明
 1880年 十三代伝承
 1900年 正徳4年(1647年) 死去

○は代継親族存在時代に合致し、その年部の宇部系当主

■は、死去年記載がある

■は、推定される在位期間のうち、継承期間

■は、推定される在位期間のうち、不詳な期間か、推定が不明なもの

引用・参考文献

<論文・研究報告等>

- 菅野文男 1992 「第2節 野田氏と南部氏」『野田村誌』九戸郡野田村
菅野文男 2015 「戦国時代の久慈と糠部 - 野田氏一族の動向 -」野田村
柴田知二 2014 「岩手県北の中世城館」『第2回 南部学研究会 - 中世南部氏と北日本の中世城館 -』青森県南部町教育委員会
野田村教育委員会 2015 「野田村考古学フォーラムⅡ - 中世の野田村を考える -」野田村

<報告書等>

- 青森県埋蔵文化財センター 2003 「宮田館遺跡Ⅲ・采山(2)遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第344集
一戸町教育委員会 1991 「平成2年度一戸遺跡群詳細分布調査報告書」一戸町
一戸町教育委員会 1999 「姉帯城跡」一戸町文化財調査報告書第41集 一戸町
岩手県教育委員会 1986 「岩手県中世城館分布調査報告書」岩手県文化財調査報告書第82集
※岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書(以下、岩文振埋と略す)
岩文振埋センター 2002 「山根館跡発掘調査報告書」岩文振埋報告書第390集
岩文振埋センター 2014 「調査概報 伏津館跡」『平成25年度発掘調査報告書』岩文振埋報告書第630集
岩文振埋センター 2015 「調査概報 伏津館跡」『平成26年度発掘調査報告書』岩文振埋報告書第647集
久慈市教育委員会 1992 「久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ」久慈市埋蔵文化財調査報告書第14集
記念事業実行委員会第二部会編 1977 「宇部小学校百年誌」宇部小学校創立百周年記念事業実行委員会
野田村教育委員会編 1982 「天保七年 註釈宇野人家録」野田村
野田村教育委員会 1987 「古館山」野田村
森 嘉兵衛 1969 「九戸地方史(上巻)」九戸地方史刊行会

写 真 图 版



航空写真 (西から)



1・2号堀 (北西から)



近景① (南から)



近景② (南から)



近景① (南西から)



近景② (南西から)



1号堀 断面 (南から)



2号堀 南側断面 (北から)



2号堀 北側断面 (南から)



1号土塁 近景 (南から)



2号土塁 近景 (南から)



1号切岸 近景 (南から)



2号切岸 近景 (南西から)



八幡神社 近景 (東から)



曲輪1 近景 (南から)



曲輪2 近景 (南から)



曲輪3 近景 (南東から)



曲輪4 近景 (南東から)



曲輪5 近景 (南東から)



1・2号堀 現況



現地説明会風景



土壘残存状況



主郭から見た喰い違い虎口



曲輪5方向から見た喰い違い虎口



中世居館跡推定地に南部藩代官所跡地碑



八幡社奉納銅口(現久慈市指定文化財)(斜めから)



八幡社奉納銅口(現久慈市指定文化財)(直上から)



宇部家墓所



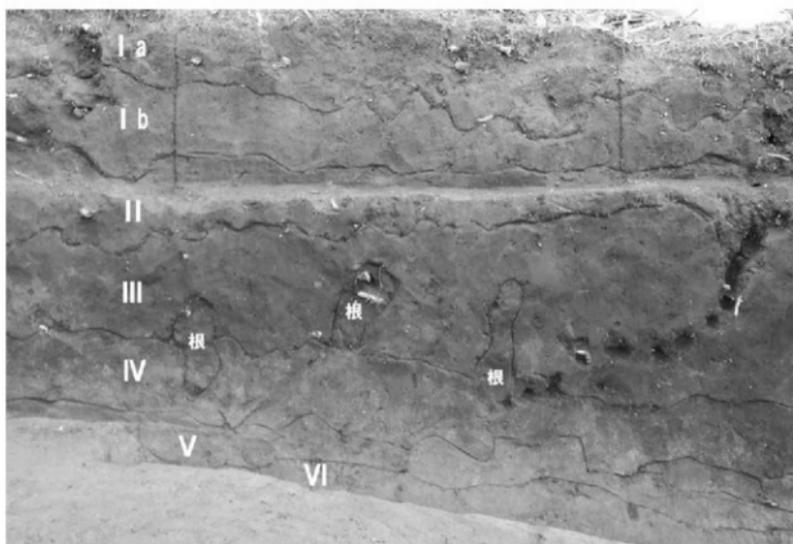
久慈城主郭現況



写真図版9 縄文土器、輸入磁器、石器、石製品、古銭



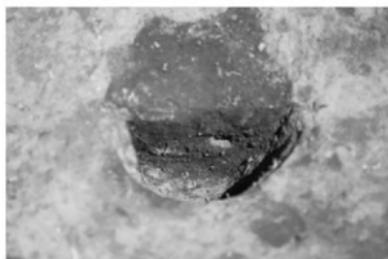
調査区北西側丘陵部 基本土層



調査区南西側谷部 基本土層



近景 (東から)



P3 断面 (南から)



P4 断面 (南から)



断面 (南から)



遺物出土状況（南西から）



東西断面（北西から）



南北断面（北東から）



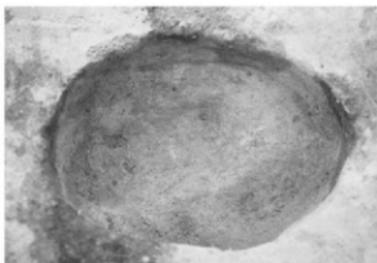
2号竪穴建物跡 床面近景 (南西から)



P1 近景 (南東から)



P3 土層断面 (北東から)



P3 近景 (北東から)



カマド・P2 断面 (南西から)



カマド・P2 近景 (南西から)



カマド燃焼部・煙道 土層断面 (南東から)



3号・4号竪穴建物跡 近景 (南から)



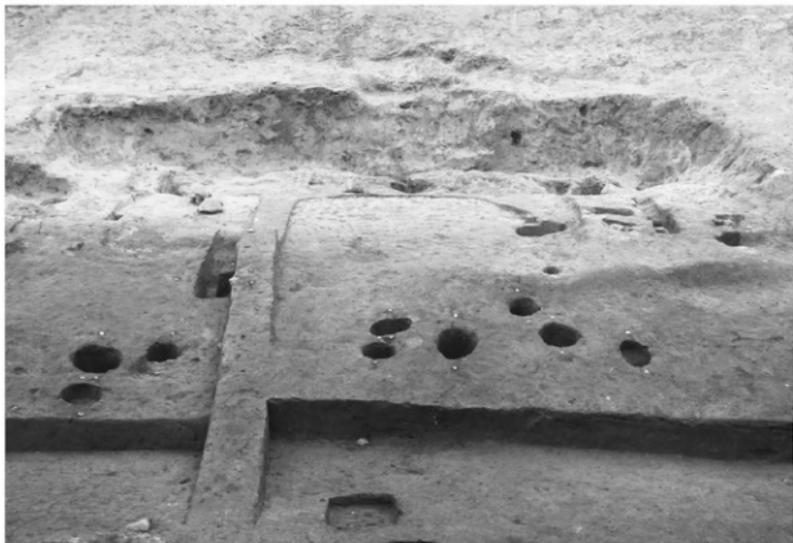
4号竪穴建物跡 近景 (南から)



5号竪穴建物跡 近景 (南から)



5号・6号竪穴建物跡 近景 (南東から)



7号竪穴建物跡 近景（東から）



7号竪穴建物跡 近景（西から）



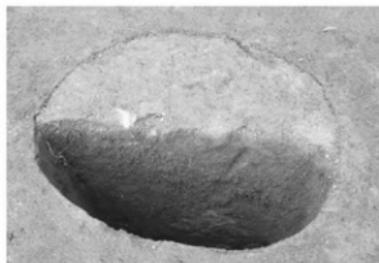
近景 (南から)



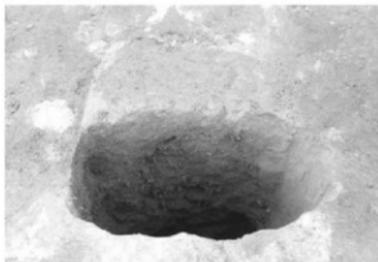
断面 (南から)



P7 断面 (南から)



P20 断面 (南から)



P40 土層断面 (南から)



作業風景



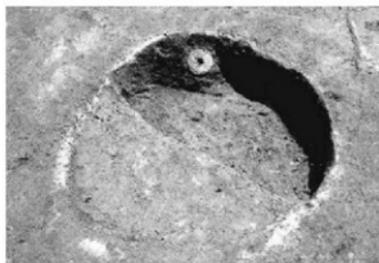
7・8号竪穴建物跡 近景 (南東から)



8号竪穴建物跡 断面 (北西から)



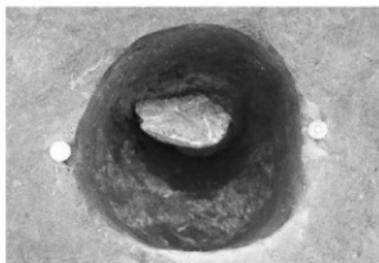
1・2号掘立柱建物跡 近景 (南東から)



P133 遺物出土状況 (北西から)



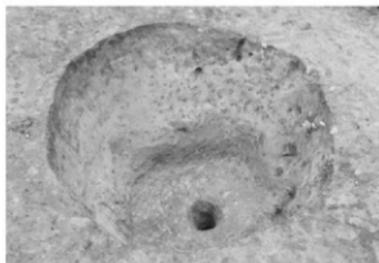
P133 断面 (南東から)



P111 根石 出土状況 (北東から)



P111 断面 (北東から)



1号陥し穴状土坑 近景 (南東から)



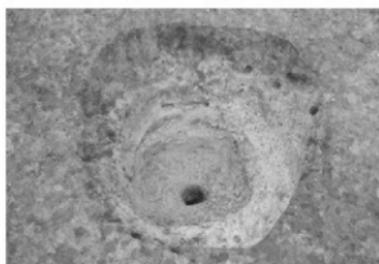
1号陥し穴状土坑 断面 (南東から)



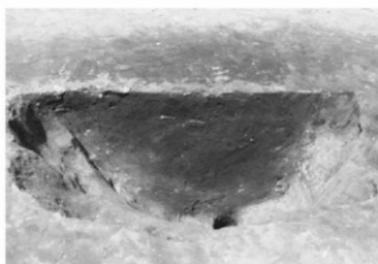
2号陥し穴状土坑 近景 (東から)



2号陥し穴状土坑 断面 (南東から)



3号陥し穴状土坑 近景 (南から)



3号陥し穴状土坑 断面 (南から)



4号陥し穴状土坑 近景 (北東から)



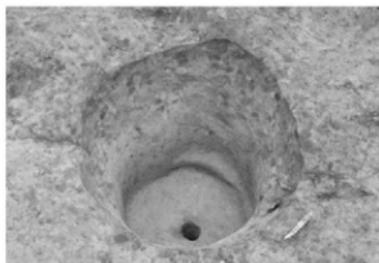
4号陥し穴状土坑 断面 (北東から)



5号陥し穴状土坑 近景 (北西から)



5号陥し穴状土坑 断面 (北西から)



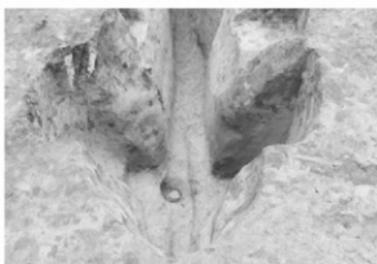
6号陥し穴状土坑 近景 (北西から)



6号陥し穴状土坑 断面 (北西から)



7号陥し穴状土坑 近景 (北東から)



7号陥し穴状土坑 断面 (北東から)



8号陥し穴状土坑 近景 (南東から)



8号陥し穴状土坑 断面 (南西から)



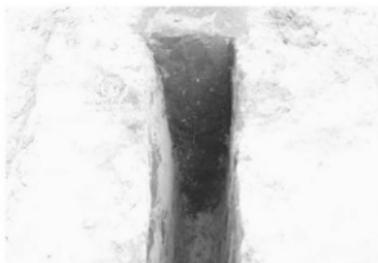
9号陥し穴状土坑 近景 (北東から)



9号陥し穴状土坑 断面 (南東から)



10号陥し穴状土坑 近景 (南から)



10号陥し穴状土坑 断面 (北から)



11号陥し穴状土坑 近景 (南から)



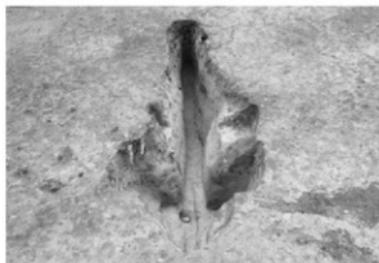
11号陥し穴状土坑 断面 (北から)



12号陥し穴状土坑 近景 (北東から)



12号陥し穴状土坑 断面 (南西から)



13号陥し穴状土坑 近景 (北東から)



13号陥し穴状土坑 断面 (北東から)



14号陥し穴状土坑 近景 (東から)



14号陥し穴状土坑 断面 (東から)



15号陥し穴状土坑 近景 (南東から)



15号陥し穴状土坑 断面 (南東から)



16号陥し穴状土坑 近景 (北東から)



16号陥し穴状土坑 断面 (右:掘り足し・北西から)



1号カマド状遺構 近景 (南東から)



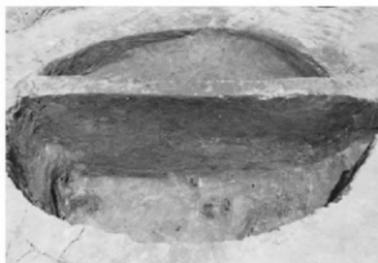
1号カマド状遺構 南北断面 (南東から)



1号カマド状遺構 東西断面 (北から)



1号土坑 近景 (北から)



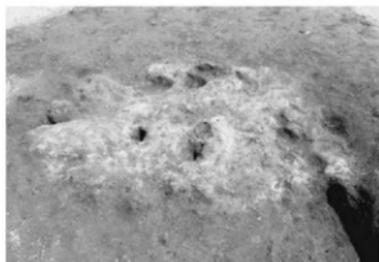
1号土坑 断面 (南から)



1号土坑 炭化物出土状況 (北から)



2号土坑 近景 (北東から)



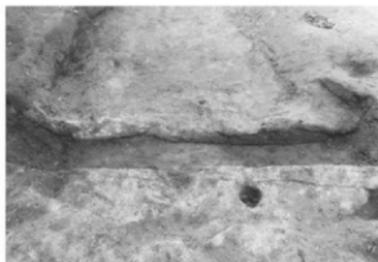
2号土坑 焼土範囲 (南東から)



2号土坑 断面① (南東から)



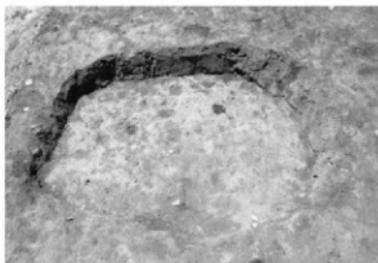
2号土坑 遺物出土状況 (北西から)



2号土坑 断面② (南東から)



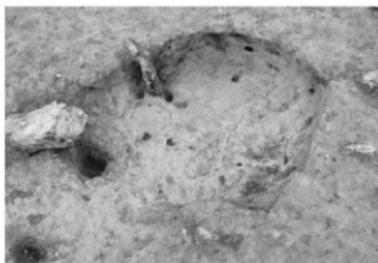
ビット群 近景 (南東から)



1号中世墓墳 近景 (北東から)



1号中世墓墳 断面 (北東から)



2号中世墓墳 近景 (北東から)



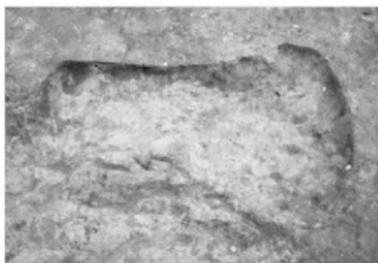
2号中世墓墳 断面 (北東から)



3号中世墓墳 近景 (南東から)



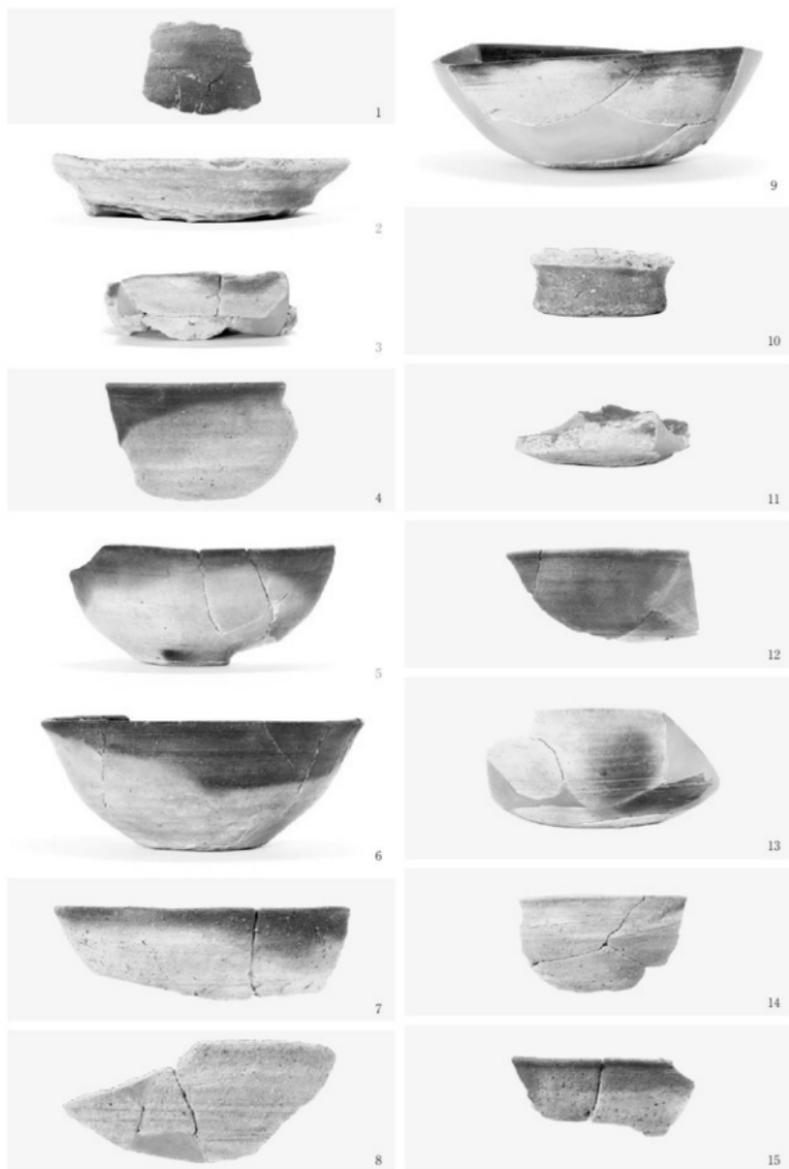
3号中世墓墳 遺物出土状況 (南東から)



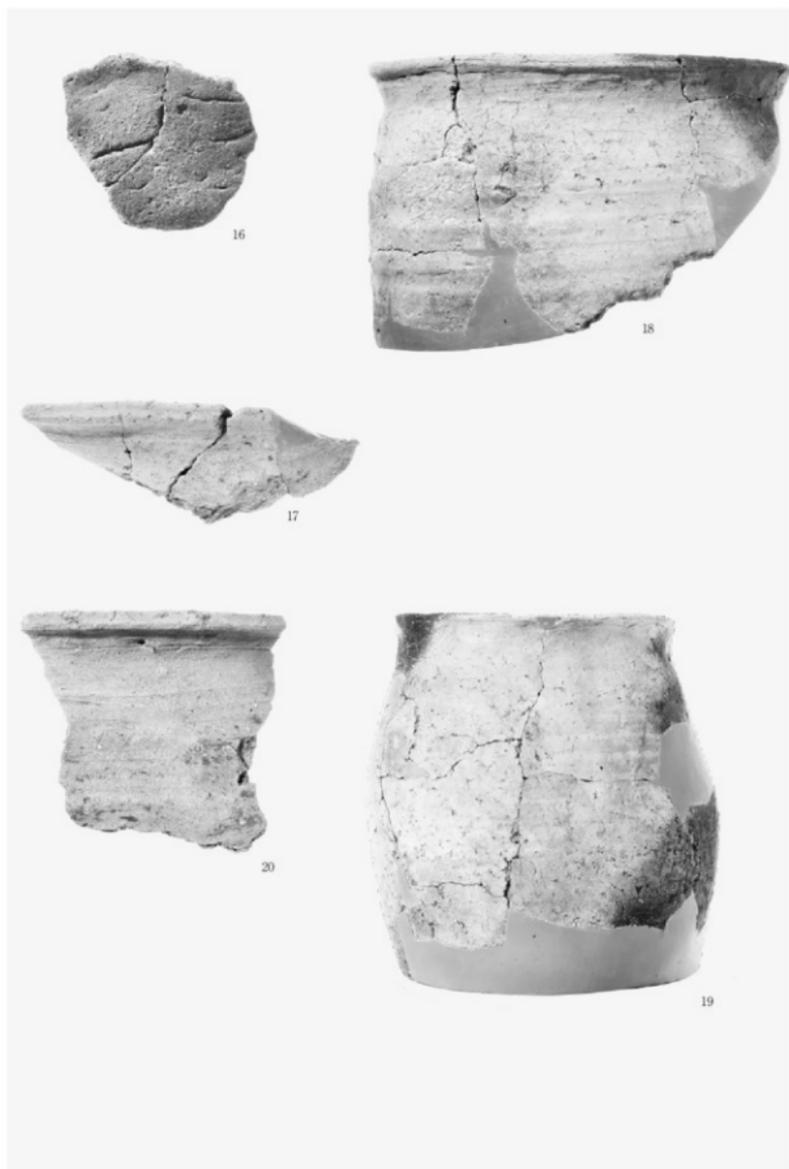
4号中世墓墳 近景(南東から)



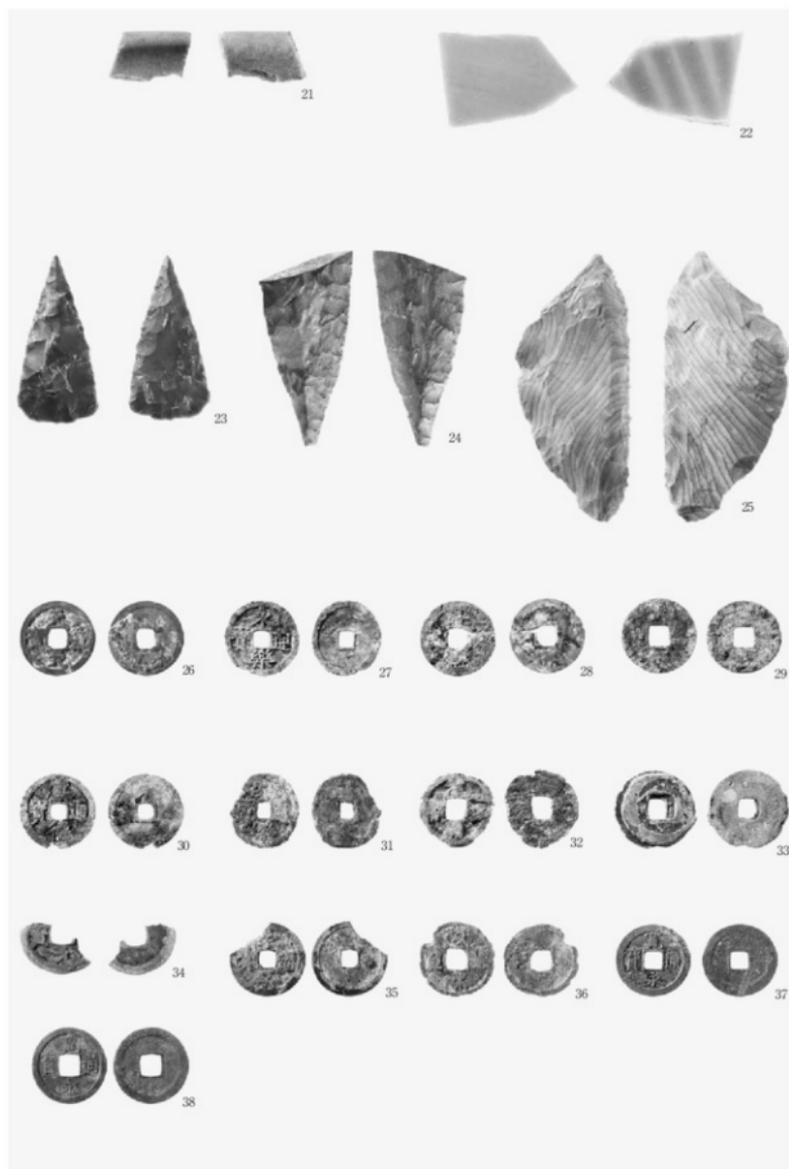
4号中世墓墳 炭化物出土状況 (東から)



写真図版27 土師器(1)



写真図版28 土師器(2)



写真図版29 輸入磁器、石器、古銭

報告書抄録

ふりがな	うへだてあと・きたのこしいせきはつちつちょうさほうこくしょ							
書名	宇部館跡・北ノ越遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第654集							
編著者名	米田 寛							
編集機関	公益財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2016年2月23日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		㎡	
宇部館跡	岩手県久慈市 宇部町第3地 割	03207	JG50-0028	40度 7分 53秒	141度 46分 41秒	2014.05.07 ～ 2014.09.19	1950㎡	三陸沿岸道路 建設
北ノ越遺跡	岩手県久慈市 宇部町第3地 割		JG50-0027	40度 7分 52秒	141度 46分 37秒	2014.05.07 ～ 2014.09.19	7,550㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宇部館跡	城館跡	縄文		縄文土器		館跡西側に普請された二重堀の一部を調査対象とした。堀・土塁の普請は、16世紀後半以降の特徴を有する。		
		中世	土塁 切岸 堀	2条 2箇所 2条	輸入染付碗皿類、石 製塔壇、			
		近世		寛永通宝				
北ノ越遺跡	集落跡 狩猟地	縄文	建物跡 陥し穴状土坑	1棟 16基	石蔵、尖頭器、削器	縄文時代の陥し穴状土坑の密集分布が見られた。宇部館跡の対岸に位置し15～16世紀の建物跡や墓塚が確認された。		
		平安	建物跡 土坑	1棟 2基	土師器			
		中世	建物跡(堅穴・工房) 建物跡(獨立柱) 中世墓塚 ピット	6棟 2棟 4基 104個	青磁、古銭(模倣銭)			
要約	<p>北ノ越遺跡は、宇部館跡と隣接する丘陵地に位置する。遺構は、縄文時代の陥し穴状土坑、平安時代の建物跡と土坑、中世後半の建物跡と墓塚、カマド状遺構の調査を行った。中世において宇部館跡を支えた人々の活動痕跡が確認された。</p> <p>宇部館跡は、伝承では平家の落人の入居をはじめとする。今回の調査では、16世紀後半の普請痕跡が確認された。また、堀埋積土中から縄文土器が継ぎまって出土していることから、宇部館主郭範囲の造成時に、縄文集落の一部が削平された可能性が考えられる。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 654 集

宇部館跡・北ノ越遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成28年2月16日

発行 平成28年2月23日

- 編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185
電 話 (019) 638-9001
- 発 行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電 話 (0193) 62-1711
- (公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電 話 (019) 654-2235
- 印 刷 株式会社 阿部印刷
〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町2-2
電 話 (019) 624-2242
-